

# 演劇会議

総会・合同セミナー特集

第3回東西合同演劇セミナー・雑記	萩坂桃彦	1
◎ 特集・1 分科会チューターよりの報告		8
飯田信之・赤松比洋子・高尾豊・石垣政治・岡部豊・齋藤誠		
◎ 特集・2 セミナール参加の感想		22
三好律子・松尾せつ子・藤木久美子・戸保孝・汲田正子		
西り演第19回総会・寸感	仲武司	33
西り演総会に参加して	島田静仁	35
東り演第18回総会をめぐって	黒沢参吉	37
東り演総会の雑感	早見栄子	41
□ 劇団通信		43
関西における戦前プロレタリア演劇の研究(3)	大岡欽治	60
芳地さんの提案に賛成	小関智弘	68
■ 劇評		
「城」(劇団潮流)	大鏡時生	69
「男どあほう大忠臣」(劇団2月)	井上満寿夫	71
「ムッシュ・フェューグ」(京芸)	小松徹	74
「母」「アリババ」「かすみあみ」	丸子礼	77
観劇雑感	萩坂桃彦	80
□ 私にとって衝撃的だった		
フィレンツェ演劇祭・レポート	嶋田邦雄	86

46

1980年11月

¥400

光が、音が、人が、ふくらみはじめるその瞬間

- \* 演劇その他・企画製作スタッフ派遣
- \* 舞台用器材貸出・販売
- \* 舞台美術・照明プラン作製・操作



(有)アート・ステージ・プロ

京都市左京区聖護院山王町43  
コーボなぎ401  
TEL (075) 751-6201(代)

# 演劇会誌

総会・合同ゼミナール特集

第3回東西合同演劇ゼミナール・雑記……………萩 坂 桃 彦…1

◎特集・1 分科会チューターよりの報告……………8  
 飯田信之・赤松比洋子・高尾豊・石垣政治・岡部豊・斎藤誠

◎特集・2 セミナール参加の感想……………22  
 三好律子・松尾せつ子・藤木久美子・一戸保孝・渡田正子

西リ演第19回総会・寸感……………仲 島 武 司…33  
 西リ演総会に参加して……………島 田 静 仁…35  
 東リ演第18回総会をめぐって……………黒 沢 参 吉…37  
 東リ演総会の雑感……………早 見 栄 子…41

□劇団通信……………43  
 関西における戦前プロレタリア演劇の研究……大 岡 欽 治…60  
 芳地さんの提案に賛成……………小 岡 智 弘…68

■劇 評……………69  
 「城」(劇団潮流)……………大 編 時 生…69  
 「男どあほう大忠臣」(劇団2月)……………井 上 松 徹…71  
 「ムツシユー・フューズ」(京芸)……………小 丸 子 礼 二…74  
 「母」(アリスババ)「かすみあみ」……………丸 萩 礼 彦…80  
 観劇雑感……………萩 礼 彦…80

◎私にとって衝撃的だった……………86  
 フイレンツェ演劇祭・レポート……………嶋 田 邦 雄…86

1980年11月 400円

46

光が、音が、人が、ふくらみはじめるその瞬間

- \* 演劇その他・企画製作スタッフ派遣
- \* 舞台用器材貸出・販売
- \* 舞台美術・照明プラン制作・操作

ART PRO (有)アート・ステージ・プロ

京都市左京区聖護院山王町43  
 コーポなぎ401  
 TEL (075) 751-6201(代)



しかし、本当に集まるだろうか。

八月二十三日午後六時開会。あれは、別館の「瑞峰の間」というのだったろう。部屋の境を抜くと九〇畳の大広間。そこにびっしりと埋まった頭や顔。

司会者団に三島幸司(はぐるま) 瀬谷やほ子(京浜) 和田雅子(きづがわ) 西尾臣示(未来)の諸君。

稍々紅潮した面持ちの、黒沢東リ演議長、中西リ演議長の挨拶で、第三回東西合同演劇セミナーの幕はあいた。

議長の挨拶について、恒例の参加者紹介である。東は北海道、西は九州から、交互に次々と呼ばれて、拍手がわたってゆく。集団からたった一人参加のサムライにも拍手がわく。十数人ほどもソロツと立つと、うおーッというどよめきがる。

最後に、未だ呼ばれない人はありませんかの声がかかったのでぼくは手を挙げた。「演劇会議」が全く忘れられるほどにも落っこんでいたという証拠でもあったらうか。

やはり熊本氏の言に違わず、集まったのである。

### モデル上演「かすみあみ」

岡安伸治作・演出による世に下乃一座の「かすみあみ」の上演であったが、セミの案内にも、次々と発行されたセミナー「かわら版」にも、ついに配役が発表されなかったことが悔やまれる。

あの主役のガードマンに扮したのは里村孝雄(世に下)、部長が石塚幹雄(土くれ)、職員が葉松睦明(展望)、もう一人の問題を百何問まで読み上げてゆく職員が川村富雄(土くれ)、ヤクザが川島柳一(全通)は記憶しておいてい。

とくに岡安戯曲はあの里村君を欠いては成り立たぬとも思えるので、形象に迫る彼々の様々な努力は記憶されなければならない。

愚直で、どこか狂熱的な男が岡安戯曲の身上である。この、もがき、あがく最底辺の男を蜘蛛の巣にひっかけるのが、ファッショムであり、体制であり、そして差別と攻撃のしがらみでもあるとするのが岡安君の作意でもあるだらう。どこかニヒルな冷笑感を漂わしつつ、あたたかい哀切感をも伴うのは、岡安君の貴重な抒情である。里村孝雄はこれを実にうまく出す。

岡安君は、今のところ断片的ではあるが、日本の現実、断層におけるアクチュアリテイな執着しつづけている。更に確かな構成と豊厚な戯曲の世界は、未だのそめぬけれど、いづれその可能性を見ることも、許されるかもしれない。

「かすみあみ」はほくには再見であったがやはりそれだけのことはあった。里村君が、東西リ演のつわさを前にしての緊張感か、ややトリビリアリズムにこだわった演技になっていたがやはり仲々鮮明だ。部長とヤクザが初演より大分メリハリがついていた。

幕切れの、センターの職員(葉松)だった男が再審査を受けるというオチには、ぼくはクドサを感じて、初演でカットを申し入れたのだが、ニアニア笑っていたので承知したと思っていたら岡安君はきき入れていない。こういう強情さには怒っても仕様がな。

この物語は、小島を専門にとらえる「かすみあみ」が哀れなガードマンをとらえた、ヒドイ、アフレナ話ということだらう。観客に怖さと怒りをおこさせるのが狙いである。

### 「フィレンツェ」報告

四〇分程のモデル上演がはねると、螺旋形の渡り廊下を縫って、全体集会々場に当てられた本館二階の「望湖の間」に移動。

ぼくは会場の入口、スリッパが山をなす廊下の一角で、「本屋」を開業する。内心は誌代受付が本命である。そのためもあって場内の催しに集中できない。しかし、こぼやしさんの豊富なスライドを駆使した、フィレンツェ演劇祭の報告は、大いに受けているらしい。爆笑のどよめきや、息をのんだシリアが熱気に包まれて場外に流れてくる。

話の要旨は、すでに本誌45号でも「報告」されているけれど、肉声はまた別の魅力であったようだ。

ここで一寸私見になるが、こぼやしさんがフランスのトルト氏の話から受けたという衝撃の内容—これは聞き放しでは、理解に十分さがのこる。事実、そういう声が、セミの感想のなかにも見えている。アレヒトへの理解が不十分では、折角の「アレヒト・ノ」もかみ合って来ない。

アレヒトの反ファッショム演劇は、今やたしかに何かと検証に値するけれども、かれの須いた演劇的手法そのものまでが死滅した考えるのには、まだぼくはついてゆけない。む

しろアレヒト受容については、本当の意味では、日本では始まったばかりでさえある。

ただイデオロギイや概念、それがひとつの共通項のもとでの演劇運動は形骸化してきたことは事実である。そして、あらためて、細分化した、断片化した日常性や人間の原点において演劇の本質を捉えなおさなければならぬとするのも、ほぼわかる。しかしそのへんの所を単純に自分の方にひきつけての理解は危険である。まさかここに到って、自然主義や瑣末な写実主義への回帰ということはいえな。

こぼやしさんに続いて、後藤陽吉、島田静仁、藤木久美子氏ら、青年劇場からの、まさにフィレンツェ国際演劇祭の場で、「夜の天い」(接触)を上演して、肌身にこたえる経験をおした実感のあふれる話が附加された。

「お礼の挨拶に立った後藤さん、島田さん、私に注がれた目の中に、またそのあとの夜の交流会や分科会で皆さんが寄せられた言葉の中に、大きな青年劇場に対する期待が感じられずにはいられませんでした」と藤木さんが青年劇場の団内ニュースに述べている。

### 大交流会の要覧

午後10時はまわっていたかも知れない。もう始まったらしいというので、竹内敏晴氏、黒沢氏とつれだつて急ぎ足で、延暦寺会館の駐車場いづれにしたらえた、野外交流会場に赴く。

何という幸運であらう。時にははげしく、時には泣き出すように、降りつ止みつしていた雨空に、ここで星が出ようとは。天、未だ「リアリズム演劇」を見棄てざりしか。

ところで、全く書きようがない。紙コップにビールや酒をもらって、ふらふらしていると、あちこちの物産店の屋台?から呼びこまれる。飲み放題の酒も、そうもいかなくなつたようだ。

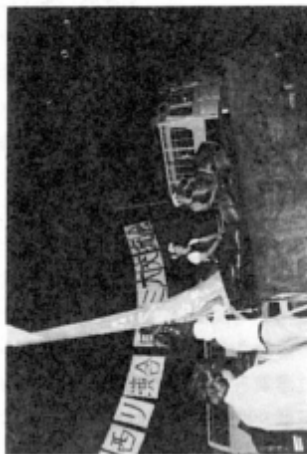
ちなみに当夜の出店を列記すると、ほしだら(支木)、益子焼(さっぱ)、みせせんべい(岡崎演集)、乾物珍味(展望)、かたやき(土野)、うなぎパイ(からら風)、ワイン(やまなみ)、笹かまぼこ(仙台)、水戸納豆(おけら)、飛駄の赤かぶ(はぐるま)、万古焼(四日市)、広島菜(月曜会)、すだち(阿波子)、からしめんたい(福岡現代)かわはき(若君座) 舞仁ドロップ(きづがわ) おでん(未来)、ホルモン焼(劇団大阪)、

八橋(京都自演)とある。

ことわっておくが、これは一店づつ、覗きこんでたしかめたのではなく、ゼミナール・プログラムからの転記である。従って実際にはこのほかに未だ有ったかもしれぬ。売れ残って損をしたという「おにぎり」の出店はどこだったか。

ぼくの手提袋もいつのまにか一杯になっていた。からしめんたいは、我が家に持ちかえって頗る好評であった。

提燈を流して飾った、見事な設営の舞台は、



東西の大鼓の競演で幕があいた。

未来、息吹、京浜、世仁下……。それに踊り、歌……。

ゼミの速報かわら版No.4に、何が一番良かったかによると

☆まず、東西大鼓の連打です。聞いている

私も踊り出しました。(女性)

☆河内音頭。(男性)

☆「わかもの」の合唱。(男性)

☆ほんまにみんな良かった。(男性)

☆郡上踊りが良かった。(女性)

☆すごい！全然知らない人と友達になれて良かった。(女性)

とあり、

「もう何ていったらいいか、感激の連続でした。会ったこともない人たちと、はじめて言葉をかわしたときの気持というのは、たとえようもなく、うれしくすてきなものです。お酒の酔いも手伝って、みんながみんな手をとりあって、ラストにうたった若者たちは、絶体忘れられないものです。芝居というつながりは、こんなに力強く大きいものなのかということがすごくよくわかりました」

(中島かこーはぐるま研究生)

では、老いも若きものよるこびが云いつく

されているだろう。

ぼくもこの交流会で、一人の有難い知己を得た。京都演舞の三好律子さんで、ここに使用してもらっている写真も三好さんのご好意である。

### 竹内敏晴氏の記念講演

▲講演は第二日目の午前九時。この條りの執筆は黒沢氏におねがいました。したがって、ここは独立して読んでいただきたい。▼

竹内敏晴氏の講演は、それが終わったとき会場に満たされた感銘を予測して準備したというものでは、全くなかった。ぼくらの誰もが、もとどごう会のメンバーで、のち変身等の劇団でいくつかの前衛劇の演出をし、今は大学の講師をやりながら自分の名を冠した演劇研究所の主宰者、という程度の予備知識しか持っていなかったで、事前に竹内氏からどうい話をしたらいいかを問われて、若干とまどういきさつもあったりした。

それでも七月下旬、萩坂と黒沢がお逢いして打合せをやったときには、その著書「こぼれが唄かれるとき」読後の感動が新鮮にあっ

て、書中でとりあげた人間の可能性を勇く実跡の作業をせよ……と依頼できたし、竹内氏と別れた渋谷駅地下でビールをのみながら、幅広い話が聴けると一人では話合った。

さて、会場に満たされた感銘。と書いたが、それを再現することは(多くの講演も同様だが)、全部文字化しても不可能というしかないし、特にこの講演の場合、垂旨など並べても殆ど意味ない気がする。こういう話は生きもので、その場で体ごと受けないかぎり魚拓で釣りの情景を撃撃するより難しい。

三年前の一九七二年以来、竹内スタジオが解放教育の実践校一兵庫県立湊川高校文化祭に「幻に心もそぞろ狂おしのわれら将門」新られの仙太「田中正造」と毎年芝居をもつていき、一般に学力低い落ちこぼれとみられている生徒たちに、どうい迎えられ方をしたかということから、強度の言語障害をもつM青年がレッスンを経て田中正造役に対峙していく格闘の経過、少年期から難聴という負担をせおった竹内氏自身が、聴こえ話せるようになって逆に演劇に感じる、本当の対話の欠如、そこからさらに演者自身と役、内発するものとセリフ、日常性から脱却して真の自己に遭遇するための道化(クラウン)と即

興の役割、そして、湊川高校のひとりの女生徒がかたく閉じていた自分を、授業の中で花のように可愛く聞いていく写真とあわせてのしめくりまで、ぼくらはそこに演劇の奇蹟。を語りきかされた、と言っている。

「どん底」ルカ役についてのスタジオの生徒が、自殺した父親の最後の話しかけをきくのが厭で逃げた俺に、ひとの身になってやる役はできない」と煩悶する挿話に、ぼくらがにじませた涙は、ぼくら人間が生産かけるにふさわしい演劇の、ふかい奥行へのおのきと思慕だったかもしれぬ。かれがその告白のあと、決意してルカをやったときいたとき、会場をつんだため息は静かな静かな拍手にきこえた。

講演のなかで竹内氏が、くりかえし用いて耳にのこった「とどる」という動詞がある。通るとも、徹るとも、さらに透るとも書く。

湊川高校の生徒たちに清水邦夫の芝居がまぎれもなくとおった、その経験の蓄積からかれらにとおるかとおらぬかが、芝居をはかる基準になったという話。言葉(セリフ)がとおるというのは、音声として届くことではなく、相手(観客)の胸の中でそれが成立することだという話。客にみせるために芝居をや

るのではなく、自分が本当の自分になる営為を芝居でやるのだが、そのとおそうとするものを深く受けとめる観客が不可欠だという話。かつて広澤常敏氏が「踊る」と言ったことと繋りて、ぼくらの労働の示唆になる意だ。

演劇が教育、治療と連携して人間を医やし生きなおさせるという、終り近くの論旨はそれ自体大きな独立課題だが、そこへの接近を望む向きには「こぼれが唄かれるとき」とあわせて、林竹一氏の(湊川高校その他での授業実践をめぐる)「教育の再生をもとめて」湊川でおこったこと(筑摩書房)「教師たちとの出会い」(国土社)等の精読をお奨めする。

### 分科会・全体集會・結び

分科会は四本立てで①創造理念と組織②創造的スタッフの活動とは③レパートリーと今日の観客④劇団と私の創造。

参加者全員がこれに割りふられ、残っているのは、事務局員と書籍販売コーナーの留守番萩坂くらいのもので、延暦寺会館の22の部屋は討議の熱気をはらんで、くぐもつていた。ここで参考のために、各分科会のチェック

4  
5

一を紹介しておく。そのうちの何人かの方に短い報告をおねがひした。

第1分科会 浅井克彦(岡崎) 飯田信之

(さっぽろ) 合田幸平(どろ) 赤松比

洋子(きつがわ)

第2分科会 渡辺明治(名古屋演集) 狩野

恭光(同) 藤本文夫(こじか座) 福井

晴成(大阪)

第3分科会 久保田明(名古屋) 石屋政治

(仙台) 境野修次(石るつ) 高尾豊(生

活舞台) 大坊晴彦(息吹) 下村清一(草

の志)

第4分科会 佐藤伴造(弘演) 四部豊(京

浜) 加藤武夫(すがお) 米長口貞(や

まなみ) 岸本敏朗(西記念) 金沢百合

子(未来) 又川邦義(わたち) 斎藤誠

(大阪)

全体集会では各分科会からひと口感想で大いにわき、つづいて西演事務局長・藤沢薫氏の朗読で、「一九八〇年アピール」(別掲)を採択、韓国全斗煥による金大中氏抹殺の陰謀への抗議声明を東演こはやし事務局長が朗読して決議した。

土屋清・西演副議長の「閉会の辞」は秀抜であった。

終つてみればほくにも感懐がある。ゼミナールにむけて各劇団から提出された報告綴(36集団で参加数多かりかなり少いが)を余さず読み終えたのは、帰宅後、途中軽い入院などもあって、半月もたつてからであった。小集団は小集団なり、大集団は大集団なり、また専門劇団は専門劇団なりに、有り余る問題をかかえて、必死に生きている、生きようとしている姿を見ると、じつと汗ばんでくる。総会もゼミナールも、この、かれらの苦衷をどれほど汲みとれたかは、遺憾ながら、極めて不十分としか云えないけれど、そして持つてかえる問題の方がはるかに多く、その決着もかれらの実践を俟つかないといふことになるけれど、ただひとつ、おれたちは孤立してはいないといふよろこび、それは、総会でも、ゼミナールでも、ましてや、あの比叡山の夜空にちかい合った連帯感で、ちからづよい動みとなって灼きついたのであろうと思う。

悪天候下、比叡山の奥深くに、四〇〇名という数字は決して少いとは云えないし、かりにその2%ほどが、初参加の若い劇団員だったとしても、絶えず生成されてゆく若さを身上とする劇団という営為にとつては、正しく評

価しななければならない。

さいごに、ゼミナール事務局長熊本一氏の感想を拜借して、この雑稿を閉じる。

「取組みが遅れ、当初沈滞が予測されたゼミナールも赤字を出さずにすんだところで、はつとしています。

どしやぶりの雨の中で、ゾクゾクと集る。東西演の懐かしい顔ぶれ……。リアリズム演劇の未来にかけけるなみなみならぬ願いが、力強いかぎりです。

八世(下乃一座)の八かすみあみ、フィレンツェ報告、屋外大交流会、竹内氏の講演、分科会と、どれも八〇年の幕開けにふさわしい内容でした。八世(下)の舞台に湧いてこぼれ報告に思いをめぐらし、晴れ上がった夜外での大交流会で思い切つて発散し竹内講演の成功!

分科会もきつと充実した中味になるでしょう。どしやぶりの雨空をぶち破つた仲間たちに拍手、拍手、

不十分な事務局でしたが、ほんとに皆さんありがと、(叡山かわら版No.6 8・24)

## 一九八〇年アピール

―第三回東西合同演劇ゼミナールにて採択―

一人間だけが夢を持つ

人間だけが明日のために生きる

「未来の歌」でアラゴンがこう歌つた年、日本の西半部に生まれた西演が、東半部に生まれた東演と、しっかり手を握つた。

少しの仲間と、僅かな観客と、乏しい経験しかもちあわせぬ、貧しいひとりぼちの開拓者だった私たちは、その日から、暮がとんで明るく輝くホリゾントを目の前に見、全国の仲間たちのエコーを身近に聴くようになった。

私たちの実践が仲間を励まし、仲間の活動が私たちを授け、その呼応の力強いダイナミズムが、真実と希望をえがく創造的な舞台―舞台をうけいれ命を与える観客―

その二つのよろこびに仕える頑健な集団―

三位一体の原理を明らかにしてくれた。

一九七〇年、力を合わせた私たちの演劇前線は、日本列島を縦断した。

その夏、ここ京都に結集した五八集団十三

一七人の仲間たちは、七〇演劇行動が、この国の新しい演劇の良心の証しであるとともに、日本国民の切実な願望の、クリエイティブな反映であることを確認し、その成果と教訓を、それぞれの地域での人間らしい夢、人間らしい明日の日のために生かそう、と約束した。

それから、一〇年。

一九八〇年夏の今日、ふたたび京都に集結した仲間たちは、六九集団十三七人。

夥しい報告、重ねた討議をまつく貫くもの、それは次のように要約できる。

一人間は わが身を粉にして力をつくし

めざしただけ己れを越えて進むものだ

己れの辿りついた空には飽きたらずに

自ら作りだした火に自らを焼きながら

日本の規模でも、地球の規模でも、戦争とファシズム、搾取と人権抑圧、公害と自然破壊、社会のひずみと弱者の犠牲が、加速度的にすすんでおり、悲観と諦観の重い雲が、希望の空を掩っている。

誰の、何のために、どういう演劇を―の設問にこたえるのは、総会―ゼミの経過をみて、けつして容易ではない。

しかし、多くの善意が、さまざまな不条理、

不合理に苦しみ、多くの良心が、解放の未来をめざして、いまこの時もたたかっている以上、そしてまた私たちの演劇が、究極人間の未来につながる芸術である以上、悲観や諦観をうたっているわけにはいかない。

困難は大きく、多い。だが、それは逆説的に、私たちの抵抗する力に見合つて、大きく多くなったとも言える。私たちと同時代の間が原子爆弾をつくり、それを殺戮に使用した。私たちは結束して、三発目の使用をくい止め、三五年間、核兵器そのものの廃絶をめざしてたたかつてきた。かれらを負かしてはいないが、抵抗する私たちも負けてはいない。

八〇年代は、抵抗の時代であり、それだけ賢く、息水く、多くの善意―良心と合力してたたかわねばならない時代だ。

全国一〇年の実践をここに集め、太く強い合わせた今日、私たちは、科学的な判断力と豊かな創造性を身につけ、国民の生活基盤―職場と地域にひろく根をはり、真に民衆の心のうたい手となることを、再確認しよう。それこそが、新しい演劇本来の道であり、私たち八〇年代を展望する大道であるのだから。

―生きとし生けるものうち

人間のほかの何ものも

未来を考へ出しはしない  
人間だけがあの影をみおろし  
遥か前方をも見やる 一本の樹なのだ

一九八〇年八月二十四日

東日本リアリズム演劇会議  
西日本リアリズム演劇会議

## 特集Ⅰ・分科会コーディネーターよりの報告

# 私の感想

— 劇団への報告をかねて —

飯田 信之  
(劇団さっぽろ)

東り演十七回総会と第三回東西合同ゼミの報告の概要は、議長黒沢さんの文章(赤旗)が簡潔ですから、まず目を通して下さい。

状況は卒直に危機というしかない。これは、数年総会毎にくりかえされていることは、劇団でも議案書検討の度に話題にしていますし、これまでの総会討議もそれをめぐってに終結し、帰途とつと疲れているといったことが多かったように思います。

処で今回は黒沢さんも、八〇年代眺望の一定の明るさをもった、と認めておられるが、私の報告もその点を中心に進めます。(なお、総会報告は林中が書く予定です)

まず、私に素直になずけたのは、八〇年代の演劇を語るのに、七〇年代の仕事を総括する態度を貫いたことではないかという気がしています。私自身この十年のいろいろな地域での仕事で、助けられたり協力し合ったり多くの人々——あの頃は「中野勤演」だった、月曜会は「綱の李舜臣」の榎古だし、こじか座は「霧山侍」の上演だった。地元京都の面々は台同公演の時、それにしても藤沢さんはすごく元気そうだった——そうした人々との再会という、なつかしく華やいた交流から始まったのも幸いしたかもしれませんが、七〇年代演劇行動の総括は出ませんでした。劇団と

は大拍手となりましたが、こんな素直なそして原則的なことが、参加者の多くの心をつかんだことが、感動的であり嬉しくもありました。

というのは、私が、東り演の総会や演劇大学などと単一の劇団活動の関係が、あるいはブロック交流と劇団活動が、やや重なりを欠いてどこか動脈硬化をきたしていないかと、かたくななまでに考えていた方のひとりだからです。総会ではリアリズムの原則的な考え方を論じ、現状を分析し歴史に学ぶことに重点を置き、演劇大学や「演劇会議」、ブロック活動を積み重ねてのゼミナールでは、もつと各劇団の芝居づくりの現場から、の声を重視し、戯曲・演出・演技面での上演の経過と成果の報告、モデル上演とそれともなう批評の実際を實踐してはしいという気持が強いからです。

奥羽・北海道ブロックでは、黒さん、萩さん、こはやしさん等の努力にもかかわらず、劇団活動が東り演という単位に重なり合う実感はまだ薄いのです。あれだけ惜しまれて逝った作問氏の「謀叛人」やきした氏の「北のうた」や矢作氏の「常紋」など、ブロックをあげての節目となる上演が、ほとんど批評

を受けない形は寂しい限りです。来年はそっちへ行くよとこはやしさんがいつてくれましたが、私たちは総会やゼミを各ブロック持ちまわりで開催してほしいと思います。そうすれば、何回に一度はこんなまじい報告文なしで、各劇団の吸収するものは大きい。

活動方針の中でブロック活動の重視が確認されていますが、交通費宿泊費アップの条件にともない、ブロックが独自、独立的プログラムを進める傾向にあります。奥羽版演劇会議の発行、道演美演劇学校など、活動の拡がりというより、充たされないものも多いことを語っているようです。

「演劇会議」を、われわれが持つ唯一の演劇ジャーナリズムとして、現場の成果の交換機関とし、よい成果は騒ぎ立てるほどに、という大橋さんのことは大切だと思うし、芳地氏提言の笹坂さんの批評集をぜひとも思います。総会日程の最後に、私はしつこく問うて、青年劇場とはぐるまのリアリズム論と劇団運営のヒントを聞き、これは詳しくメモしましたので追いつけ報告します。

ゼミの報告からだいぶ脱線しました。分科会の報告(萩坂さんの注文はこれです)——私は第一分科会のコーディネーターでしたが、

しては小劇場公演の独立ということで、その精神は受け継がれていると思うし、いまは「河」から「常紋トンネル」までの定期公演と、弘演での「浮城」や「津軽謀叛人始末」などの仕事が、どのような意味をもつのか、眺望ならず、ほの見えるようで、年末の総会では具体的に報告できそうです。

勿論、総会ゼミの体験からだけでなく、帰途寄った弘前で、「津軽謀叛人始末」上演に学ぶ主旨の群馬中芸中村氏の文章を読み、引続いて大橋喜一氏の講演(札幌・弘前・八戸)に同行しリアリズム論と戦前戦後の新劇史をまとめ直す機会を得たこと、「常紋トンネル」再演を前に、作家やタコ部屋経験者から感想意見が寄せられ続けている——そうした体験が次々に私の中を通過していることと関連しての感想でもあります。

総会参加の車中で「演劇会議45」の土屋さんの文章を読み終え、なにかあるの期待をもったのも事実です。一日目の交流の席でなつかしい顔を見た時も、「動いているなあ」というのが実感でした。全日程終了の時芝居づくりと、職場と家庭とが個々バラバラに論じられて来たが、それじゃいけんじやろう思うんよ。と手短かに感想を述べられ、会場

「創造理念と組織」という課題から、劇団歴二〇年、三〇余年という人々が集まり、はじめからまとめ無視で、地域に根ざすことの大切さは痛いほどわかっているメンバーですから、他地域の話聞くことで各自が属している地域の特殊性に光を当て、自らの地域を掘り起すのに戦後史を劇団の歩みに照らして洗い直すという二本の柱で、討論というより自己紹介と感想の述べ合いの分科会でした。その結果、札幌と京都と福岡は同じような状況をかかえていて、京浜協同劇団と西紀会、上野市民劇場とやまなみなどまったく同じような体験が語り合われ、語り合う中で各人が自らの劇団の活動を問い直し、今後もねばり強くやって行くしかないなと腹をくくった分科会でした。

まとまりのない報告ですが、今後とも総会では現状分析とリアリズムの基本理念を追求し、ゼミナールではぐつと腰を落して各劇団の現場からの、この点ををらくたわりますが、智慧の交換、工夫のわかち合い、発想の刺激のし合いといったものを期待して、終わります。

昨日この地で編纂の「危険な選戯」を高校生といっしょに見て大変刺激を受けました。  
(十月上旬冷害厳しい弘前にて)

# 主としてレパートリーのこと

赤松比洋子

(劇団きづがわ)

私の受持った分科会は「創造理念と組織」についてですが、時間が短く、人数が多い(21名)上にチャーターである私の運営のまずさのため話が核心に触れないまま、終ってしまったのが非常に残念です。一口に「創造理念」といっても漠然としているが具体的に舞台を創っている私達が今日状況の中でどんな芝居をしようとしているのか、主体性をもってしかも個性的に創造活動を展開しているか、又演出、演技、スタッフ、制作、会場設置まで含めてテーマが貫かれているか、劇団民主主義の問題、レバを多数決、一票差で決めることがあるがこれが民主的かどうか等様々な問題を抱えているが、ここでは劇団の理念や体質が集中的に現われるレバ選定をめぐる討論してもらいましたが議論するところまで行かず、各劇団から出し質問し合う程度になったが主な内容を列記します。

**四日市市民劇場** うちでは提出された作品についてはほとんどんまで話し合い全員が納得するまでやる、一対一で話し合っても納得できずで決めることにしている。

**四紀会** うちには市民劇場班、青年劇場班、親子劇場班があって、各班が責任を持って舞台づくりをしている、レバを決める時は各班から演りたいものを推薦理由をつけて提出し各班の代表と芸術委、運営委から一名ずつ出て話し合い決定している。現在団員は58名居るがこの58人が一丸となって神戸のお客さんに絶対観てもらおうやというところで燃えているかという非常に疑問を感じている。やっぱりどこかでレバが決められて自分たち中堅はそれについてゆくという主体性のない関わり方に焦りを感じていたが最近の活動で、中堅や若手が中心に研究所をつくっているいろんな勉強をしているが、そこで自由に議論し時

間をかけてレバを選ぶことを経験してから何か少し身についた気がしている。

**はぐるま** うちではやはりレバの選び方と演出の後継者をつくるのが課題です。レバの選定はみんなから提出されたものを壁にはり出してみんなで読むようにして二、三本までには絞り込んでゆくがそこからが決まらない、今まではどうしてもこぼやしひろしの企画力が秀れているので最後に彼が「これでこう」と提起すると決ってしまうんです。だからこれからのレバの選び方と云うものを本当に纏んでゆきたいと思うんです。

**二月** かなり先まで決めないと専門劇団としてはやってゆけない。オリジナルが多いので書き手に次々に頼んでどんどん決めてゆくようにしている。うちの場合活気をあおり立てるようなものを作品の基準にしているの作家にもそれを依頼して書いてもらっている

**自立の会** うちではレバでは悩んでいないのです。伝統芸能としての古典をやることにしているので五年先ぐらいまで近松をやることに決めている。「働く人々に勇気と希望を」ということで私達は集っていない、こんな芝居をやりたい人ということで集っている。

**どろ** うちでもアプレヒト連続上演というこ

10

11

とで稽古場でずーとアプレヒトを上演している

**大阪** 作品も読み込めない若い人達と同じレベルで選ぶことは出来ない、しかし最近では理屈と意義が通らなくなってきた。若い人達が自主的につくった「Doの会」というのがあって、公演企画をし作品を選び主体的に取組んでいる活動があり、劇団はこれを見守るという立場に立っている。

**未来** うちでも同じように若い人達が「迷子の会」というのをつくって自主的に公演活動をしている。しかし劇団のレバを選ぶ時は演出がやりたいというのを二、三本出す。みんな特に反対はないので何となくやってゆくただレバを読み合う時、若手の解る所、古手の解る所を徹底して出し合ってつき合わせ納得してゆくようにしている。

**世に下乃一塵** 結成して八年、ずっと岡安作品をやっているが不満はない、彼の作品も三年位づつで作品の質が変わってきているので作品と役者に対する要求も変わってきておりそれを追求してゆくのに精一ばい。「仕掛花火」で一つの確立をしたと思うけど、年一本づつ書いており、岡安が書いて岡安が演出している強みで今はやっている。だけど彼が書けなくなったら問題が出てくると思う。

**浜浜** 五年位小田健也さんとの付き合いもあってアプレヒト、金芝河等をやってきた。僕は大きなテーマとして戦争のことを切り離しては考えられないようになってる。本を読む能力がちがう若い人に一票を与えても責任が持てない、しかし戦争の問題についてはこれが共通なのだからそこがあると作品は決められる。この作品をどう上演するかだけを意見として出し合う感想なら聞かない、あとはどう創りあげるかという演出の自信と説得力が必要だけ。

**創芸** レバ選定委で決めているが、観客の要求と自分たちのやりたいものをどう結びつけるかということになると創作しにくい。

**黒石** うちでもレバ選定委があるが果してその三、四人のメンバーで決めていいものだろうかという疑問が出てきている。

**和歌山** 演出の出してきたものでやるが、どないしてお客さんに観てもらおうやということを徹底して話し合うようにしている。「和歌山弁でやる芝居でゆこう」ということが10年やってやっと纏めた。

各集団ともレバ選定では苦しんでいる。数年前までは割に先々のレバまで決めていたが、今はほとんどが一公演ごとのレバの選定に苦

慮している、それだけ状況が複雑になり観客の要求と集団の方向が纏みにくくなっているのだと思います。昨日、今日入団した人と10年20年のキャリアを持つ劇団員とが同じ一票を投じることが民主主義を貫くことにはならない。また賛成、反対という意見を出してゆくのではなくこの作品をどんな舞台にしてゆくのかを論議することが大切だし、地域の状況や労働者の状態、その要求を常に纏んでゆくこと、特に今チナ臭い状況をひしひしと感じている中では、若い人もキャリアのある人も同じ所で意見を言い認識することが出来るそこを掘りどころに誠実な論議を重ねてゆくことが大切なのではないかと思えます。





# 「裏と表」のことについて

渡 辺 明 治  
(名古屋演集)

僕の受け持った第二分科会は「創造的スタッフ活動とは何か」という議題で、主にスタッフ関係の人達の集りでした。

参加者の内訳はおう、大道具、小道具、照明、衣裳、音楽担当の人、制作担当の人、ほかに「私は役者だけど、ここへ廻された」人もいました。そういった広い範囲の人達が集って、話し合うには時間が少く、部門別で話すには部門が多すぎて、何をどうすすめていいのかかわからず、参加した人達にとって果して得るものがあるだろうか、大変不安でした。僕自身、仕事が忙しくて、夏のセミナーに参加するのは七年ぶり、チヨーターをするのも初めてで、不安づくめでした。

先ず、出された問題点を印象に残った点から上げると、衣裳担当の人が、自分で資料を調べあげプランを作成、演出、演技者にのそ

なた経験の報告。自分の作曲が演出の要求とちがっていたので、いま意欲的に作りなおしているという前向きな意見。若い人にスタッフの仕事の教えることに対しての若い人からの対応のあり方。例えば、衣裳では、針で縫うことができない人が多い。この先、心配で仕事を任すことができない。演出の思いが、スタッフにうまくつたわらない、新人との人間関係、指導方法のむづかしさ等々。

それらの悩みを聞く中で共通して感じたのは、どの劇団にも、本当にスタッフだけで生きていこうとしている人は、少ないということです。

分科会の参加者をもつても、若い人、劇団歴の浅い人が多く、スタッフの育つむづかしさをあらためて思いました。

演劇を志している人の多くは先ず、役者になりたい、舞台に立ちたい、極端な人にな

ると、「一回舞台に出て、「ああい経験をした、自分の青春の一ページだ」と、さっさとやめてしまう。

劇団生活全体をみても、表方でせいっぱいで、裏まで手がまわらず、公演の時は劇団外へスタッフを頼む。外に頼むにしても、金銭的に余裕がないので、自然素人になる。

(アマチュア劇団として仕方のないことかも知れないが、お客さんからはちゃんとチケット代を払って見てもらっているのだから、裏も表も劇団の責任なのだが)どうしても表より裏の仕事が弱くなっている。かくいう僕自身も仕事は照明だが、劇団では役者を活動の芯においている。

分科会をまとめるこの文章を書きながら、自分自身の今日までの歩みをふり返ってみることが必要に思え、少し、僕自身について書かせてもらおうことにした。

今、何故、照明で曲りなりにも生活出来るか……。僕が、演劇への道を選んだのは、今から二十年ちかくも前、あこがれるには、役者になろうと決めたところから始まるのだが、少しでも舞台に近い所で働きたいと思い、入ったところが、若尾総合舞台でした。そして照明を覚え、仕事をする中で、生活は出来

てきたのだが、照明の仕事は、夜の本番が多く、仕事があればあるほど、稽古に出られない。その矛盾をかかえ続けて三〇代半ばになり、僕は劇団に集中する道を選びました。

勿論、生活面を無視することは出来ないもので、フリーで照明の仕事が続けながら、同じ悩みをもつ、三人の仲間と一緒に、四人で、劇団演集を中心に、裏方の仕事をして、劇団活動をつづける道を歩み始めました。

幸い、仕事ははじめから、東り演の仲まの、上野市民劇場、劇団四日市、劇団すがお、劇団名古屋、劇団名芸、岡崎演劇集団、オブザバーの劇団希求など、多くの劇団で仕事をさせてもらって、各劇団におけるスタッフの位置みたいなものもわかってきました。

特に照明、大道具、音楽の弱さがわかります。一方(私も最近、劇団の制作をやっている)ので、その劇団のおかれている採算点を考えると、これ以上お金がかけれないのだなあと、その劇団の気持がよくわかってしまふのです。では、それをどう、少しでもよい方向にもっていくか。

照明の場合の例でいえば、とても予算がなく、調光器など買ってもらえない場合、劇団にある器材を最大限に使ってやるより手は

ない。特にケイ古場公演の場合等、電気容量がないという悪条件がかさなる。

しかし与えられた中で最大の力を出し切るには、スタッフ自身の創意による工夫・創造力が大きくものをいう。スタッフにしても、これは役者と同じなのだ。そういう劇団には金はないけど、さいわい長い稽古期間があるじゃないか。その利点を生かせないものか。

最近、外部の照明会社にたのむことが多いと思うが、毎日職業としているライトマンは仕事々々に追われて、余り稽古に出られないことが多い。舞台仕込図やセッティングなどは、劇団員以上に知っているから任せてよいと思うんですが、劇団側の担当者として必要なことは、稽古に出来るだけ多く参加することにより、いま自分達の取り上げている作品について、どういう内容で、なにを、どう観客にうつたえたいか、その芝居の心をつかまえることが一番大切だと思います。ライトを点ける時、消す時にもその心が出るはずですよ。

以上、分科会の印象、僕自身の演劇活動、そして、照明を中心に、スタッフ部門について、照明を中心に、スタッフ部門について、最近思っていることを、思いつくままに書いて

て来ましたが、最後に、いま更と思いつく、やはりそこに落ちつくと思いますので一言書かせて下さい。

演劇は総合芸術です。このことには誰も異論はないと思います。でも、ともしれば、にが手なことは、総合からはずされます。

劇団指導者の皆さん、特に演出を志す皆さんは、あらゆるスタッフを勉強してほしいと思います。演技者を育てると等しい情熱で、音楽、照明、大道具、衣裳、小道具に心を配ることは、それを担当する人の意欲につながり、成長につながります。

「創造」—この言葉に、裏も表もありません。僕自身、大変遅々たる歩みを、役者としてしておりますが、照明をやってきていることは、大変プラスになっていると思っています。

「裏」も「表」も、大切なものは、一つなんだと、いまさらのように、この文をまとめて思いました。

×

×

## ひとつの感想

高尾 豊  
(劇団生活舞台)

七十年代はじめ、真摯に日本列島を縦断していたところの革新自治体が後半あいつぎ落城していった過程とその後の情勢は「八十年代の初頭を占う衆参ダブル選挙は予想に反して、いや期待に反してといった方がいい、金権腐敗の自民党の圧勝で幕を閉じたのである。これをわれわれは冷静に受けとめなければならぬと思う。

大平総理の急死によって浮動票が一挙に保守票に流れたとされているが、それだけで自己の無力を慰めることはできない。現実には若者の保守化が急速に進んでいるからである。この現実を無視して大衆の愚民化の結果といっても、犬の遠吠であり、思い上がりである。——(後略・東リ演総会議案)、「全般的な右傾化の潮流は、八十年代に入って先の衆参両院選挙後さらに急激に露骨になってきた」(西リ演総会報告)と八十年に突入し

た最初の八ヶ月間の状況を報告している。その後もひきつづき政局の動向ともからんで憲法改正(九条)論が公然と論議され、徴兵制や武器輸出がまた核武装さえ発言されている。

一九八〇年八月二十三日、熱気ただようゼミナール全体会場には「八〇年代の演劇状況を切り拓くために」の横断幕が会場正面いっぱいにはられていた。

第三分科会「レポートリイと今日の観客」第四グループ参加者は、主題にサブタイトルされた「うける芝居とうけない芝居」以前の問題で苦悩していた。レポートリイの貧困である。戯曲がないといわれて久しいが未だ解決のきざしはない。それでも各劇団は余儀なく(る)毎年土活活動をつづけている。また劇団活動に対しても問題提起されない年はない。「何故、だれに観せるのか」、「創作劇と

地域・観客との関係は」、「名作路線と観客の関係は」等々である。がこれらに対して統一見解の必要性はないにして各劇団は多少の差はあれ、自らの力で解決しつつ活動を展開しているからこそ存在していると思うのである。それは少なからず分科会参加者の発言にあらわれていた、と同時にそれぞれをとりまく情勢は(政治的にも)細部にわたって繰返し論議の対象となった。

分科会での討議は結論を求めない形で進んだ。決して威勢のいい言葉が飛びだした訳でもない、始終冷静に時には反すうしながらの発言でさえあった。次に、末だうちとけない始めて顔を見合せたばかりのなかで、この分科会を選んだ理由と自己紹介の一部をメモから引用してみる。(文責は勿論私にある)

「財政上から公演は、小劇場活動十日間、十三ステージ行い、終演後観客との合評会を行う。普及ということでそれが数だけの問題であれば無視する」、「レポートリイの運定になると観客との関係を話合う」、「どういう作品をやるか、なかなか出てこない。でてこないということは観せたいものがないのか、ではなんで芝居をするのか、が討議になる」、「観客(組織)の立場で、一般的にいつて内

容より知名度が優先する傾向がある」、「プロ野球にはあれだけ入っているのに、観客を動員出来ない。やりたい芝居とうける芝居との矛盾もあるが、定着は(観客の)分つてくれる人たちだけである」、「例企画を運ぶについて会員の増減(問題)がある。なにを観せるか。民芸、文学座、俳優座はっかりではつまらないという意見があるので……」、「レポートリイと観客はどうあるべきか、関心をもちて参加した。状況は名作路線でこれでは劇団も衰弱するのは当面ではないか、名作路線なら映画でいい。いまどういうものを選べばいいかわらないと同時に観客組織の意味が問いなおされる時ではないだろうか」、「創作をつづけているが、演りたいものがない」といふ、それは勉強、努力が足りないと思われ、「一生懸命やればなんでもよいと思える」、「演りたいものが劇団とくい違ふ」、「観客は本物をみたいという意向は分るが、(例えば)二本のなかからこれやで、という決められ方がある」、「アプレヒトの連続上演を行っているが、客がよべない。芝居についていけないという意見もあり、一方研究者の評価それとの矛盾。観客との関係をさぐりたい」、「例えば、演観協は広がるが、各劇団の観客

動員数は少ない。そしていまどき芝居なんか観る人はいないんだよ。という意見がある。そのときは是非みてもらいたい芝居を創っているかどうかが問われているのである。自己満足で観客はついては来てくれない。地域劇団でしかやれないものを志向して行きたい。また観客では最近女性の方が圧倒的に多く男性の文化離れが特に目につく。

分科会で語られ指摘された様々な事象は東西両演の合同にふさわしく全国的縮図の相を呈しており、劇団が創造する質の問題が提起され、地域に根ざすことがレポートリイの運定に反復され、観客組織のあり方や、劇団内民主主義にまでおよんでいるのである。

それでも私に感想がないわけではない。地域と自己と劇団の相剋であり一地域で活動する劇団の発展こそがひいてはわが国の演劇文化の土壌を形成し、豊かな未来を約束し自身の生活と創造の母体となるという想いである。民主主義の危機がさげはれているときそれぞれが地域に根ざし生活に根ざした創造を展開すること、これはまさに民主主義の運動である。

また、観客は演劇の発展と軌を一にし

て成長してきたのである。ところがいつの頃からか軌道が一つになり分離して観客の意識(異論もあると思うが)が先行し劇団の後追い現象が生まれている。そこに妥協が生じ名作路線とやらの要因があると思われる。劇団と観客との関係の正常化こそ急務である。それは各劇団が吸引力を發揮することであり魅力を持つことであろう。私に即して云えば、二十六年劇団創立のときかかけた「自らの手による創作劇」、「生活に根ざした嘘のない演劇」を初心にかえて実践することだと思っている。

総会につづくゼミから帰ってもあの日私の胸に突きささった「鬼の金縛り」がまだ引き抜けずにいる。日々ますます喰い込んでいるのである。

## 今日の状況とレパートリー

石垣 政治  
(仙台小劇場)

ゼミに先立って東り演の総会が開かれた。席上、繰り広げられる状況分析の討議を聞いているうち、分科会のチーターをやることに次第に憂鬱に思えてきた。この第三分科会のテーマである「レパートリーと今日の観客」の「今日の観客」という部分に関しては、もう行きつく先が見えているからである。的確な状況分析がなければ、とりあげるレバに自信がもてなくなる、自信がなければ、とても浮動な観客を動員することなど不可能なのだ。だが、加速的に変転していく文化状況の中で、われわれが固執してきた狭いリアリズムという概念では、もはや魅力あるレパートリーを生みだせないことを知るべきであろう。われわれの活動が、劇団員数が減り、観客が減りして、「変革」とはだいが隔たったところであえいでいることに危機感を抱かなければならない。若者が若者だけで、プロデュー

スしたり、芝居を上演したりすることは仙台でもかなりの数にのぼっている。そして、それはどの地域でも言えることかもしれない。だが、そこに集まる若者を「たわいもない芝居をやっている」と無視できるのだろうか。嘗て、怒れる若者を吸収しえた地域劇団の魅力は、「民主的な劇団」という看板が残っただけで消えてしまっていることがなんと多いことか。

分科会では、なるべく視点を変えながら、レパートリーに関する討議が進められるように心掛けた。あまりまとまりのない討議ではあったが、その方が、劇団の活動報告に終始するよりはよいと思ったからである。

まず、各劇団にレパートリー選定の基準はあるかということから出発した。観客が納得できる、劇団内の団結が得られる、時代を進める、という三項目が基準としてあると、答

えたとところが一集団あったが、他にはほとんど基準となるものはないということであった。

それぞれの劇団がそれぞれの方針をもっているから、それに照らし合わせて選んでいるので、きまっただけはないという、わかつたようわからないような話で跡絶えてしまった。

それじゃ各集団の方針がどんな形でレバに反映しているのか、方針そのものが社会の変化にどう対応し、現在生きているのかと話を進めようかと思つたが、次第に減入っていきそうなので、そこで止めてしまった。仙台小劇場のことを話せば、創立当初から、①現実を根ざした演劇、②明るい未来をめざした演劇、③働く者たちの立場から描かれた演劇、④民主的な内容の演劇と四項目が創造理念として明文化されていたので、嘗ては、見つけた脚本を①②③④にあてはまるかどうかと検討した。「若者たち」「キューボラのある街」などは何の抵触もないで決定できる。しかし、「夕鶴」「にんじん」となるとうとうしつくりゆかない。そこで、⑤健康で建設的な演劇という項目が加えられる。要求の多様化した都市型の文化状況に対応したつもりだったのである。七六年に「ひしめきあふ不毛の季節から」が候補にあがると、この上演をめぐる

16

て、文字通り、劇団を二分する論争が生じた。

ここで、現実の病いの深さによって①②③④の路線は色を失ったのである。そして今年西洋の古典劇を、あえて上演する。今程、レパートリーを真剣に考えたことは嘗てなかった程である。

話は横道に逸れたが、それでは規程がないとすれば、何かレパートリーを規定するのだろうか、「受ける芝居と受けない芝居」を考えてみようということになった。どのような芝居が受けるのかということ、やはり名作。いや、名作路線というよりは、教科書路線だという極端な意見すらもでた。名作でなくても受けたいということで、「あゝ青春高校野球」(大阪自演連)が話題にのぼった。驚くべき数字を記録する視聴率、大会開催中の人々の挨拶は昨日の試合内容から始まることさえいえる高校野球への過熱ぶりを会場に持ち込み、観客との間に緊張関係を生み出すことができたというのである。われわれの関心がどこにあるのかを自覚し見つけ、大胆に、タイムリーに舞台にのせていくことができれば「受ける」ことが多いということになった。もともと、それがいい芝居かどうかとなると別問題だという話にはなったが、「コミュニケーションの日々」

より甲子園の話の方が受けるという現象は、数年前から既に始まっているアメリカ映画の変化と無関係ではない、ハンディを克服してジョキングを続けるドラマに多くの観客を魅きつけているのではないか。われわれはもともと広範囲な文化状況を捕えておく必要がある。

さて、レパートリーは、男優の不足、スタッフ数の不足など劇団の組織力、創造力量などの制約によって、もうほとんど決まってしまうという話になった。討議に参加した集団の大部分がそうだった。集団の内部を見渡せば、子供劇や一幕劇ものと相場を踏んでしまう。それを続けているうちに、結婚や転勤で劇団員が減少していく、いつまでたっても魅力的な活動は生まれるはずがない、生き残る為には、どこかでこのような素朴実践論捨てなければならぬだろう。例えば、歌や踊りの訓練は舞合を魅力的なものにする要素の一つである。そこに自信があればもってレパートリーの幅が広がるはずである。不勉強な演出家や指導者は、自ら音楽や照明を効果的に使う術を持たないので、自劇団の力量を知らず知らず小さな枠内に閉じ込めているのではないだろうか。実際にレバの決定が演出にまかされているという集団もいくつかあったの

である。また、古典劇の台詞が自由に喋れる役者が何人かいれば、新しい観客を見つけ出すことができるかもしれない。海外の現代劇にすら道は開けるではないか。青年劇場が、劇団はぐるまが、シェイクスピアやラシス、モリエールの作品を上演し続けていることを考えなければならない。われわれがレパートリーを考える場合、役者やスタッフ、集団の創造力量をどう伸ばすのかということまでを考えておく必要がある。

レパートリーが地域に根ざすこととどう関係があるのかという話も出た。結論は、レパートリーに限らずトータルな活動がどうかにかかっているということになった。「大和川」がその発端だった。しかし、各劇団のレパートリーの流れを見れば、現在の活動を規定しているように思われる。各集団が過去のレパートリーを積形形で捕え直してみるのも意味があるかもしれない。そしてせつかく東西リ演という組織があるのだから、レパートリーが劇団の運動の発展にどのように寄与しているのかを構造化して捕えておく必要があるのではないだろうか。

17

# 若者たちの思いについて

岡部 豊  
(京浜協同劇団)

ゼミの最終イベント、各分科会の感想発表を、私は入口の書籍売場に坐って聞いていた。チューターとして、いくらかの責任を感じて順番を待っていたわけだ。

「地域文化」とか「連帯」という言葉の響きだけで胸躍らされる最後の世代として、私は、与えられた役目に驚きながらも満足感がなかったわけではない。劇団の書記長から、この役を命ぜられた時も、何も考えず「やっやろうじゃない」という気になったのだ。それには、自分が未だ青年層に属する(夏のゼミは、当然、若者が多いだろうし、若いチューターの所には、若者が集められると考えたのだ。これは全く正解だったが)ということと、その中で近頃、自覚する老化ぶりを曝かれれば、もうけものだと考えたからである。

やや自棄的であるが、書き手を自指す私としては、私より若い層の考えを知りたいと念

願していたし、我が劇団では若者が定着せず、老化点検の機会が失われていたからである。が、自分より若い層の中で自身の点検を望むなど、その時点でのっぴきならない程に、私は老化していたのだ。そんな私が原稿用紙に向ったところで、作品は風俗描写にすぎないといわれるわけである。

ま、そんな話はともかくとして、第四分科会「私と創造」の報告をしなければならぬのだが――。

私がゼミに参加したのは、75年の秋田・わらび座からである。この時は、京浜の研究生であったが、他所で劇団経験のあった私は、知ったかぶりをして参加した思い出がある。そこで私は、東り演の多くの仲間、ただ多くの仲間がいることに全く素直に感動して、翌日からの意欲も倍加したことを憶えている。それまで斜に構えていた私が、きわめて東り

演的出発ではあるが、確実に新しい出発を獲得したのだった。以来、その感動だけでも知って欲しいと思い、新人にゼミ参加を勧めるのである。

かくして私は、それ以上の何をも持たず分科会に参加したわけだ。開会前のチューター会議で渡された名簿は、予想どおり入団間もない、それも女性が大部分をしめていた。会議の論点詰めでも、名簿をながめながら、どのチューターの顔にも困惑の襷子がうかがえたのである。

やがて、しかるべき方々から出された切り口とは、

- ・自分自身のレパトリーはあるか。
  - ・やりたい芝居とやるべき芝居。
  - ・私の意欲と集団の条件。
- などであった。

私は、それに京浜での若手を見ながら、なぜ芝居なんかを選んだのか。なぜ、その集団に来たのか。

芝居のほかにも、やりたいことはあるだろう。

- ・芝居のもっている魅力。
- ・集団の若手育成システムをどうしたらよいか。

- ・仲間を増やすにはどうしたらよいか。
- ・私の願いと集団の圧力。
- ・総会で発言するか。
- ・集団がどうなったら、そこを去るか。
- ・自分がどうなったら、芝居をやめるか。

など、いくつかの話題を準備した。

全分科会中で最も若い会であったので、悩み多き指導者に、強力な提言を贈りたいと考えていた。

進行のまずさから、用意した切り口に関係なく話は進んでいった。

集団内の総会では、もっぱら聞き役にまわる若者にも、夫々の思いはある。芝居の魔力に気づいてはいなくても、魅力は十分に感じとり気力だっているんだ。演劇の社会的な力については関知しなくても、集団内の圧力は感知しているのだ。

自分を豊かにしたい。そう考える若者は、芝居もやりたい。だが、あれも今しかできない、という集団と個の問題というよりも、限られた夜の時間の奪い合いに個的に悩んでいる。職場、家庭、集団の夫々の場に優先順位はないのだ。

働きながら――という創造理念を最も真剣に受けとめている世代なのだ。そして、古手

の過した時代と違つて、職業選択もわりと自由である。わりと自由に選んだ仕事には、それを越える、労働者としての権利意識の風は、及ばないのかもしれない。

京浜にYという男がいる。根っからの芝居好きで、稽古を休むこともなかった。役者以外の役目には就きたがらないし、集団も彼のそういう力には期待していない。その彼が、「組合の……」とテレながら休むようになった。小さな運送会社に勤める彼が、全く一人で始めたことで、彼の口から、そんな言葉が出ることを予想した者はいなかった。彼は夢中である。確実に強くなることが想像できるようにになった。

若者に労働運動をしろ、というのではない。ただ、好きからの出発が、人間を変えろという話だ。反対に私のように、運動論から出発した者は、情況の微々たる変化にうろたえ、いつ戦列を離れても不思議でない程に老化がはなはだしい。

ここに集った若者は、例外なく好きからの出発をしている。好きでやっていることに、もうひとつからませる何かがあるのではないのか。この辺が、今後問われる課題であると

感じた。

東西り演が、未だ運動論での連帯を持ち得るならば、若者に対する指導性と豊かな包容力の回復を願う。

若者は、職場、家庭、集団の三視点のどれをも捨てることなく悩み、動こう。そのことの方が正しいのだ。

てなことを老化した頭で書いたが、すっきりしない。自身が曖昧な生活をしていて、何をかいたわんやである。

ちなみに、我が分科会の報告者となった高校生の乙女は、「何も得るものがなかった」と大阪弁でかましてくれたのだ。場内爆笑。私、呆然――。

「よし。来年は研究生を担当してやろうじゃないの」、私は嬉し、そんなことを思った。



## 集団のちがいの中で

齋藤 誠  
(劇団大阪)

あれからもう何年になるのか……。ぼくは岐阜のあちこちのお寺を会場にして開かれたゼミのことを思い出していた。あの時はペーペーで、若くて、偉そうにしゃべりたがった。ぼくも今は三十七歳。岐阜のゼミでは、分科会で・酒席で・創作劇を生むコップ? を、劇団運営の楽しさを、上機嫌で話してたっけ。ところが今度はそうは楽しめない。事務局劇団の一員であるし、なんとキョウターまでおおせつかってしまった。うちの劇団も「前進一直線」のあの頃と違って、かげりがある。いや、水面下で山積する問題を抱えている。

前日(ゼミ第一日)、小林さんの「何か書けるような気がする」という話を聞いたことと、大交流会で元気になった黒沢さんと、萩坂さんが肩を組まんばかりに夜会場を歩き回っていた楽しげな顔を見たことで、矢張りうれしかったぼくは、そのことだけで「来て良

かった」と思っていた。が、ぼくの分科会はそうめでたいものにならなかった。

総花的にいろんな問題が出され、いろんな意見が交されたのだが、どうもいま一つ噛み合わないのである。一にぼくの司会のまずさがある。どのように話を深めるのか——に苦慮し、焦ったが、その方法がみつからない。ちやうど、本番でセリフを忘れ、アドリブで場つなぎしているような気分である。(ぼくの分科会の方々、ごめんなさい)

ぼくの分科会に来た人は、「からっかせ」の布施氏、「和歌山」の福岡さんを除けば、きわめて演劇歴の短い若者はかりである。京芸の竹橋君(彼は事務局で世話係だった)と、青年劇場の藤木君(彼女は筆記係であった)は舞台経験も強烈だが、ほとんどの人は「私の創造」の内容をみんなの前で話すほど

の経験がない。一丁二の大きな舞台経験はあっても、まだ壁に当たったことはないと思う。

「私の創造」の中身を吟味し合うには材料が乏しい。実際の舞台、演技を見ていないだけに、もどかしさが残る。

はじめの自己紹介・劇団紹介の話で出されたのは、「劇団の中での自分の居場所」の問題があった。数人から中堅に育っていく過渡期の悩みとしてぼくには聞けたのだが、若者共通の問題として、古い指導層が「君臨」している(?) 集団で、自分を押し出すのにたじろぎがあるように思える。レバのことでも、それで「劇団のレバはえらい人たちが決める」「私たちの本当にやりたいと違う」——という気分をどこかに持っている若手がいる。だからといって強烈に自分のやりたい作品を押し出すのではない。何をやりたいのかはつきりしていないか、最初からあきらめているか、どちらかである。古手の創造意欲減退の投影がないかと、ぼくは自分に引きつけて思ったりした。

「私たち若い人がしつかりしなければ」「(さ)ば・飯泉さん」という意見も結論的に出た。ぼくはぼくで「うちの劇団で若手グループが井上ひさし作『11びきのねこ』をプロ

デュース公演するが、一朝一夕に決まっただけでなく、やりたい作品を強烈に主張しつづけてやっと上演にこぎつけた。ぼくら古手の一部にある冷やかな眼をものともせず……」といわずもがなの話をした。又「作品がないのではなく、作品を知らないのだ」という萩坂氏の話も紹介した。

展望の渋谷君は「全員が作品を書く」方式を報告。すでに何十本かたまり、その中のいくつかは上演したという。驚くべきエネルギーである。自分が語らずにおれないものを本にし、上演する——これはぼくらの創造の原点だ。が、その創造成果はどうなんだろう? 舞台を見ていないので何とも云えない。創作劇を生む方法としては、ぼくらの劇団大阪は対称的である。すでに知られている在版の作家に依頼して書いてもらう。そして今はそれに加え既成作品上演をきっかけに、東京在住のその作者に作品依頼する——ことに踏み出した。

「定評のある作家に書いてもらう」「又それが可能な劇団になる」ことがぼくらの意識下の方向だったのかもしれない。「展望」の仕事はぼくらに鋭くアンチ・テーゼを提起する。それは黒沢さんが常日頃口にしておられ

「専門家指向への疑問」につながるのだろうか?

話を進めていて感じたのは、多人数の集団と少人数の集団の違いである。ぼくは昔、教人の演劇サークルにいたし、十人に満たない楕古が常だった「労芸」にいたので、少人数の悲哀はわかるつもりだ。しかし若手にとって「少」集団の中ではくすぶっている暇がない。すぐに有力な働き手であることを要求される。多人数の集団ではそうはいかず、具体的に一年も二年も、役につかない人が出る。ついても名前のない役でしかないこともある。運営の面でも若手が受動的になりやすい。

「いい役につかない不満」も出されたが、青年劇場の藤木君は「自分のやりたい役についた人に『私の思いの分も含めて頑張って』」という。だからその人もいい加減にはやれない——と何の街いもなくきつぱり云い切った。ぼくはそういう藤木君がまぶしかった。またそうさせている青年劇場の意志統一のすごさにクワタジとなった。

「いい役悪い役があるのでない——いい役者、悪い役者がいるだけだ」と云われるが、そのとおり思えるまでには、相当な試行錯誤

があるのでないか、とぼくは思う。若者はもつとむき出しの意欲さを持っていて良い。いい役につけない口惜しさを、次の創造へのバネにすれば良い。

女性が結婚し、出産して演劇を続けるむづかしさも話題になった。「旦那に劇団活動をやめてもらって、私がやり続けるようにした」という和歌山の福岡さんの例は、おそらく希有ではあるまいか。これという妙案はない、「永遠」(今の世が続く限り)の課題であろう。

つぎの全国ゼミの時、果してこのうち何人が芝居をつづけていることか。後向きかもしれぬが、ぼくはしきりにそれを思った。屁遜を云われ、糞案を云われて久しいリアリズム演劇ではあるが、ひたむきに探りつづけていけば、きつと何かがある。そう思える広がりがある、熱気があった集会だったではないか。

☆

☆

## 仕事の受け継ぎを思いながら――

三好律子

(京都労演)

京都に在りながら比叡の山があのよういじわるい根性をしていたとは知らなかった。濃霧、落雷、風雨、晴天と、およそ天候の種類をひと通り示してみせ、北海道から九州から参集した四百人近い人心をかどわかすことはなほだしい。つまりとて、待ちわびられた交流会は予定通り星雲の下で開かれたのである。

交流会の成功はスタッフの周到な準備におうところが大きい。深緑、ほどよい冷気、赤ちようちん、尿台、トラックの荷台に設置された「ニッポンレンタカー」とコマース入りの舞台、わずかな照明と充分な酒、手ぬきがなかった。

うまい酒だった。豪もたけなわ、二つめの樽酒も残り少なくなつて、その最後の一滴までも樽をかたけて飲んでもらっていた私の背後で、「いいんですよえ、あれが。」と呼

びかけるように萩坂さんの声が出た。その声の活きの良さに驚いてふり返ると、舞台上で世に下乃一座の一芸が披露められている。参集者の談笑の輪をめぐって笛の音がとどいてくる。「何とも言えずもの哀しくてねえ、萩坂さんと黒沢さんと仲さんが同じ笑みをうかべてうなづき合っている。その光景に思わずカメラをむけた。私の知らない時代を生きてきた人の、演劇に寄せる思いや人生を感じたものだ。

私たちは今年一月、市田真一を亡くした。京市協会長、京都文連副会長、京都労演副会長、京都演劇教室同人を兼任してきた人であった。芝居好きで芝居がやりたいために、これらいくつもの役目に身をそがなければならなかった彼の呻吟は、そのまま京都の貧しい文化状況を顕わしている。市田真一のかかえ

てきた仕事をどうとらえ受け継いでゆくかが残された私たちの課題のひとつとなった。今回の全国ゼミの開催地に京都が選ばれたこともあって、私たちは初めて十数名を募って参加したが、私の主な関心は各々の集団理念がどのように世代から世代へとたまたみつづけてこられたか、ということにあった。

この点については残念ながら時間も機会もなく、大まかな劇団状況を知らずとどまっていたが、二日目の分散会のあとの全体集会で、分散会の感想をのべた高校生の子の発言は面白かった。記憶にたよるもので正確を逸するが、だいたいこのようだったと思う。「私は、劇団とわたしの創造」という分散会に出ましたが、何で芝居がやりたいかと聞かれて、何でかなあと考えてたら別の女の人が「めだちたいし」と答えられたんですけど、私もそうだと思います。いろいろ話が出ましたけど、これと言つてべつに何にも得るところはありませんでした。彼女がそう締めくくると、どーっと笑いが起つた。私も笑つた。彼女の正直さへの共感であり、苦笑であり、自嘲でもあった。おそらく笑つた人は皆、本音とたてまえの岐を氷がさるを得ない状況を経験してはいないか。この現象は、私に今回

のゼミのテーマにせまるなどの論調よりもリアリティをもって問題を提起してきた。

昨日は空地に今日はビルが建ち、轢を踏むがごとく自殺や殺人が行なわれる時代に、演劇によって社会変革が成ることなど信じがたい虚無感にとらわれる。私などは、まずそのことに本気で確信を持つことから行動を始めなければならぬのだ。演劇を知る動機やきっかけが「めだちたいし」でもいだろう。問題は、踏み込んだ土地でいかに美の生活にめざめるかということにかかつてはいないか。彼女の卒直さには敬意を表したが、ふと彼女が名所めぐりの旅人に終らなければいかと考えさせられた。

分散会では、私は「レパトリイと今日の観客」に参加したが、大雑把にくくると「レパトリイを選ぶ際の創造者の社会的責任」「大衆演劇に学ぶもの」「演劇人口の女性増と男性の保守化」「劇場空間とレパトリイの関係」「集団における書き手の育成と創作劇の問題」などを話した。

どの劇団も観客動員に四苦八苦のようだ。創作劇には、何を誰にむかつて観せるのか、劇団の創造理念や上演に際しての社会的責任

や地域性について、観客側には芝居に何を要求し舞台とどう向き合うか、演劇文化に参加する者の役割が問われているようだ。また女性が真剣に社会に何かを求めている傾向は結構だが、男性は管理体制にすっかり組み込まれて休日は家でゴロ寝が精一杯、芝居なんぞは女と子供で行ってこい、といった保守化傾向による演劇文化への認識が伝統化されると恐ろしいというような話題も出た。

集団に於ける書き手の育成の問題は、私の最も関心のある題だが、印象としては創作劇の上演をとりわけ集団の理念としている所は少ないようだったのが残念だった。背後の状況や経緯を充分知らずに語るのは、片手落ちだが、「地元」の自然海岸埋立て反対の脚本を書いたが劇団でとり上げられず、外部の人を集めてプロデュース公演として上演した」という横濱の宇都宮さんの発言は、加えて残念だった。

京都に於ては、市田真一が同じ全連演劇協会の芳地隆介氏の創作劇に執拗にこだわりつづけてきた。趣向が合ったという問題ではない。彼は類似した職場条件の中で、書きつづけることによつて労働者の闘いを闘いつづけてきた芳地隆介氏と同時代を生きた同時代を考える

ことによつて時代を知ろうとしていたのだ。このことはしかし、集団内部や観客動員などの面に於て、多くの現実的な問題を残してはきた。が、そのことによつて市田真一が働きながら演劇する者の創造理念を深めていったことも確かである。

誰にむかつて何を観せるか、という課題は書き立てを育てることと大きく関つてあつて欲しいと私は思う。

四百人近い参集者の中には、一度も視線を合わすことのなかつた人も居るだろう。しかし全国つづつうらうらで運動を押し進めようとしている人々の中に身を置いて自らをかえりみる体験は、私には貴重であつた。



## 劇団はぐるまの教訓……

松尾 せつ子

(劇団生活舞台)

東西リ演合同のゼミナールへの参加は、はじめてでした。

こばやしひろしさんの特別報告は、「演劇会議」でも読んでいましたが、スライドを見ながら聞く内容はまた格別で、ピサの斜塔にのぼったらすべり落ちそうだった話、ミケランジェロやダヴィンチの彫刻群の話、国際演劇研究会でのブレヒトに関する発言、そして外国語がわからないばかりに日本人だけ片隅に集って、土方与平さんの通訳を小声で聞いていたら、「その片隅でボソボソやっている人たちは実に不愉快だ」とおこられたのに与平さんだけシモンとして自分たちは何を言われたかわからなかった話など、こばやしさんをはじめ菅井先生、青年劇場のみなさんのフィレンツェでの生活が目に見えるようでした。

竹内敏晴先生の講演「ことばとの出会い、

からだとの出会い」のなかでひきつけられたのは、吃音者の方の芝居づくりの話でした。緊張でゴチゴチになったからだを楽にしている過程や、セリフをちゃんと言おうとすればするほど、また相手が自分の言葉が出てくるのを待っているとわかるとよけい言葉が出てこない、それをどうときはぐすか、それは吃音者の方のことでなく、私たち自身の問題として興味深く聞きました。

比叡山の杉林に霧が流れて、野外での交流会がもたれるかどうか、一喜一憂させられた夜、大太鼓の勇壮なひびきのなかでくりひろげられた交流会は北海道から九州まで、全国から集った演劇を愛する仲間の熱気と連帯感がいっぱいでした。会場の夜店は東西リ演の祭りをより一層もりあげていました。

夜もふけての舞台の上と下での大合唱は楽

しく、ところ構わず大きな声で歌っていて、ふと舞台の上をみるといつの間にかわが劇団のエースがみんなと一緒に踊っているのには唖然としました。

翌日の分科会は、「レポートリーと今日の観客」に参加しました。この分科会に参加するときめたとき、上演するレポートリーをきめる段階で古い劇団員と若い劇団員とのレポートリーに対する考え方の違いが出されるかもしれないと漠然と考えていたのですが、時間が少なかったためあまりできませんでしたが、各劇団の報告のなかで劇団大阪が古い劇団員が「大変入りのチキンステーキ」を、若い劇団員が「口匹のネコ」をそれぞれ別々にやった話の一つのこころみとして面白いと思いました。

またある劇団が、肩しよう炎の問題をあつかった芝居をとりあげたとき、劇団員のなかから、そういった労働争議をあつかった芝居はやりたくない、会社からにらまれるからという声が出て、そのときは姓名標三の「第三の証言」をとりあげた話されましたが、そんな意見が出たとき、劇団内での討論がどう展開されたのか、もう少し詳しく聞きたく

思いました。

各劇団の報告のなかで、「はぐるま」の波田さんの九千名の観客を組織した話は私を驚かせました。千名の動員もやっとなという私たちにとって九千名という数はとうてい考えられません。福岡市民劇場の会員数でさえ千九百名から二千三百名といったところで、それも二千名をこすというのは知名度の高い俳優、たとえば杉村春子とか鶴路吹雪の来演のときのことです。むかし五千三百名の会員数になったときもありますが、それはもう現在では伝説的なものとなり、三千名の会員数にするのはとても大変な運動を展開しなければならぬという感じですが、ただ今年になって、仙台市民劇場の経験に学んで、機関誌づくりや例会当日の運営を、以前は委員中心でやってきたことを各サークルとそれぞれが分担してやるようになり、各サークルが生き生きと活動しはじめ、会員数もふえてくるだろうと思えますが、しかし、九千名という数はちょっと考えられません。

「はぐるま」の話を聞いて思ったのは、筑豊に田川という市があります。田川は炭礦でさかえた市で、炭礦が閉山になったため、住民が他の都市に流出し、さびれた市になって

います。その新町という町で町ぐるみで市民劇場のサークルを作っているところがあります。夏には町の人と一緒にみこしをかつぎ盆おどりをやり、師走には餅つきをやり、そして市民劇場の例会をつくりあげています。そこには地域に根ざしたという実感がありません。

福岡でもそれぞれの劇団が地元題材をとった芝居を上演したのがいくつもあります。また十一月には福岡市の七劇団が合同で、市の芸術祭にむけて、博多の豪商を描いた「海五十二万石」を上演しますが、地元の芝居だと言って圧倒的に観客をふやすということは容易ではありません。

地域に根ざした活動とはどういうことなのか、九千名の観客を組織する力はどこからきてするのか、ゼミナールに参加してあらためて考えこんでいます。

「はぐるま」が九千名の観客を組織するまでは劇団員一人ひとりのなみなみならぬ努力と長い年月があったのだろうし、地域の演劇文化の必要性をにらんだからこそできたのだと思いますが、もっと詳しく具体的な行動とその歴史を知ることが出来たらと感じております。それは小都市だから出来て、大都市

だと無理なのでしょうか、それぞれの都市でのやり方があるのだと言ってしまうはそれまでですが、それをつかみきれずにいるのが私たちの現状です。

比叡山での二日間、私は大層な経験をしました。世仁下乃一座の芝居、特別報告をされたそれぞれの劇団、こばやしひろしさんの話、竹内先生の講演、全国の仲間との大交流会、経験を交換しあつた分科会など、私にとっては考えさせられることはかりでした。このゼミナールでの収めは、やがて私の劇団で、また福岡で小さくとも元気に芽がくことでしょうか。

大変なエネルギーを供出された事務局のみなさん、東西リ演のみなさん、ほんとうにありがとうございました。

## 言葉をさがしつつ 自らへの問いかけを

藤木久美子  
(青年劇場)

八〇年代の演劇状況を切り拓くために、のメインテーマをかね、東西演劇合同ゼミナールは、八月三、四の両日、六九集団、三九七名の参加のもと、比叡山をゆるがす熱い連帯をうみました。私にとってこのゼミは懐かしい人との再会の場でもあり、はじめて見合う出会いの場でもありました。でもこの状況(戦争とファシズム、搾取と人間抑圧、公害と自然破壊、社会のひずみと弱者の犠牲が加速度に進んでいる)の中で、私達が誰に、なんのために、どう演劇をやっていくのかの討議はすぐに一つの答を出してくれるものではありません。とりわけ十代の仲間の参加を多くみるこのゼミの中で頼もしさの中に幾ばくかの不安も感じました。仙台小劇場のS氏の感想の中でも「今日の状況を考えみると一寸見にはさほど差異のなさそうに見える

る事々の中に実は本質的な違いがあるのではないか」とふれられていましたが、私も討論の中で言葉をさがしながら発言している自分を思った時、今日の演劇状況を切り拓くためにもみんなの中に本質的な違いを越えられるような結びつきを生み出すような討論の運び方を工夫できる内容をもつことの大切さ、重要さを感じられずにはいませんでした。若い仲間の力強い発言もありました。教えられるものも多くありました。大交流会の大鼓のなり響く輪の中では、これだけの仲間がここに集まり、これ以上の仲間が全国にいるのだと思えばなんとも言えないものが体の中を走りました。私はこの二日間のゼミを通して、改めて青年劇場の歴史をふり返り私達が今もっている色々な場所での素晴らしい結びつきを考え直させられていました。毎日の新聞

紙面を、弱者の犠牲がかさります。本当ならば上演を続けていかなくていい状況がほしいのに私が、足かけ五年間たずさわった「かけの若」という作品は十月十三日をもってすでに五八八回をむかえました。東北の障害児学級を舞台に生徒と先生のおりなす人間模様は、人と人とのふれあいと連帯、教育の大切さを何十万もの観客の前につきつけてきました。それも大部分が不安と希望の交差する多感な高校生とむかい合っているのです。「何故演劇をつづけているのだろうか」という自らに対しての質問に、私は講演で述べられた竹内敏晴さんの言葉が心に残りました。人が人にふれるということは簡単なことじゃない。しかし本当にふれた時、私もその人も変わるのだから。本当にふれるということ、私達は今話し合い、考えてみる必要があるのではないのでしょうか？ そのことが今を切り拓く大きな一歩になり得るような気がするのです。

(編集部より・青年劇場の藤木久美子さん及び島田静仁さんの寄稿は、公演旅先のお忙しい中からいただきました。お礼を申し上げます。)

## 思いがけない収穫の喜び

戸保孝  
(劇団レオ)

小降りの雨は上ったものの比叡山を登るにつれて今にも降り出しそうな曇りが重たく迫ってくる。総会の終り頃、俄に降り始めた雨はやがて本降りとなり辺りは真暗になった。近くを稲妻が走りまわす雷鳴が轟く。

開会式は黄色い声の飛び交う異様な雰囲気の中で行なわれた。すでに雷雨警報が出され館内放送も落雷による停電が有り得ると告げる。一時間後に控えた野外交流会はほとんど諦められていたが、あるまいことか、今までの豪雨が嘘のように晴れて月が顔を出した。「東西から集まった仲間達の心意気が遂に天にも通じたのだ」と同行の後藤志げおの口を突く。

僕にとって今回のゼミは、これまで参加した数回の夏期ゼミナールの内で一番盛り多くなった。まだ浅い劇団歴でも多少はリアリズム演劇への理解を深める助けになった

のだろう。参加する度にガツカリさせられて今年も見合わせようかと最後まで迷っていただけに、思いがけない収穫に喜びも一人である。抜き差しならぬ多くの問題を提示されながら、一人合点かも知れないけれども状況突破の兆さえ幾つかの材料の中に感じて、明るさを取り戻して帰ることが出来た。

総会では議案の内容と説明があまりに悲観的になされたので、これに発奮した参加者が挙って反論し痛快だった。多くの先生は、こぼやひろし氏の世紀末論に向けられたが、最後に「新たな発展の為に刺激しようとして世紀末論を煽っているのだろう」と助け舟が出された。後で本人も「議案書程の深刻な悲観はしていない」と吐露し、フィレンツェ演劇祭報告の中では「新しいリアリズム演劇の方向が見つけられそうだ。」とまで言った。

交される議論には依然として厳しいものがあるけれど、この中で武器としてのヒューマンイズム、人間の英知で良い方向に向かわせたい願いは交わることなく生きていると確かめられたのは、当り前のことのようにだけれどもうれしかった。

驚いたのは、記念上演に対する客席の反応だ。世七下乃一座の記念上演は昨年からだ。僕は今回初めて観た。例年モアール上演の観客は、下手だと味噌糞に投下ろうすし、うまければうまいで冷たくツンと斜視し、全く始末に負えない手合いだったのに。それが信じられないほど暖かい雰囲気の中で催された。昨年のゼミで皆の人気をさらったこともあるからだろう。でもその時はそのことを知らなかった。初めの部分で皆の心を掴んでしまった舞台の力に驚く感心したのだ。だいたい中味に直接関係のない冒頭字幕「騙されちゃいけない。意味も知らずに役者はセリフを喋るのだから」は僕達の心をくすぐるではないか。ひっきり無しに爆笑が沸き起こり、終演ではやんやの喝采。こんな楽しい記念上演は初めてだった。但し上演に対する話し合いの場が設けられなかったのは勿体無い気が



する。勿論これまでのモデル上演で懲りたから（それとも遊びのゼミに徹する為か？）単に記念上演にしたのだろうが、簡単な感想だけでも皆から集めれば良いのにもと思う。主人公の行動を一貫して追い、他は削った方がすっきりするのではないかという声もあったし、作品としてはまだ完成されていないとも言われていた。僕としては社会問題と接点を持ち続けようとする意図をすつと進めて欲しいし、初めて観てファンになった一人としてこの後、どういった作品が創られていくのか待ちどしい。

その後の野外大交流会は、フィナーレで情熱のほと走る一瞬を見せ、祭りのあだ花とも思えた。これまでのゼミで剥き出しの熱気など見た事はない。東西り演の仲間達はいつたどこにこんなエネルギーを隠し持っていたのだろう。

地元の名産を持ち寄った集団が夜店を出し、舞台上では次々と各集団の出し物を演じ、舞台の前で花火を手を走り回る人も現れた。椅子に座っていた者も一人一人と立って歌いだし、僕もうち覚えの歌詞を声張り上げていつの間にか歌った。黒沢孝吉、萩坂桃彦が舞台に引っ張り出され、溢れんばかりに人が上って、

マイクを手にした一人が「こらーっこはやしはどこだあ？？」とやる。でもどことなく寂しい。朝々に問題を背負っている仲間達がいみじくもこゝに集まり、明日はそれぞれの地域に帰って行く。僕は昂揚した後のこの気息を忘れられない。

最終日に行なわれた竹内敏晴氏の講演は寝不足が祟ってか、うしろの方で何人かがコックリやっていた。白状すると僕もいい気持ちに成りそうだったので、ハッとして一番後ろに立って聴いた。という訳で初め少しまどろっこしく感じてしまったのだが、しかし次第に面白く聴いた。障害児教育を実践する氏は演劇創造の場での人と人との「一生」のぶつかり合いの方に強く魅かれたらしい。ここでは演技の技術云々をたしなめるように、人がことばを伝えるとはどんなことなのか、簡単なようにで実際はどんなに難しいか丁寧に教えてくれた。

僕が何年か芝居を続けてきて、人からは好きだから苦勞しているんだ」と言われ、自分でもいつの間にかそんな気になっている。ところが本当にただ好きなだけの人はチョットの困難とか、興味が他の物に移ると簡単に去

ってしまう。だから続けている人はそれ以外にも何か理由があるはずなのだ。

竹内氏の講演を聴いて、僕の表現への欲求の根っこは日常のうっ積した感情を芸術表現の場で発散させたいだけの底の浅いもので、表現への情熱をなくすことを恐れて無意識に窮屈な日常生活を自分に強い、なんとか芝居にしがみつこうとするみつももなさなのだと思ひ当る。だからこれを乗り越えないと新たな成長はとて望めないのだ。

### 〈32頁より〉

「おい、出発するぞうっ！」

ともあれ、往きの車中で話しあったことと、一日間の体験をどうつなげていくか——帰りもまた賑やかな旅になるにちがいない。

空は晴れわたり、すでに初秋の香さまで漂う比叡の山中で、第三回全国セミナーの幕は閉じられた。

（おわり）

## 特集2・ゼミナール参加の感想

# わたしの中のゼミナール

汲田正子

（劇団はぐるま）

雨もようのはっきりしない日だった。若い人達の車に仲間いりして、三時間半の道のりは退屈する暇もなくすぎた。

80年代の演劇状況を切り拓くために、

ゼミの大命題はいささか重たいなと心のすみで考えてしまう。限られた時間で、展望の糸口が見つけだせるのだろうか、自分ながら頼りない。車中では、その大命題につながらなくもない話題が切れめなく続くのだった。

最近みた幾本かのシバイの話。その中には、学校演劇のOB達が夏休みを利用してのグループもあり、そうした若い集団に刺激されて、若手だけで本当に燃えられるシバイを創ってみたいと思いつくも、行動に踏みきれない無り。第一に自分達にぴったりしたレパートリーが、簡単には見つからないし、更に気に入ったレバがそのまま「観客の求めるシバイ」になりうるだろうかという疑問、自由に

やってみると燃られても、どこかで古株連の思惑や、はぐるまらしさにこだわってしまう弱さのこと（演劇大学などで話しあうと、はぐるまのレバの多様性がいささか気取すかしい時さえあるのに、若手の感覚の中ではやはり、はぐるまらしさといった傾向性が、固定観念のように醸んでいるようだ）。

その弱さとは、とりもなおさず「力量」ではないかと思われること——むろん、レバの件や、現状をどうとらえるかということも含めてだ。

「力量」の話から、九千人の観客アラス移動公演「ステージ」を終ったばかりの、「アリババと四十人の盗賊」での誰彼の演技や、内輪話になる。私をのそく二人がすべて出演している上に、アリババをやったター坊（片岡隆司）がいるので、いくらでも話ははずむ。

「ずいぶん心配したけど、何とか初めての

主役をやりとげたね」

ター坊は入団して五年、農協につとめ、スタッフとしては小道具に専念している。級り性で、昨年の「郡上の立百姓」では、夏の現地見学で見た南宮神社のすみの古手桶が忘れられず、遂に公演の一週間前に雪の中から掘りだして、こっそり持ってきてしまったという話がある。忙しい最中、往復四時間も車を飛ばしてだ。

「郡上の立百姓」では、観百姓になり更に翻意して立方に加わる助動で、持っているものありつけをぶつけて熱演した。

アリババはたいして活躍するわけでもなく、柄や持味が要求される難しい役だ。危惧する声も多い中で、どうにかこうにか水準まで漕ぎつけた。「正直者のアリババさん、よかったね」という可愛いお褒りもたくさん届いた。稽古を重ねながらも役をつかめず悩みぬいた末、尿に蛋白がでて驚いたりしたという。

「でも、ぼくは思うんやけど、アリババって本当に主役なんかねえ？」

「本当の主役はラクダのラッキーやという説もあつたりして、」

笑い崩れながら、他の二人は好評だったラクダとの大立ちまわりの苦勞話をまた笑わせ

る。

地図をながめ首をひねりながら、琵琶湖を渡り、大津をすぎると。比叡山の中腹あたりで、ふいに山霧に出あった。

やがて、比叡山に入ってから速度規制をうなづかせる猿の群が——霧の間に間に見えかくれする。道のはしにうずくまる親獅子猿、ふてぶてしく悠々と道を横きる老いた猿のまだらな毛並み、ガードレールの上にちよこんと座った子猿たちの可憐な瞳。そして暮れ方の日さしにそびえる杉木立を包んでいく、濃い霧の幕……。

つかの間、私たちは窓の外の景色に見とれてしまう。

延暦寺会館の駐車場におりたとたん、

「ヤッホー、お疲れさま、荷物もってあげましょうかあ」

別の車で来たはぐるまの研究生たちが手をふっている。私の同乗者たちより更に若いグループが、屈托のない歓声といっしょに近づいてきた。

「何よりも、この場所を選んだという先見の明に脱帽します」

閉会式で読みあげられた誰かの意見に、私

もまた両手をあげて賛成する。

山のふところに抱かれた延暦寺会館は、ひたすら閑静で居心地がよかった。滋味ゆたかな精進料理の夕食（おいしいと思ったのは、空腹のせいか——お隣の青年はお菓の大半を残して、気前よく私にすすめてくれたから）のあと、迷路のような廊下を通過して新館三階の寢室へ荷物をおきにゆく。元の場所に戻れるかしらという心配は、

「イエーイッ」

ますむらひろしの漫画にでてくる、ヒテヨシ描みたいな林ミサ子の虫声で解消する。研究所を終えて入団したばかりの、本人はシャリン子チエのつもりでいる、生きのいい女子大生だ。

「イエーイ、御近所ですね、波田さん」

ヴェランダの外にひろがる霧の杉木立に見とれる暇もなく、

「ほら早くう、世に下のシバイが始まるんですよ」

ミサ子にせきたてられて大広間に戻る。

広間はすでに満員でわりこむ余地もなかった。ガラス戸をあげ、小雨にぬれたテラスをはだして歩き、前の方の廊下に進出する。演劇大学でのクラスメイトの市川くん（支木）

やはり感動的なと思わされる。

雨あがりの山道を歩いて交流会場に向う。

「ウワア、きれい」

前を歩いていた一団から、歓声と拍手が起る。

とりどりの提灯に飾られた広場は、杉木立にこだまする太鼓のひびきと共に、郡上八幡の盆踊りの夜のように華やいている。焼きとりのタレが焦げる香はしい匂い、立ちのぼるおでんの湯気、特産物市の賑やかな呼び声。これだけの準備に費やされたエネルギーを思うと、やはり「すごいな」としかい言葉がない。ゼミでも演劇大学でも、事務局の人たちは、分科会にも殆ど出られず、ひたすら働いていただくばかりなのだ。これもまた、身近な者だけしか知らないことにちがいない。

全国の仲間とこつたがえす広場では、たくさんの方のなつかしい顔々であった。

「いや、波田くんかあ、声きくまでわかれへんかった。二十年近く会ってへんのとちやうか」

学生時代、劇団京雲の研究所でいっしょだった小野くんだった。相変わらず元気いっばいで、京都労働の活動家らしい。「村の保守党」

で恋人同士になったものの、さっぱりうまくいかず、たまたま立ちよった藤沢薫さんに、

「ごつう叱られたやんか」

「むしろ、ほんまにベタやっただーなあ」

などと笑いあう。

焼きとりに生ビール、ふしぎな味のする北国の干し魚と冷酒。ふだんなら呑めない量の量をすとして、ステージ前の椅子にひとり座りこむ。未来や世に下の鮮やかなバチさばきにまじって、はぐるまの誇る二枚目（？）コンビ、なみ悟朗と三島幸司のいささか怪しげな「八丈島太鼓」、続いて劇団大阪のギターバンドに耳をかたむけていると、突然見なれた顔が、次々にステージへ躍り出た。

「劇団はぐるまの郡上踊り、げんげんばらばら」

やや酔いのみえる四郎左衛門、浦田尚の唄で、今年入ったばかりの研究生までが、「ドッコイショ」のかけ声も勇ましく踊っている。客席からこの踊りをみるのがもの珍しく、私は舞台へあがるのをサボって楽しんだ。

「どうして貴女が踊らないの？」

ふりむくと、コップを片手に包みこむような暖かい笑顔の黒沢さんが立っていたらした。

「こはやしさんは幸せだなあ」

が、「ヤァヤァ」と席をつめてくれた。

満員の同じく観る「かすみあみ」は、去年の視腹絶倒、意表をつかれた「仕掛花火」に劣らない、じっくりした京感を醸ませて進行する。作・演出の岡安さんはもとより、里村さんという俳優の魅力はたいしたものだと感心する。今年のレバは興味だが、たっぷりした味がある（去年は全力疾走。今年は長距離ランナーのように押えながら走る難かしさがありましたと、交流会で里村さんに聞いた。盛り上がりには欠けるけど、去年よりずっと怖いシバイかもしれない。こんなにすばらしい作者と演出者と俳優がいて、どうして世に下は仲間が増えないのかと、ふと思う。ともあれ、俳優の数が足りなくても、強引に公演を打つ気迫には感動せずにはられない。

場所をかえて、こはやしのフイレントニ報告。映写機の故障とかで、はぐるまの連中は右往左往している。「こはやしさんの話って……スライドも劇団で観たのと同じでしょ？ ぼく交流会にそなえて暮ようかなあ」と不埒なことをいっていた同乗者たちが、気づかわしげな瞳つきで、こはやしと映写機を見くらべていた。続いて後藤陽吉さんをはじめ、青年劇場の人たち。実感に裏づけられた報告は、

舞台上目をあてたまま吹やかれる黒さんこそ、いかにも幸せそうで満ちたごようすにみえた。自伝の方もほぼ完成に近づき、ほつとしていられたにちがいない。お元氣になられてよかったとしみじみ思う。少しはなれた所でやはりコップ片手に談笑してられる萩坂さんと見くらべて、何といつても一番喜んでいらっしやるのは萩さんにちがいないと、ふいに胸が熱くなる。

夜もふけて、特産物市の呼び声は、キョウチパーさながらの勢いだ。はぐるまの若手連中も、お買いあげの皆さんに「郡上の立百姓」のテーマソング「げんげんばらばら」サービスを前に、必死の売りこみをしたらしい。恐れを知らない研究生の野田君が、関雲の大師御河東けいさんの手をつかんで連れてきて、売り場の連中が息絶する一幕もあったという。

比叡山の夜気はさわやかで、申し分なく美しい夜だった。

寢室は河東けいさん、息吹の坂手さんらとこいっしょだった。合同公演「マリ・コミューン」『あゝ青春高校野球』の舞台成果やら裏話。「泰山木の木の下で」を終えられたばかりのけいさんと、同じレバを上演予定の坂

手さんの会話など、翌日の分科会の参考になる話が多かった。

何よりも現在ばりばり仕事をしている人たちの会話は、苦悩や試行錯誤を伴いつつも説得力に満ちていて、聞いているだけでも元気がでてくる。息吹の坂手さんは、翌朝早く子供劇場のキヤンプに参加するからと、一足さきに帰られた。息つく暇もなく活動している人達が全国にはいっぱいいるのだ。

相変わらず飲みすぎたの二日め、竹内敬晴氏の講演が心に残りました——青木茂

入団十年にして新人のつもりでいる青ちゃんによるゼミ報告レポートの冒頭だ。

「郡上の立百姓」では、ひねくれたオジ坊主の字吉、「アリババと四十人の盗賊」では強慾な兄カーシムと、着実に力をつけている中堅三枚目(?)の彼は、いま、相手役に観客に「伝えること」の難しさを痛感しているという。だから、竹内さんの言葉の一つ一つが身にしみたと書いている。

確かにシバイを創るための最も基本的な姿勢を学ぶことができる、いい講演だった。

第三分科会「レポートリイと今日の観客」は、石るつ境野さんのチューターで進めら

れ、劇団大阪の夏原さんと中村さんの生き生きした報告が印象的だった。

「バリ・コミュニケーション」では創造の過程で申し分なく燃えながら、観客との交流の中で一体感を味わえないもどかしさに苦しんだこと。いま「昆の館」に燃えている新入群と、手さぐりしながら、自分達のシバイを見つけようと悩むヴェテラン陣のこと。

例のとおり、源さんやワキらと事務局にいる加納美千子が、昨夜

「劇団大阪ってすごいよ。一人一人が役割を心得てる大人って感じがする。色んな意味で充実した集団だと思うな」

と加納ちゃんには珍しく手ばなしでほめていたことを思い出す。

その他、労働争議を扱った昨年の創作劇にくらべて、名作「アソネの日記」にいま一つ燃えきれなかった四紀会の報告、正反対に、争議を扱った創作劇が成功せず、本当にやりたいシバイをと「第三の証言」をとりあげた支木の報告など、じっくり深めたら有意義にちがいないと思われるのだが、どちらの舞台もみていない哀しさ、どこやらで嘔みあわめもどかしさが残る。

成功と不成功の分れめが、果して扱うテ

マだけの問題なのか、創造的な深め方に差があったのか——いつもながら、限られた時間での話しあいには、はかなさと悔いが残る。チューターの境野さんも苦労されたにちがいない。せめて三日の休暇がとれるならと考えるのは悠深だろうか。いくつかの疑問や、殆ど発言せぬままにすぎた何人かに、申しわけない気持ちのまま時間ぎれになってしまう。こうしてゼミナールが終了。

一口感想は——威勢のいい声、冷静な声、雅な声——読みあげられるたびに、笑いや拍手が起きた。

記念写真や、再会を約束声のとびかう中で、杉木立の比叡山と全国の仲間たちに別れをつける。

80年代を切り拓く展望は見つかったのか——心細いなど胸のすみでは吹きながら、所詮したたかに、堂々と試行錯誤をくりかえすよりのないという想いもある。第三次交流会でこばやしさんの危機意識が伝わりにくい現状が不安だと、熱っぽい口調で語った石垣くん(仙小)の強いまなざしがふと心をよぎった。「フェードル」の演出としてはりつめた日々がしのばれる緊張感が、そこにはあった。

(以下28頁につづく)

## 西り演第十九回総会・寸感

仲 武 司  
(西り演議長)

八〇年代を迎え、第十九回総会が、京都の比叡山・延暦寺会館で開かれた。

昨年の総会は、七〇年代をふりかえって、まさに苦闘の歴史の集約的な会議であった。

いわゆる、正論を押し出しながら、その正論が重く肩にのしかかり、八〇年代を、如何に生き残るか、そんな想いをかけた総会であった。

今年は、七年ぶりの東・西合同ゼミを堪能した高ぶりからか、開会を前に、例年とはひと味ちがった、華やいた空気があった様である。

今年の総会の特色は、劇団の創造に関する、具体的な問題が議論されたことだといえる。

一つは、劇団「草の表」による報告で、劇団員が、自己の生活の断片を演劇化し、五〇人劇場なる、アトリエ公演の経験をめぐる論

議。

今ひとつは、大阪職演連(西り演五劇団の加盟する)の合同公演「バリ・コミュニケーション」にからんでの問題であった。

「草の表」は、先の「走れメロス」(広瀬常敏作)の好評のあと、劇団員が改めて、自分たちの生活を見せたいと、スケッチの劇化を始めた。

約10本の作品が集り、戯曲としては未完成であったが、演劇的な空間が埋まる楽しさがあったと報告されている。

作者自身の生な生活が、さらけ出されるだけに、当然苦痛であったろうが、同時に劇団員間のコミュニケーションによって、新たな信頼関係を生んだという。

一例として、地元の造船工場が不況を理由に希望退職を打出した時、劇団員の一人が、身体も悪く、退職すべきか迷っていた。会社

はその人を退職対象者として、三日間隔離し説得した。この体験を自己の弱点も含みつつ、劇団員の前に提示していく中で、互の生き方を見つめ合っていた。という内容である。

以前、「月曜会」でもこの種の試みから、創作劇人(仕立職人)を書いている。

自分の生活を断片とはいえ、見つめなおすには勇気がいる。だが問題は、そこから普遍的な真実・真理を、どの様に発見しうるかであろう。

たしかに、一人の人間の体験の中には、全般的な社会の反映がある。だが、どの部分のディテールをさぐるのか。逆に云えば、ディテールをさぐらないで、世界がえがけるか。この辺りの論議に入り切れないまま終わったのは心残りであった。

かつて無着成義氏のすすめた、生活つくり方の運動があった。後年、無着氏の教え子が成人して「先生には、生活の実相について学んだが、行動は教えられなかった」という様な文章を読んだのを思い出す。

既成戯曲を、蟹の穴よろしく、あれこれ当てはめる、借り着が流行する時、自ら模索し、人間のいとなみを肌でつかもうとすることは大切なことである。

「草の実」の報告に、幾つかの劇団は、早速劇団活動にとり入れようとした様である。たゞ、これを方法論としてだけまねる風俗化に止まる。

「草の実」の試みは、今後のリアリズム論への課題の一つとして、見つめていきたい。

「パリー・コミュニケーション」に関連した問題は、重苦しかった。

会場を埋めた観客。その動員に懸命に取り組んだ者ほど、舞台の不評から受けたショックは大きかった、と発言され胸が痛んだ。

「劇団大阪」よりの報告は、きわめて理性的なものだった。

——自分たちの中の、民主主義の不在を思い知らされ——自分に引きつけたところから、出発できず——これから本当の標古、と思えた時義が閉き——ブレヒトが鋭く批判し、えがいたセリフが、己のものにならず——今の生活に麻痺した自分——等々。

どの発言をみても、厳しい自己批判がこめられていた、とは思ふ。

ブレヒトの教育劇が、人の前にまづ自分への教育としてつかまねば、観客には通用しないことを、充分認識しての発言でもあった

ろう。関連して、ブレヒトの連続上演をつづけた劇団「どろ」から、——当時のフランスズムと、今日との差を今、感じている——と、これまで意外な発言も出ていた。

整理された、理性的な、反省の報告が全面に出たためか、論議はすすまなかった。

むしろ、総会の参加者は、なぜ、今、「パリー・コミュニケーション」なのか？ 上演に至る、発想なり経過に、問題のポイントがあったのでは、という思いがあった。

あるいは、その辺りのふれにくい諸事情の中にこそ、総会で論議され得る内容があったのでは、とも思えた。

「草の実」のアトリエ公演と「大阪職演連」のパリー・コミュニケーションとは、まさに両極である。

もちろん、加えて二で動るというものではない。

我々のリアリズムは、その両極からのせめぎあいを必要としている。

「あるべき姿」「ある姿」「あり得る姿」の対比と、誰れかがうまい表現をしていた。パリー・コミュニケーション公演の標古の過程で

動員のアピールに出かけた若者が、シェアレーヒコールの際、自らシラケでしまったという。そのシラケを批判する前に、そのシラケの現実をこそ直視すべきであつたらう。

これらをもつて、論議は劇団論、観客論へと移行する。

特に、劇団の独自性が薄められてきている点が指摘されていた。

市民権という言葉が出ると、広く市民に……と、その方法に頭を悩まし、広い層に、アピールできる戯曲と、それがあたかも唯一の道であるかの様にあたふたする。

自分たちの劇団とは、を今一度明確にすべきでは、と論はつづく。

かつて、総会では、その年、活潑な劇団を、一種のモデルとして、論議の材料にすえた。

しかし、それは各劇団が、模倣するために論じたわけではない。

各劇団の経緯を、どう自分たちの劇団活動に生かせるかは、全く劇団の主体の問題なのである。

今回の総会が、改めて、劇団の独自の観客、独自の活動にふれた意味をもう一度考えたいと思う。

従来から西り演総会では、組織運営についての論議が欠落している。

加盟劇団からは、西り演そのものへの期待薄もあつてか、この種の要求が出にくい。

もちろん、指導する、されるの関係ではないにしても。

今回もまた、事務局問題は、藤沢薫氏に押し付けた感はまだぬげなかった。

特に最近、運営委員会のもち方すら、交遊費の節約から、大阪中心に会議場所が限られ、その為、中国・四国・九州の諸劇団と、運営委員が疎遠になっているのが現状であつた。

経費の節約が、合理主義を生み、運動の連帯感を阻害していたといえよう。

今総会の活動方針に、運動とかかわりあう運営委員会への持ち方が、新たに提起されている。

昨年より引きつづき、「リアリズム研究会」と「問題別学習会」「演劇学校」的な集会を含め、今年は、運営問題に一つの転機をもたらさねばなるまい。

八〇年代を迎え、一種の、ひらきなおりに似た総会であつた、といえようか。

に残ったことのみ記してみたい。

先ず最初に、当日くはられたタイプ印刷のニュースが昨年度の総会の報告文書で、又、今総会議案書もレジメ程度の議長報告の骨子に近いもので、これも当日配布のもののも様だつたこと。卒直にいつてこれでは權威ある西り演の総会に、各集団でそれを討議し、深めることや問題点を出すのに、又、真に総会が西り演加盟の諸集団全体の指針にするものになるには不十分ではないかと思つた。

次に、東り演より西り演の方がしたたかな論客が多いなあと思つた中で色々と感じたこと。光つていたのは、月曜会、の土屋氏の若者の問題と、後家の頑張り、でつづばつてでもやっついていくんだという現実を直視した居直りにも似た決意の程、……福岡現代劇場の藤沢氏のリアルな目、仲議長の日本の今日の問題とどう対応すべきかというオーソドックスな視点、藤沢事務局長の、戦後35年の民主主義が今問われているんだという危機感、……「パリー・コミュニケーションの日々」の演出者小松徹氏の、てめえの生き様をむきたしにした演技の必要をいわれた演技質の論議、「どろ」の合田氏のブレヒトと今日の問題意識。それに何より面白かつた報告に「草の実」の若い集

## 西り演総会に参加して

島田 静仁  
(東り演・青年劇場)

まもなく六百回を迎えようとしている「かげの岩」の巡演先近畿コースで、この文書をまとめています。新しい編成で私は谷川先生という大役を、三年ぶりの普及活動から舞台復帰し、激しい公演活動の合間をぬって書いているため、大部抜けている面がありますが御容赦下さい。

東り演総会に参加すべく比叡山会館に到着した矢先に、こはやし氏からいきなり「青年劇場から、あんた西り演総会に出てくれんか」といわれ、適任ではないので他に然るべき人がいるのでは……といいつつ、自身一度西り演の人達の話を聞きたいと思い、興味と野次馬根性でのぞかせてもらった訳だ。以下印象

団が自分の日常生活の断面を切つてスケッチ制作の楽しい試み。これについては総会の中でも一つの大きな話題になった問題なので後にふれる。

きづ川、林田氏の実人生をかけた演劇行動と労働者として生きることとの接点を自らの首切り争議の中で闘っている生々しい報告、大阪の二つの合同公演での、何人かの若い中堅世代の真摯な意見(劇団大阪の堀江氏、わたちの又川氏、息吹の人……)等、大阪勢の迫力にはしたたかさを感じた。

討論の中味では、土屋清氏の発言にあるように、労働の風化とか、劇団の中で自らの職場、労働の状況が会話にならなくなったり、家を建ててローンに追われ、子供を風呂に入れないといけないので劇団に結果しない、もう親の死にめにあえないような演劇活動は古いのではという考えが支配的になってきているとか、劇団員がお客様になっているような状況の中で、そうした若者の問題と真正面から葛藤しないことは現実と葛藤しとらんことではないか、現代の危機的状況をとらえ現実の直視の上には、リアリズムは生まれえないのではないか、わしは、後家の頑張り、になろうが、それでいく、さむらい精神でふん

ばらん限りでまん状況だ、それでは今の若者はついでこんかもしれないが……やるしかない、と若者に、或は現実の抱えている危機的状況に挑戦している、その気迫が総会のトーンを決めていた。

それと对象的といつたら適当でないかもしれないが、劇団「草の笑」の劇団員の日常の断面を切つたスケッチ制作劇づくりの報告は若者らしい楽しい報告であった。東京の阿佐谷で活躍している「展望」の「真昼のちようちん」という劇団員全員の一人一作のスケッチ制作劇づくりを直接のきっかけとし、又ブレヒトの教育劇や「日本繁栄学入門」で試みられた手法を学んでの自分たちの創作体験であったようだが、単なるスケッチにおわらず、社会的なものになったようだ。その三本連作の内一つ、ある若い劇団員の造船職場での会社のいやがらせ、三日間に亘る労働室での課長とのやりとりの体験をメモ的に綴つたものを劇団員で討議し、作品化していく作業を通じて、その本人が客観視することが求められ、変革されていくなかで、演技も生々としたものになり、劇団員同士のつながりが強固となって、単なる日常の断片をスケッチしたものでなく、今日の危機の断面を社会的に

描いたものになったのではないかと懐刺された、なにより劇団活動が楽しくなったという報告が、総会の中で話題と関心を呼んだ。

大阪自立演劇連絡会議合同公演の一つのブレヒトの「バリ・コミュニケーションの日々」の上演も、一つの話題となった。何より若者の生活が日常の中で怒りや斗いを喪失したなかでブレヒトのセリフが体現され生きたものにならないなかで、どうにも判りにくかつたことが、色んな角度で分析され、その判りにくさは一体何だったのか、若者の風化現象、労働、闘かい、変革、怒りといったものが、今日の日常性のなかでの恐るべき喪失、頹廃があるのではないかと思つたことでした。

とまれ、全体を通して状況が深刻ななかで、その危機を充分認識し、精気ある状況に蘇生させる必要が叫ばれ、最後のしめは土屋氏の「後家の頑張り」で進めていきたいと決意表明される。

現代の危機の深化→若者らしさの喪失→日常性の破壊・頹廃……。そうしたものと闘かい、変革への挑戦の仕方、質、色々と考えさせてもらった総会でした。

その他には、大津の「自立の会」や歌舞伎の上演をしている集団、九州、四国の各集団

の報告など、もっとじっくり聞きたいことが多々あったが、西日本で活躍している諸集団の今抱えている悩みと喜びは東日本でやっ

ていること又、私たち青年劇場でも全く同じことだと思つ、互いに健闘をしいたいと心から思いました。

が軒並欠席している。まさに「ゆるがせにできない問題」だな。

A 東り演議長は冒頭挨拶でも、弾力な先進劇団の前進とともに、諸困難をかかえた小集団がそれぞれの場で力を発揮できるように東り演のキメこまかい方針・計画と指導をと、それが八〇年代の展望の基礎条件だと言っているんだが。

Z しかし実際には、討議の中で殆どその問題は論議されていないんだな。

第一夜、東・西り演議長挨拶。  
つづいて、六ブロックの報告。

A ブロック報告は議案書にも載っているから、一重のなぞりという感じがする。

Z もっと問題点、特徴点をしぼって、討議にひきつがれるような提起がほしいね。

A そうだな、例えば北海道の山道演集の現況と問題点、②さつぼろの「常紋トンネル」とりくみの詳細、③脚本センターのこと等、つこんでききたかった。

Z 奥羽と山静の報告からは、ブロックが生きて作動している印象をうけた。そこをみっちり討議するともっと面白い総会になる

## 東り演第十八回総会をめぐって

— A と Z との対話 —

黒 沢 参 吉  
(東り演議長)

Z 総会の纏めなんて面倒な作業だな。こうしてテープ聴いてもう一回総会のおさらいをやつて。何かの役に立つのかねえ。

A のつけから文句言うな。記録がのこるだけでも意義があるだろう。

Z どうかね。秋風吹く今頃は大概の劇団が公演準備のまっ最中、総会がその活動の活力と繋がつてる実感は稀薄だな。

A だったら、そのこともひっくるめておさらいするさ。まず事実関係を記録しよう。

・黒石・仙谷小・だいこん座・土の会・東芸・青年劇場・京浜・石るつ・やまなみ・静芸・からっかせ・岡崎・四日市・名芸・名古屋・演集・はぐるま、二一集団。(世仁下乃一座はゼミ記念上演準備の為欠席)

西り演から京芸の早見栄子さん、東り演から青年劇場の島田静仁さんが、オブザーバーとして交換出席。

総会議長に、弘演の佐藤佳造さんと仙谷小の佐藤克夫さん。

A 総会参加が加盟四〇劇団のやつと半分強というのは、史上最低だ。

Z しかも、議案書で坂坂さんが、弱小もしくは機能の止つた集団、とよんだところ

東り演第一八回総会(議案書機記の第十七回は誤まり)・八月二一・二三日・於比叡山延暦寺会館。

参加劇団：さつぼろ・弘演・玄木・レオ

話だよ。折角の実践報告が、議案書の提起とかみ合わないで消滅してる感じだ。

議案説明。(7)についての補足。討議。

Z これだけ綿密に書かれた議案に補足は不要だ。各劇団が団内討議してきているんだから、すぐ討議に入った方がいい。

A (7)に載った黒沢、萩坂、丸子三氏の手紙又は本来議案作成の援助の意味でかかれたもので、その部分的放棄を総括し結語にされるのは不本意ということで、それぞれから補充の発言があった。

Z 丸子さんは、①状況把握の基礎材料、データが不十分。社会・経済等の専門家も含めた情勢分析、理論深化。②演劇活動をイデオロギー闘争の一環として捉える視点。③レバの一般傾向や観客数の多寡等ではなく、活動の成否を捉える新しい評価基準。この三点の必要を主張したとおもう。

A 萩坂さんは、六〇年代の方法で今日の現実を描けないが、その現実の変化は自然現象でなくそれを動かしている力がある。その認識が重要だということ。それから例の雨の中二〇キロ彷徨して死んだ幼い子ども

の神話に絡めて、描くべき荒唐や奇譚の現実は身近に山積している。身の廻りから人間を温かく、そして鋭くつかみなおす作業一斗いを、別の描き方で追及すべきだと附言している。

Z 萩坂さんが、この議案では何を討議しようと言っているのか分らぬ、これでは議案は議案、劇団実践は別ものという乖離が生じる、と言ったが、実際討議からは警告どおりの印象をうけたな。

A 議案①は、国民の生活意識の変遷——とくに若い人の保守化傾向、②はその時代背景の中でのリアリズム演劇の凋落、という問題を提示しているんだが……

Z それはもう七〇年代半ばから、危機的状況ということで毎年出ている。こはやしさん自身、又もやベシミスティリな議案で、と苦笑いしてるじゃないの。

A しかし、もう分ったと棚上げしとして、それぞれなりに頑張ろうでいいのか、とやまなみの小谷さんも言っている。

Z 棚上げのつもりはないけど、論議のギヤが噛み合わず空転するのは困るね。状況把握ならそこへ全体が集中すべきだよ。

A 現場で実践している立場からは、①②の

問題も抽象的なことではなく、実感としてある訳だから、どうしても徹視になる。Z でも、巨視的な問題に実感論で対応していたら、どうにもならんよ。それから、客観情勢の評価とわれわれの願望——方向性をムリヤリ一致させたがる論法も困るね。

A うん。こはやしさんも情勢分析がまちがっているのか、そうなら皆で正そう、リアリズム演劇を否定しているんじゃない、新しいリアリズムを生み出す必要があるのだ、とハッキリ言っている。

Z その点では、二重の搾取——圧迫を受けている勤労青年の立場から、今日の現実がどうおさえられるのか、生産力や技術革新、階級性の問題をヌキに国民意識の規定はしきれない、とする青年劇場の後藤さんの発言や、年代の区切りを断絶ではなくスライドとおさえ、過去の仕事——所産を分析検討しそれをバネに突破口を(特にブロック中心に)ひらく可能性が大きくなっている、というさつぼろの飯田さんの発言などをうけて、もっと深められた気がするね。

A 京浜の城谷さんが、多くの劇団が内外の困難と闘ってすすめている実践を知りたい、その劇団活動の評価(ここでも数値的なも

のを超えた、という言い方が使われた)を中心にすえた議案でない、発言のバネにならないと言っている。

Z 京浜はむしろ状況把握の問題として、劇団活動は高校野球とちがう小党派のたたかいたとか、ムダのつき重ねが大切だとかのセオリーを大胆に押し出すべきだよ。

第一日。ひきつづき議案討議。

A 噛み合っていないな。総会議長は議案がどう言おうと、劇団は活動をすすめている、としきりに挑発しているが、発言は単発で消えて討論にならない。

Z お慮で、と言っただけだが、レオと四日市の活動状況は後藤さん、森さんの活発な発言でとてもよく分ったがね。

A 小谷さんが六〇年当時「桶三吉の青春」などに触れ、ときめきを感じて自分の生き方と結びつけて芝居に踏みこんだ、その体験が風化していくところで今、人間を描くなら生産点へ目をむけるしかない、と言っただね、波紋ひろがらなかつたけれど……

Z レオの後藤さんが、芝居が状況の悪化のささやかなが歯止めになっていると言った

ときね、此方で本当に歯止めになっているのかって小さい声で誰かね。あれ、大きい声で出せば主観を客観的に検証する問題が、浮きだしてきたんだがな。

A 士の会のよしださんの、黒沢、こはやしが書けなくなったのは外の状況のせいとか、質問や、だいたい座の高橋さんの創作体験をめぐって、創作の援助の問題、それから丸子さんの大須事件劇化の話に繋ったが、これは面白かった。

Z しかし、昔の東り演の創作部会や創作学校の熱っぽさを回想すると、若さがなくなつたというか、何だか冷えた感じだな。

A 才能ある書き手の出現を待ってる……

Z せいぜいと言ったら叱られるが、集団創作。これも劇団単位。単発なんだ、みんな。

A 浅利豊太氏が仙台で「チヤン」とした劇団をつくる話から、文化庁——自治体助成の話。自治体から継子扱いのレオと、いいセン行つてる四日市。

Z 発言者が決まってしまった感じの中で、岡崎の創作劇のとりくみ、新人会の「風の中の赤いバラ」のとりくみ、地味な報告だが東り演の初心に触れたような気がした。

A 弘演の発言も初々しい感じだった。作問

の娘さんがこんなに成長してという感慨ばかりでなく、こういう料見で小劇場公演、子どもの芝居、名作、「銀河鉄道の恋人たち」をやるんだという劇団のおもいを、まっとうに押しだしていた。

Z 若さの魅力だねえ、あのクラスのメンバーで東り演——総会やつたら面白いな、蛇度。

A 早見さんが、若い人が入ってきて京芸が変ってきた話をしたが、若者をどう獲得するか、かれらの可能性をどうひきだし、われわれの力と食い合わせるか、議案も強調してるが運動のポイントだね。

Z 劇団の事情はその通りだが、若者の方じや後継者になるみたいなことに魅力感じるかね。若者の本質は反体制だろう、今は劇団も保守化——体制化しているからね。

A そう言ってしまったんじや身もフタもない。地域に責任負って活動を継続し発展させるのは、劇団の基本的な課題だろう。

Z 劇団の側から見ればね。だから、せいぜい老化を自戒して青年の共感を得られるような活動、組織を考えることにもなるんだが、一方でオレたちは現有メンバー一代限り、やりたい芝居をやる、後継きなんぞクソくらえとか、若い奴は若い奴でやりたい

ことやれとか、そういう土性骨も欲しいな。

A それじゃ劇団一代論じゃないか。

Z 地域の側から言えば、甲乙丙丁いろんな劇団があって、多彩な舞台をみせてくれる方が結構だよ。責任云々は、言いたしへの東り演劇団が骨折って劇団協議会つくって、そこでしょつたらいいさ。

A ま、その話は又にして先へ進もう。討議の終盤に期せずしての感じて京浜、さっぽろ、青年劇場、はぐるま四劇団の創造理念が展示されたね。これをめぐっても、論議の突込みがはしかつたんだが……

Z どうしようもない労働者へのこだわり、かれらとぶつかって喧嘩して削っていく、という中沢さんの発言は、生産現場で人間を捕かねばという小谷さんの発言とも重なって、東り演劇運動の一つの特徴的な極を作っている。議案の提示した状況への、政治プラス創造の対応で一番鮮明だな。

A しかし、小党派意識や赤字ものともせずといった立ち方には、近づきたい乃至アレオアレヨの感を受けもするね。

Z こはやしさんが、京浜と岐阜の違いを言ったろう。京浜全部がそうじゃなからうが、協同劇団を立たせてる土壌がある筈だ。そ

れは現在狭いかもしれないが、大事なものは根なし草じゃないってことさ。

A 後藤さんが、NHKで放映した三好京三氏と岩手の女性の戦争体験の対談に絡めて、自分の中の劇場の概念をこわしてドラマの本質に迫ってみたらと言った、役者岡吉さんの発想だけに非常に面白かった。

Z あれは俳優の自立と内部充溢が劇的なものの柱になるという自覚だね。それと飯田さんが出した、日常三六五日の作業としての人間の典型化の問題、これもぶつけ合わせると凄く面白い素材なんだけど、次の大ででもやってもらおうか。

A ここで、水戸市の劇団おけら（一九七二年創立・代表中嶋右浩さん）が、全員の拍手で加盟（関東B所属）承認された。

#### 活動方針討議

A 「日本の演劇を考える全国集会」これは目的、構想等がもうひとつ呑みこめない感じで、討論にならなかつたな。

Z その点では、東西演劇の合同「全日本リアリズム演劇会議一本化」の提案もそうだ。具体的な検討の叩き台が出て来ないと、良

いも悪いも言いようがない。

A 「演劇会議」中心に、一年位精神的にキャンペーンをはつたらいいな。

Z その場合も、議案⑦で丸子さんが曖昧になったと述べている「芸術運動」の視点をキツチリ再確認すべきだろうね。

A 「ブロック活動の強化」―飯田発言や奥羽・山静の報告から、（ブロック独立宣言の印象をうけるほど）B活動のメリットと重さを感じた。年間の活動総括報告がほしいし、B活動論もそろそろ期待できる。

Z 加盟劇団を軸にして、地域ごとの演劇協議会と文化団体連合をつくり、強化することで国民本位の地方の、文化の時代を実現しようということだ。

A 八一年はBゼミ実施の年だが、これを中心にブロック内劇団の総点検をやつて、全部の劇団が「よし、これでいこう」という意欲と活力をもって買いたいね。

Z 「第六回演劇大学」では、地域開催とか演技実習への希望も少なくなつたけれど、運動の核―幹部教育としての大学という、本来の役割の強化を望む声はやはり強い。

A 五回やつて一定のペースはできたが、マンネリ化しないためにも、劇団の具体的な

費を事務局に集中してほしいな。

Z そう、参加費も旅費もバカ高くなる、それ以上の実益を身につけなけりやね。

A 「頑張ろう」という確めには程遠いな。

Z なあに、現場じゃ街ががんばっているさ。

A そこへ期待をこめて……ご苦労さま。

## 東り演総会に参加しての雑感

早見 栄子

（西り演・劇団京芸）

二年にべん位、西り演の総会に参加していつもよく思ったことは、自分との間にずれがあるということ。「これこれの新しい集団が生れて、地域の観客にはげまされ、こんな素晴らしい活動をしています。」という報告がなされれば、「こういう所で、あんまり水をさす様な発言はさしひかえた方がいいな。」と思ひ、「うける芝居、大衆的な演劇を」と言われれば、「いままら、当り前のことを」と言つた風に白けるという具合で、何となくかみ合いにくかつたようです。

今回はそういう感じはありませんでした。何だかとても新鮮だったのです。一年近く怪我のため休んで、私自身が、いわばマッシロの状態であつたともいえますが……。

何故新鮮に感じられたのか？ と考えたのですが、一つは、世の中の動きそのものがめまぐるしく、創る側を自分たちの論理の中だけにとじこめて置かない状況になって来た。うかうかしていたら、すぐビシャツとやられる。客観性を持たざるを得ない。そんな所に発言する人も、聞く人も立たざるを得ない様になりつゝあると思ひて来ました。そして、もう一つは、東り演の長い活動の中から生れた智恵が、それを切りぬけ、よりよい方向性を見つけ出して行く力を持っている。それは非常に具体的な方向性である。そんな土壌を持っていると思ひて来たのです。

こはやし事務局長のエキセントリックな問題提起、ちよつと驚きました。しかしその発

言には真実があつて、ウーンと考へていると、めまぐるしく言葉、言葉がとび出して来ました。「若者は本当にやる気がないのか？ 金大中助命の街頭アヒールに参加して、署名をしてくれる人とのふれ合いから、若者の意識が變つて来て、それが日常の劇団生活や、創造への姿勢にもはね返つて来ている。」「本当にリアリズム作家は書けないのか？」「郡上の立百姓は今通用しない作品なのか？」等々。

はぐるまと青年劇場の報告は、学ぶ所多かつたです。はぐるまの仕事は、本当に地域に根ざした仕事であると思ひます。生産労働者のいない町―そこで根を張つて観客と一緒に劇団を削つて行くには―そのことを考え実践して来た劇団であると思ひました。そして内部の行動目標のたて方も必要な所を適切におさえた内容のあるものだと思ひました。

☆ 世界観の統一をはかる。

☆ 魅力のある舞台をつくらう。

・ ナチュラルな演技からの脱出。（セリフの長い翻訳劇をやる。）

・ 書きたいことを書く。（創作劇）

・ 裏方を強くする。

☆ 観客との結びつきの点では、

- ・ 観客が高いと思わない料金。
- ・ 芝居のたいご味を味わうことが出来る芝居。登場人物の豊富さ、装置の立派さ等々。

何でも無いことのように、いきとぎいた配慮であり、それをまともに実践して来たということが、何よりすごい事です。

青年劇場の報告から、劇団の若々しいエネルギーを感じました。10年前の「国治を返せ」「たんぼの唄」の創造の苦勞。ある人達にはひんしゆくを貰うようなまともでナチュラルな追求の仕方。そして頭打ちしたら、真剣に脱出を考え、早急に生きかえって行く創造のエネルギー。

北海道でも東北でも、創作劇の創造に取り組まれている報告が多く、心強かったです。次々きに矛盾が出て、事が進まないという座っていらした方の姿が目に見えようです。あの姿からは暗いものは感じられず、何か前へ一歩でも半歩でも足をふみ出して行く、ネバリ強さが感じられました。それと、長く書いていられる作家の方の助言とが、平たい所で話されるので、新しい創作劇に対する期待が湧くのを覚えました。劇を書くという仕事、東り演という所で続けられて来た、そ

の歴史みたいなものを感じました。わが劇団東京でも、かつて、「西陣の歌」「雪崩」「ひやごたんの杵」などの創作劇を生み出して来ました。「西陣」では、「隣の家の壁がとれてのぞいた様な」と。「雪崩」では、「十九世紀のロシアの、写実画を見るような丁寧な仕事」などと言われましたが、その後、創作劇を生み出していません。

芝居の魅力の一つは身近な親近感にあると思います。ナチュラルになることを恐れずに、もう一度創作劇を生み出したいと、しきりに思えてなりません。

黒沢さんがブロックの劇団を尋ねられた時、「こんな所に川が流れていた。その水は身にしみて美しかった。」と思われた話、大いに共感を覚えました。私も何年か前、劇団の雑用や、お金を稼ぐ仕事で走り廻っていて、ふっと自分の家の庭を見たら、一本立っていると思っていた金木犀が、一本しかなくてキョットした事がありました。最近とはみに、裏の公園の木の葉の色の変化や、近所の人の暮らしぶりが心にしみるようになりました。やはり人間が主人公だ。じっくり京都に腰をすえて、すばらしい人間像を描いて行きたいなアと思っています。

其の他に、ブロック活動や、演劇大学のことで、素晴らしいと思いきや書きたかったのですが、時間がなくて残念です。

以上、東り演の総会に参加して思った事、雑感です。

読書

岸輝子さんの『夢のきりぬき』

よくありがちな俳優の苦勞話などではない。気さくなお話である。それがそのまま折紙細工を見るような美しい文章になっている。つくったり、気どったりできぬらしく、読者もつりこまれて、素直にさせられてしまう。「干田と私のこと」という副題がついていて、獄中の干田先生との往復書簡がのこらず読める。そこではどこか痴狂な岸さんも必死である。

一五〇〇円。

発行所 港区港南二二三一一三  
東京新聞出版局

# 劇団通信

演劇集団石るつ

総会・合同ゼミに参加し、勇気づけられました。私たちは私たちの手で足で地域に広がり、私たち自身の個性ある集団創りをしていかなければならないことをあらためて認識しました。

我が集団は元代表者秋山昇が9月22日をもって退団、他一名も退団。集団の方向、あり方をあらためて討議中。問題は幾つかあるが全員、今後の活動に前向きです。今年の秋の公演は出来ませんが、来年に向けて努力しています。来春の江東演の準備も今からすすめています。集団内討議をしながら、今年秋の第18回東京動らくもの演劇祭は、「世下の一塵」・「千くれ」などの集団に協力という形で参加。「演劇会議」は今後十部にして下さい。団員を増やし回復に努力する。(境野)

(260) 千葉市幸町2-13-7-501 境野方  
〇四七二一四四一三六八一

劇団みみずく

9月14日(日)2年に一度開催しているオホック演劇祭の第5回目が、美観町民会館で開かれました。上演は、演劇集オホックブロックの

- 劇団海鳴り(紋別) ゆきと鬼んべ (さねとう・あきら)
- 劇団河童(北見) 大阪音語り・桑原信太妻 (かたおか・しろう)
- 劇団みみずく(美穂) さつば夜ばなし (竹内勇太郎)

この三本に加えて急遽参加が決まった演劇集団ポストカンパニー(北見) 太鼓 (木谷成生)

の四本でした。現地の劇団みみずくの団員数が六名という少数のため、前売り等にひびき観客数は二三〇名と、普段より若干少なかつたことは残念なことでしたが、芝居が終つてから全員で泊りがけでの交流ができたことはうれしいことでした。(阿孫子正和)

(092) 網走郡美幌町三橋一十一一〇  
〇一五二七二二二三三五五

劇団阿波つ子

久々に比叡山ではやしさん、仲さん、萩

坂さん始め、懐しい皆さんのお元気なお姿に接し、また次代の日本の演劇を支えるであろうフレッシュな若い人たちに目にかかることができ、私たちにとって大きな励みでした。徳島からゼミに参加したのは、福山仙酔島以来ですから何年ぶりになるのでしょうか。

私達をとりまく情勢は一面ますます厳しいように見えますが、このような中で、80全国合同ゼミが成功し、徳島から一度目の参加がからとれたということの中に、決して展望が暗くないことを肝に銘じて、更に不屈の前進へ立向いたいと考えます。間もなく劇団阿波つ子機関紙№6が出ますが当然ながら、80全国合同ゼミ特集となります。比叡山で仕入れたファイトで劇団は近く第二回劇団阿波つ子をめぐり集いに取りくみます。若いエネルギーな団員の方で新しい劇団をめぐり仲間たちを結集し、劇団の飛躍をめざします。

彦市はなし。のけいこはいよいよ立上げいこに入り、小道具製作にも熱が入り始めました。

それから劇団きつがわの皆さん、徳島出身の方がいるときき署名集めにも力を入れています。ガンバって下さい。大交流会でわざわざスタチを買って来て下さった京都労演の方



はじめ、スタチを買って下さった方、本当にありがとうございました。京都駅前でカラシメンタイを持っていた福岡生活舞台のお姉さん、阿波子スタチの隣でつき出しを売っていた展望の仲間たち、それからもう一つ四国から参加していたこじか座の皆さん、また逢う日までガンバリましょう。(誌代近日中に送ります。いつもおくれてすみません。)

(770) 徳島市南佐古八十五一六

県職住宅二四号 斉藤さとし

〇八六六一二五八四九五

### 世に下乃一産

合同ゼミでは事務局並びにスタッフ皆様方の多大な御協力をいただき無事終了することができました。心より御礼を申し上げます。

秋公演は第18回東動演に、創作「大平洋ペルトライン」(長距離トラック運転手の物語)岡安伸治作・演出。

11月20・21・22日未踏橋古場にて4ステージです。あいも変りませす他集団からのスタッフ、客演の応援によって支えられて目下、奮闘中です。(岡安伸治)

(176) 練馬区羽沢2-23第一美好荘15岡安方

〇四七四一三三十一〇四二里村

2人が参加、好評又好評。

・右寄りの風に負けず頑張らしましょう。

(120) 足立区東和五十二十七一〇三

石塚方

〇三二六二九一三二八六

### 演劇サークル「夏の会」

春の公演「9階の42号室」の好評に気を良くし、秋季公演は、水上勉作「飢餓海峡」にとりくんでいます。なかなかの大作を苦勞しています。とくに演出の吉岡が精古で倒れ、更にひきついた今富も倒れ入院というアクションでてんやわんやですが、26年の伝説を生かし、二人の指導を得たことを充分に活用し成功させることに全員頑張っています。この公演を成功させることで、また大きく飛躍を得ることと思いつつ。公演日は11月7・8日です。

(133) 江戸川区北小岩七三二一〇

吉岡利根雄方

〇三二六五九一八七〇四

### 人形劇団クララテ

拝啓、皆さまその後いかがお過ごしですか。「西リ演総会」と「東西ゼミ」を通して、多くの励ましを得ました。それはかなりの劇団に、職場からの首切り、不当なしめつけをう

### 演劇集団「和歌山」

合同ゼミに参加した。理論的に展望をもったとか、迷いがふつきれたとかいうことでは決してなかったけど、新劇というやっかいな芸術にかかわるハメになった不幸な人たちが全国にこんなにも(しかも若い人たちが)いたことを知ったのは、やはり一年間のエネルギーを補給するに十分なものがあつたと思います。

当劇団、西リ演では問題児で、連絡の不備など、ゼミや総会のたびに事務局劇団の方にご迷惑をかけてゴメンナサイ。

さて劇団では現在、11月12・13日の両日の森井淳作「峠を越えて」上演に向けて全力投球しています。この作品は和歌山の根菜一探を題材にしたもので、久々の創作劇です。西リ演のみなさん、和歌山は辺りな所ですが、一度くらいは観に来て下さい。(幸)

(640) 和歌山市和歌浦南一―一―四

〇七三二四一四四一四三三七

### 劇団同胞

拝啓、ナナカマドの実が赤く色づいていきます。十月十八日、保育問題全道大会に「結婚の申込」を公演します。

又、十一月五日第六回公演「霧の旗」(原

けている仲間の多かったこと、けれどもその中から問題点、矛盾点をひき出し、一つの上演のかたちまで持っていくとする劇団も、いくつかあつたことに力強さを感じました。

もう一つは竹内氏の講演です。「どもし症」の青年が、一つのアンサンブルの二員として舞台を創ることができたことの感動!

明日に向けて生きる仲間と集い合えたことに大きな喜びがありました。(西田)

年内の自主公演は次のとおりです。

人形劇「星の牧場」10月25日 6:30

10月26日 2002・30

オレンジルーム 前売1,500円

人形劇「山をふらせたいたらぼっち」

12月6日

12月7日

大阪郵便貯金ホール前売100円 当日1300円

(559) 大阪市住之江区南加賀屋町4-17-22

〇六一六八五五五六〇一〇二

### 劇団弘演

また気狂いの秋が来た。「弘演銀河鉄道」は目的地に向かって走り出した。乗りおくれた劇団員を途中駅でひろいながら、ゴトゴト走っている。列車の故障や車掌のミスで、モタモタしながら、それでも

作松本清張、脚本寺島アキ子)を旭川市公会堂で行います。清張の作品は、無宿人別帳「左の腕」について二度目。団員こそって寒さの中、とり組んでいます。

(071) 旭川市末広四桑八丁目高桑方

〇一六六一五七二三八三六

### 演劇サークル「土くれ」

秋公演が決まりました。

12月5日(金) 6:30 6日(土) 2:30

東京都勤労福祉会館

小寺隆昭・作 福田悦雄・演出

「かげの巻」

・青年劇場の温いご理解により上演許可がおりました。役者が足らなかつたりでスタートが遅れましたが、「石るつ」から城野、匹田両氏のご支援もあり、10月からいよいよ本格スタート(それまでエチュード中心)。大変な作品ですが奮闘しています。

・「かげの巻」の学習もかね、10月4日、横浜演劇鑑賞協会々長の宇都宮襄治氏の講演を行ないます。

・9月13・15日、山形銀座主で国公フェスティバルが開催されました。当日の文化交流会で東京国公の演劇サークル連絡会でも「カレーライス」は初恋の味」を上演、土くれからも

なんとか終着駅、11月11日弘前公演、14日八戸公演にたどりつこうと必死で頑張っています。

8月26日には弘大教授宮城一男先生をむかえ、「宮沢賢治学習会」を行いました。

8月30日には「銀河鉄道の恋人たち」のベースとなった「愛と死の記録」を上映。

9月24日には作者大橋喜一氏をむかえ、「80年代のリアリズム演劇をめぐって」をテーマに講演会を行い、支木、レオ、黒石劇研、弘前民主文学など50人を越す参加者で、もりあがりました。

さて、あとは巻をあげるばかり……?

「弘演銀河鉄道」はちやんと線路を走って終着駅にたどりつけるかしら……?

「黒沢参吉目伝」25部注文したいと思えます。 (東リ演係 味間忍)

(036) 弘前市品川町一アラル内

〇一七二一三五一四六七〇

### 劇団四日市

東西合同ゼミナールの参加者、十四名よりの感想文をまとめました。

分科会内容が一番、手土産があつたようです。分科会、これあるがため次回も出席したいという仲間もあり、特に若い仲間にとつて、

分科会は新鮮だった様子。しかし私の所属分科会は、各劇団の状況報告をして、専ら問題点も出て来て討議の深まりに期待をかけた。しかし、状況報告だけで時間切れとなり勿体ないと思いました。

この折に考えたことですが、年に一回位は東西リ演の舞台を、全劇団員が観劇し、そのあとすぐにその舞台について学習会を持ちたい。

劇団員の賛同を得て、第一回目は、名古屋演集、ふじたあさや作・演出の「ある夜間中学の記録」と決め、去る十月四日(土)に観劇しました。十一日(土)には演集の仲間を招き、学習会をします。演集が始めて、外部より演出を迎えたこと、その演出家が、演劇大学で馴染み深い、ふじたさんであること。予期以上にさまざまな教訓、勉強材料に満ちていました。

ケイコ場は十一月十五日(土)公演の「親と子の劇場」レパートリー、しかたしん作、まわれノまわせノピストン、クランクを林武男の初演出で苦闘しています。

演出を解放されて、二十周年記念公演「灯明台」執筆中の私は未だ一枚も書けず、ひたすら苦闘中です。黒さんの自伝、確実な所で

十二部予約します。(森賢郎)

(510 四日市市北浜町九一〇)

〇五九三二五二一四九二六)

### 名古屋演劇集団

◇秋の公演、ふじたあさや作・演出「ある夜間中学の記録」日本の教育1970(10月3・4日於中小企業センター)を成功のうちに打ち上げてホークと一息する間もなく、演集恒例の秋の学校公演ラッシュがはじまっています。

◇初めて専門家ふじたあさや氏をむかえてのことで、相当に緊張してかかったのですが、演出から見れば何ともはがゆいとおうか、心得ちがいと云おうか、アマずれと云おうか……それを懇切丁寧、しかもことわけてじゅんじゅんとヒューマンスタティックに、がんばり、ねばり、ひびるふじた氏の指導力、そして初めて出会った「夜間中学」へ通う人々の心からの声が、劇団ぐるみだけでなく、美術内山千吉、照明松本吉正、音楽戸島美喜夫の各氏、それから応援出演してくれた劇団名古屋の清水真也、劇団名芸の栗木英章、谷辺康浩氏をふくめて燃えに燃えた公演になりました。ともすればマンネリになりがちだった演集の歩みも、又一步前へ進むことができた。

そう云えるように次の仕事にとりくんで行くと思います。

来春三月には今年四月上演の「翼は心につけて」(岡根庄一原作、寺島アキ子脚本、若尾正也演出)の再演です。

(451 名古屋市西区区内通4-16-3)

〇五二一五二四一四九七五)

### だいこん座

総会、合同ゼミの実行委員会の方々本当にごくろうさまでした。劇団から四名が参加しましたが、それぞれ刺激されて、勉強になり新しい課題を背負って来ました。

。十月十七日(金)に中央公民館文化祭にて「最上川のはとり」(柏倉敏之・作)を上演します。

。十一月二十六日(水)鶴岡市文化会館にて「ムコとりとヨメとりがいつしよになれば」(二幕)高橋寛・作を上演します。劇団初の創作劇で稽古期間も約一ヶ月しかなく、余程がんばらなければと思っています。

(997 鶴岡市本町三十九一十一)

〇三三五二四一四一六八八)

### 劇団2月

『初の大人袋』劇団2月の近況―創立20周年をむかえた私達は、その記念公

演として、座付作家かたおかしろうの書きおろし「男どあほう大忠臣」―楠木正成伝―に43名の劇団員が総力を上げて取り組みました。

この公演は、四月に大阪府の助成金がカットされた「大阪新劇フェスティバル」公演の幕明けにあたることもあって、各方面から注目を集めていました。皇国史観のかがみとして教えこまれた正成像を、きなくさい良いのする今日、新しい観点から描き、せいっぱいの河内弁と観客席の熱い視線の中で、二時間の大作は、20周年以後の方向性をさし示しているようでした。創立以来、初の大人袋が制作部より出ました。

公演の翌日は、20周年記念企画のひとつとして、2月とかかわった作家諸氏(荒木、井上、多田、しかた、さねとう、かたおか他)による、「これからの劇団2月」という座談会を開きました。(永田記)

(546 大阪市東住吉区今川一丁目十番十二号)

〇六一七二四一四九五四五)

### 人形劇団京芸

東西リ演の中では数少ない人形劇団の一団体として、今度比較して10年ぶりに行なわれた東西合同ゼミの素晴らしい成果に接し、常日頃この東西リ演の活動に、劇団的に関心を高め

る様な働きかけをしていなかった事をくやんでいます。地元京都の劇団としてわずかに2名しか参加できなかったのですから―

今、とくに専門的人形劇団はその活動を主に児童演劇の中での人形劇を行なっているせいか、そちらの方への関心は高いのですが、元々、人形劇は大人からこども迄の幅広い観客層によって発展して来たものであり、その創造理念の根元は、東西リ演の主チームに通じていなければならぬものだと思っています。これからも紆余曲折するでしょうが、ねばり強くその普及につとめたいと思って居り今回のゼミの報告はくわしく印刷物にして劇団の中に伝えました。

決して主観的ではありませんが、小林さんの「フイレンツェ演劇祭」のプレヒト批判の衝撃的報告を聞いたり読んだりして、今日プレヒトを更に発展させた様な演劇様式がまだ生まれでもない様だし又確認もされていないのに、プレヒト批判だけがヨーロッパに拡がっているような印象をうけ、おどろきと危惧をいだきました。

すでに別便で各劇団にお伝えしたと思いますが、今回劇団の事務所を8月27日より、東山の大字字に見える八木尾記載の場所へに移

転して業務を行なっています。

今迄、劇団附属研究所の開設で、会場確保が中々出来なくて、その都度京都市内を点々として回りましたが、やっとそれも解消する事が出来るスペースです。

当分の活動スケジュールは4班体制で、劇場例会、学校、保育園等の巡回公演が下半期も続けられます。新しい作品として、来年度の正月公演に、寺村輝夫シリーズ第三弾、「あいうえおさま、かきくけこさん」を上演することが決定しています。(辰巳記)

(606 京都市左京区岡崎徳成町二四)

日の出ビル四F

〇七五二七五二一〇四五二)

### 士の会

総会・合同ゼミには4名参加。初めて参加した2人はそれぞれ「竹内さんの講演が大変印象的」「閉会総会で出席者全員に分科会報告をしたこと、満足満足」といっています。東西の合同ということ、メンバー数も多く集団数もまた多く、活気のあったゼミでした。東西の組織的統一が提起されましたが、支持と同時に、ゼミにはそれに見合った企画がたてられることをのぞみます。(事務局の方々には心から感謝します)。

土の会は「やどかり」「結婚披露宴」と精一杯の仕事にとりこんできましたが、ここで求められてきた内容と舞台上の成果、土の会の独自性をもう一步確かなものにするため、来春の矢野嵩創作劇、来秋のよしだはじめの創作劇の企画をたて、そこまでを25周年の活動として具体化したいと考えています。矢野の作品は、幕末の甲州騒動と現代の家庭とを交錯させて、「労働」の意味を問いかけるもの、よしだの場合は、教育活動に全精力をかけた教師グループの教育論上の価値を掘り下げる仕事と出されています。

現在は東京動くものの演劇祭に参加する「土の会第四回スケッチ劇場「八かたち」舞台」にとりこんでいます。11月30日(日)1時半・5時、池袋小劇場での上演です。一人一人の提出した素材を今度は一時間一時間の舞台に構成し、全員がその素材にどう反応することが出来るかを軸に、内容と表現の集団としての深め方に挑戦してみようとしています。今までの三回の経験をいかして、前進が課題。(黒さんの本、現在6部注文します)

(東り演係・佐藤正博)

(17)東京都練馬区大泉学園町四七四一八

〇三一九二四一六一〇七

**劇団名芸**

八月の全国セミは劇団から谷辺をはじめ教人事務局に加わり若手参加も含めて、色々な収穫と感動を得ることができました。

現在は十一月の定期公演と新樟古場建設の二本柱を軸に、活発に動いています。

◇第20回公演・シェイクスピア劇場 No.5

「真夏の夜の夢」合本栗木英章・演出祐植洋。

11月14 / 16 20 / 24 12ステージ

樟古場小劇場にて連続上演します。

◇新樟古場建設

約72坪、総工費一七五〇万で十二月にはほぼ完工予定。

来年からは南部の対象地域を一層拡大して活動していきます。

東り演のブロック活動は少しおくれましたが、10月11日ブロック会議を開催し、特色ある運動を展開していきたいと思ひます。

黒沢さんの自伝とりあえず17冊注文します。

(45)名古屋南区夕田町三の四〇

〇五二一八二二一三六九二

**劇団静芸**

◇全国セミナー、御苦労様でした。山静ブ

ロックの報告が総会議案の中でとりあげられ、苦悩に満ちた東り演の一つの典型として話し合われ、大いに考えさせられました。

◇静芸は、11月12日静岡市民文化会館において、安藤美紀夫原作、さねとうあきら脚色「ウメコがふたり」を山崎欣太演出で上演します。京都弁の学習や作品分析と確実な稽古とを懸命です。脚色者さねとうあきら氏が、上演日には来静して下さるとの事であり、更に翌日には来静して下さるとの事であり、更に翌日、観客の人達との話し合いも計画されています。

◇10月5日、山静ブロック会議が、草土宮劇団つくいで開かれました。年間計画として、

①観劇交流②ブロック・セミ③創造交流討議の柱をたて、11月23日、劇団つくいの「青春のカラージュ」(創作ミュージカル)を観劇交流と創造交流、討議に予定し泊して話し合う予定で計画を進めています。又3月末にブロック・セミを計画しています。(鎌田)

(42)静岡市昭府町二八九一

〇五四二一七二一〇六〇六

**劇団協同**

東西合同セミナー、残念なことに参加出来ませんでした。

久しぶりに公演をめざし頑張っています。昨年四月の「雪ん子ゆき」以来、停滞を続け

ていましたが、総会議案書、演劇会議45号の各論文、活動状況を読み、何よりも足を踏み出し、舞台をつくり観客とふれ合う中から、展望をみつけ出す努力をしなければと考えさせられました。

公演は、劇団協同第23回公演、石上慎・作車田悟演出「ある遅い出発」四景。十一月十二・二十三日、十二月六日の五ステージで会場は立川シアター2+1(60人規模)です。客演に小劇場「波」の高野氏と元劇団員二名が参加します。

(19)立川市曙町三十四八十七黒田方

〇四二五二一四一〇八八一

**青年劇場**

前略。現在、金大中氏が全斗煥政権から死刑判決を受け、今後の支援活動が緊迫している中で「クイズ婆さんの敵」の公演を取り組みました。公演班は各会場で署名とカンパの訴えを行ない、10月10日現在署名四七七名、カンパ五万三千二百円を集めました。10月12・13日、日本青年館ホールでの東京再公演でも訴え続ける予定です。

「かけの磐」は9月24日から、近畿・九州地方での学校、一般公演を行ない、11月29日帰京します。キャストもかなり変更して新・

田岡メンバーとも大いに張り切っています。12月22・23日にはABCホールにて東京再々演です。この間に「夜の笑い」の地方公演です。12月9・10日川崎市民劇場、12・13日松本市市民劇場、16 / 18日横浜演劇鑑賞会の例会です。

「ホヤ、わが心の朝」も10月20日から12月23日迄、学校公演です。関東(栃木・茨城・千葉・神奈川・埼玉・東京)東海(静岡・愛知・岐阜・三重)近畿(京都)で60ステージが現在予定されています。又来年2月13日から17日、都市センター、19日から20日、読売ホールにて、飯沢匠作・演出「欲望の座」の東京公演と、公演計画が絵になっていますが、全員張り切っております。(菊地弘二)

(15)東京都渋谷区千駄谷五十三三三六

〇三二三五二一六九九〇

**中野動演**

近況報告。当集団も小坂チユウを中心として集団員団結して、秋の公演に集中しています。少数ですがこれは社会の状況として仕方がないとしても、もう一頑張りができます。他集団の力つよい結集の中公演活動の大成功等の報せを聞くたびに心淋しくなります。

当集団は代表の小坂チユウの創作劇をパネ

にして活動の中心にしています。

秋の公演をお知らせします。

80年11月1(土)2(日)日

土曜日2時・6時半の2回

日曜日2時の1回

作・可能あらた 演出・小坂チユウ

「壊れかからた小さな人形の箱」

池袋・パモス青芝館

チケット前売二二〇〇円

(16)東京都新宿区北新宿4-33-9

新建ビルB1

〇三二三六三一〇六三三五

**劇団鼻吹**

いつもいつも本当に御苦労様です。比叡山には14名も参加(かつてなかったこと)です。交流会は大いに燃え、大ハッスル。翌日の分科会でも個々得るものが大いにあったようです。

劇団の若い人達(入団二・三ヶ月)を中心に「港で拾った花」(作・多賀為二・演出田中美)を仕込み中。

11月22日(土)5時半 東大阪文化会館

(東大阪ヤングフェスティバル参加)

11月29日(土) 八尾市民ホール(予定)

ケイコ場は連日笑い声や歌声(劇中歌四曲

あり)につつまれています。

尚栄春は「泰山木の木の下で」を木田昌秀演出で予定。

追記。黒沢自伝現在5部注文します。もう少しふやします。

(58) 八尾市堤町一四〇

〇七二九一三二一〇八八八

### 劇団新芸

「演劇会議」編集の皆様のお仕事、いつも感謝しています。弱小劇団新芸も頑張って、週2日の活動を続けています。来年2月8日小公演を行うべく稽古中です。

田中千禾夫作「花子」、かたおかしろう作「大阪鳥獣戯画第二話 狐」を鹿角優一の演出で上演の予定です。

9月27・28日北海道演劇集団後志ブロックで交流会とメイクのセミナーを持ちました。27日は「波」7名「うみねこ」4名「新芸」4名。28日は上記の他、高校生10名余の参加となりました。

交流会では、年々苦しくなっている活動の困難さに対し、どっこいねばりつよく続けんとする意気が感じられ、更に将来の合同公演についての話にもつながってゆきました。

翌日のメイク・ゼミは劇団さっぽろの令野

氏を講師にスポットを一台持ちこんで、メイクとあかりの基本(色)との関係について学習しました。さすが20年のキャリア、俳優令野氏のお話には参考になることがたくさんありました。当日参加した高校3校が、10日後に行われた高校演劇大会に代表校になるなどそれぞれ優秀な成果につながった(?)のもうれしいことでした。黒沢さんの自伝3冊おねがいします。

(04) 02小樽市銭函2丁目47-16

鹿角優一

〇一三三六二一三三五四

### 劇団未来

いつも御苦勞さんです。先日の東西ゼミ、遠方から御苦勞さんでした。参加者の口からは、参加出来なかった者がうらやむ話ばかりが出て来ます。参加出来なかったものまで次のゼミを心待ちにしています。そんな劇団が現在取り組んでいるのは第十九回公演「明日は今日よりも」(松下王国の神話より・労働旬報社刊)和田澄子・作、森本景文・演出。

この作品は、大阪において松下電工を相手に十年半の青春をかけた挑戦の結果、職場復帰を勝ち取られた橋本邦久さんをモデルに、座付作者和田澄子が三年ぶりに創作したもので

す。創作劇、原作及台本の上りの身近、と非常に短期間であると言ふ事で、劇団員は久々に燃えています。さらに、この取り組に、他専門劇団の研究所を卒業した女性が三名、劇団の教生(男一名、女六名)が参加しています。そんなケイコ場には若さがみちあふれる熱気で、ベテランも触発されている現状です。これから新たな「未来」の面も生み出されてくるのではないかと思います。よろしく。(小)

(56) 大阪市西区江之子島一七七一

新うつぼビル4F

〇六四四七一〇三〇一

### 劇団湖

冷夏も去り秋の気配が感じられる頃になりました。比叡山ゼミ特集をたのしみしております。

湖。では、11月2日 演劇教室。(地元や空知の演劇仲間と講師を招いての勉強会) モデル上演 湖 ある運い出発。三笠高校 青い馬。

◇11月9日 三笠演劇祭(作品2日に同じ)

◇11月10日 学校公演(地元中学校にて2ステージ上演。作品は同じ)

さし追ってこんなところですよ。今後のこと

は、この公演が終わってから話し合う予定です。

(068) 21三笠市幌内住吉町九 加藤方

### 劇団京芸

久しぶりの全国ゼミ、予想以上の仲間が集まって、地元劇団としては、喜ばしいかきりでした。特に野外の交流会は心配された雨が嘘のようにあがり、最高に盛り上がり、幸せでした。老居も話も好評のようですが、分科会に一工夫いりそうです。

◇「アンネの日記」の中高校巡演は二年目に入ります。

◇来年三月、文化芸術劇場は「西の国の人気者」(シグ作、小松徹演出)に決定しました。

(京都市伏見区納所北城堀 31-18

〇七五六一三二一一二六〇九

### 劇団東風(やませ)

今年の寒い夏で、東北の農村に冷害をもたらすものとして「やませ」という名は全国的に有名になったようです。

最近の活動は、7月13日子供劇場M2「はやてに走れあまんじゃく」を上演しました。昨年の「ゆきと鬼んべ」に続き2度目の子供劇場でしたが、観客の数も増し、照明、効果等のスタッフ面で、日頃の努力の成果がみら

れました。公演に引き続き「親子の陶芸教室」を企画しました。予想以上の反応に、劇団の観客づくりの活動の大切さを感じました。

さてこれからの予定ですが、12月10日、八戸市公会堂、劇団創立十周年記念、榎谷伸夫作・演出「裂けた地図」を上演します。最近頻発する家庭内暴力を素材に久しぶりの現代をテーマにした創作劇です。暴力を振るう息子を殺してしまう父親、そして自殺する母親、家出する娘と、暗い内容の芝居ですが、身のまわりに実際にあり得る事件だけにこれまでの公演と違った意味で意欲を燃やしています。

(03) 八戸市桜町無島町14 榎谷伸夫方

〇一七八一三三十一一九二三

### 劇団群馬中芸

夏の「東西リ演劇会・合同ゼミ」には出席できませんでしたこと、非常に残念です。丁度新しい小学校巡演作品「第16回こども劇場「法師とうめと、こさぶの船」製作の真只中で身動きがつかみませんでした。

「法師とうめと、こさぶの船」は、演出に現在全国各地で活躍しておられる、ふじたあさや氏を迎え、連日きびしい稽古が続けられました。指摘の一つ一つが私達の虚偽をはきとり、緊張関係を作り出しました。舞台成果

は好評で、群馬県内の学校公演が続いています。初演から一月半が過ぎて、どう、常に新しくあるか問われているように思います。中学・高校巡演、また今年第三回目的稽古場公演「センター小劇場M6「あかいゆうひにてらされて」(作・演出中村欽一)は12月22日、27日、81年1月4日、6日です。

黒沢自伝を40部注文します。

(37) 前橋市昭和町三丁目15

〇二七二一三二一〇五五〇

### 劇団四紀会

前略。10月18日(土)水上勲作、小松幹生脚色、岸本敏朗演出「アンナよ、木からおりて来い」の公演を一週間後に控えています。何をやるにもいい気候の秋ですが、私達はただケイコ場に集中しています。36個の色とりどりのダンボールとタインテーブルを使った舞台。かえる、もず、すすめ、ねずみ、へび、とんび、それぞれの衣装、生演奏のピアノ。お客様の反応が楽しみです。若手中心の実験劇場公演です。

◇81年1月17・18・25日 家族劇場公演

さねとうあきら原作・ふじたあさや脚本「ベツカンコおに」

◇81年5月5日 3ヶ所同時一斉公演

①荒木昭夫脚本「きしやのやえもん」(76年1月初演)②「ブナよ木からおりて来い」(80年10月初演)③「ベッカニコおに」の計3本上演予定。

58年人の劇団員全員フル回転でしか動かせないスケジュールです。81年9月、岩瀬成字原作、大橋喜一劇化「朝はだんだん見えてくる」。スケジュールを見ると、一年なんてあつという間に過ぎてしまうようで、こわいですね。私達の存在と意義を忘れないようにしなくてはなりません。

私自身の感想となるのですが、合同ゼミ・東り演の方と交流できたこと、竹内先生の講演を聞くことが出来たこと。私ら、がんばっていると思っただけ、まだまだ、がんばらなアカンわと思っただけ。(全体の中での劇団四代会、又劇団の中の私達、若者として)。次回も参加したいです。どうもありがとうございました。事務局のみなさん、本当にこころう様でした。

追伸。前号の「劇団名不明」は実は当劇団です。ごめいわくをおかけしました。

(650)神戸市生田区元町通二一

元町プラザビル六二二号

〇七八三九二二(四二二)

#### 劇団十年実

△合同ゼミ参加感想▽

80年に向けてのリアリズムの討論ができたことは大きな収穫です。同時に力強い連帯を得ました。

△近況報告▽

来春の「大阪春の演劇まつり」に向けて、取り組みの準備に入っています。

○「黒沢参吉自伝」2部申し込みます。

(547)大阪市平野区喜連東三六三二(101)

#### 黒石演劇研究会

総会、合同ゼミは弱小集団との違いがはっきりしました。劇研は集団を維持するために四苦八苦、大きい集団は創造理念での問題。でも、数人で頑張ってる集団もあり、しかも全国から四〇〇人も集まった、あの熱気に圧倒されそう。

十月に第一回劇研セミナーを開催、延十四人が参加し、初歩的な問題を討議、大いに交友を深め、次の仕事への団結を誓い合いました。秋の公演はなし。来春五月・六月の予定。これからクリスマス、春の脚本選定、新年宴会、総会と続きます。従って、この秋は鑑賞活動を強めることにします。

(036)黒石市之徳兵衛町五一

〇一七五二一(四〇九七)

#### 劇団上野市民劇場

比叡山での合同ゼミ大変御苦勞様でした。久しぶりの仲間の顔を見られただけでも、とても楽しかったです。夜の比叡山の「ナイト・ファイバー」。あのエネルギーが、地域で芝居を作っているのだなあと感じました。それと竹内氏の講演、大変感動しました。12月13・14日の「奇蹟の人」の上演に向けて自分達なりに考え、生かしてゆきたいと思っています。

◇移動公演

「吉四六さん」10・26日市内老人ホーム

11・2日 こもの町、11・5日松阪

11・22日 ききょうヶ丘

◇定期公演

「奇蹟の人」12月13・14日文化ホール

(518)上野市東丸ノ内共同ビル3F

〇五九五二(二二五二五二)

#### 劇団さつぽろ

前略。総会での小林事務局長の問題提起には色々考えさせられるものがありました。又合同ゼミの熱気も、土屋清さんの締めくくりには大へん感動しました。竹内敏晴さんの講演は、芝居と人間の根源的問題に触れられて

おり、聴衆を深部から揺り動かしていたようです。ショックでした。

私たちは現在、「その旗をまもれ隊」とあほう村の九助」班をもって元気に各地で公演しております。十二月には、定期公演「常紋トンネル」の道内巡演として留辺蘆町、北見市、深川市、旭川市、清水町、札幌市での再演が予定されており、各地の上演実行委も活発に動き出しています。二年ぶりの一般公演巡演で、是非成功させる決心です。

来年度は、大橋喜一作「今宵をショート・ドラマで」プロイスラ作「大どろぼうホッペンアロツ」矢作京介作「飛ぶか飛ばぬか乙型号機(仮題)」の三本を予定しております。それにつけても、人間が欲しい、役者がほしい。(N・H)

(063)札幌市西区手稲宮の沢四八五(四一)

〇一一六六三(二六二五九)

#### 劇団あまんじやく

芸術の秋を迎え、御多忙の毎日とお察しいたします。私どもの劇団員は全員がサラリーマン、仕事と家庭の間に、芝居に打ち込んでおります。今年は念願でありました年一回の定期公演を終え、ホッとした所ですが、未だ

十一月三日「仙台市民まつり」十二月六日宮城県芸術協会演劇部公演」が残っております。

去る九月十九日、矢野龍作「やどかり」の公演は好評のうちに終り、六年間の積み上げが見られたとの評価でしたが、内部では慣れがみられ、情性で動いている点が数多く有り今後の反省材料です。でも、やっとスタートラインにきたという実感です。これから明日に向けてスタートします。宜しく。

(082)仙台市遠見塚一三〇一〇(佐藤方)

#### 劇団やまなみ

◇雨の比叡山行きにもめげず、皆元気いっぱい帰って来ました。熱気溢れる合同ゼミと交流会、竹内敏晴さんの感銘深い話が、その内容としてあったからだと思います。

◇「奇蹟の人」前半の移動公演を終りました。一般公演六五〇、高校公演六〇〇、中学校公演六五〇。概して積極的な反応がかえってくる中で、一般の(親や若者)観客と高校・中学生、また小学生まで射程においてのレバの問題や、地域の劇団としての責任の在り方を突きつけられている現状です。

◇小谷の創作「人間のしるし(仮題)」が提出され、外部との討論や劇団での検討が始まりました。来年六月公演を自途に、作業が進

められます。河野の作品も、最後のところで苦しんでいます。年内脱稿の予定です。秋の公演は、甲府での「奇蹟の人」再演と移動公演です。

◇東り演担当の野川ヒロ子が結婚しました。舞台関係の仕事をしている吉成君という青年です。

(黒沢さんの自伝取敢ず25部注文します)

(400)甲府市青沼一八八(五梅津方)

〇五五二(三三三九九五五六)

#### 劇団月曜会

東西ゼミ、大変お世話になりました。

12月5・6日、広瀬常敏さんを演出に迎え、地元の音楽集団、広島オペラアンサンブル、ヴァリユー室内合奏団等の仲間の協力を得て、ブレヒト作「セチエアの善人」を上演することになりました。

初めて芝居をする人が大半という様古ですが、それが又楽しく、とてもおもしろいものになりそうです。

(733)広島市西区己斐上四二八六一(九)

〇八二二(七二一〇六〇三)

#### 京浜協同劇団

合同ゼミ、実行委員の皆様、ほんとうにこころうさまでした。ガサガサした場所と忙し

さから離れて参加した私たちにとって、あの吸いこまれそうな比叡山での二日間はまさに心が洗われる思いでした。久しぶりに会った西リ演の仲間たちの意気込みには圧倒されました。リアリズム演劇が今かかえている困難を、若者のシラケた部分に目を向けることで切り抜けようとするのか、それとも自らのフガイなさに目を向けなおすところから再出発するのか——それを考えさせられたゼミでした。参加した十四人、興奮しながら帰ってきました。

さて、私たちは、光州市民の蜂起、金大中氏死刑判決という状況の中で金芝河作の「金の秋から来春にかけて緊急上演することになりました。日韓問題に加えてポーランドで起こった事件は、民主主義と人権問題をあらためて考えなおす衝動をわれわれに与えました。四年前に初演、三年前に再演をやり、大きな反響をよんだ作品ですが、今日的視点で見直し、キャストも一部入れ替えての再々演となります。演出は小田健也氏、音楽は安達元彦氏。11月19(水) 20(木) 横浜市教育会館、12月5(金)、6(土) 川崎市立幸文化センター、来年2月7(土) 立川市教育会館。

開演毎夕6時半、12月6(土)はマチネ12時半もあり。観客数は、前回「母」(ブレヒト作)の二千四百人を上回る三千人突破を自覚します。全国の演劇仲間の皆さん、どうか観て下さい。

10月3日から一週間、地元川崎市で、市内の中・高校生、市民を対象に「舞台美術展」を開催、この数年間の上演作品の中から、装置、衣裳、小道具、舞台写真など約二百点を展示して好評を得ました。中・高校の演劇部が団体で観てくれたのは収穫でした。

劇団代表東沢参吉の自伝「わが演劇道」が皆様の動みのなかでいよいよ発刊されることになりました。私たちが皆さんの御支援に心えるべくがんばりますので、どうかよろしくお願いします。

(21)川崎市幸区古市場二一〇九

〇四一五一一一四九五

### 人間座

◇全国の仲間の皆さん今日は、秋のシーズンだけなわの折柄、活発に活動されていることと拝察します。私ども人間座は去る9月26、27日の両日、「京都府文化芸術劇場」としてイブセン作「小さいエヨルア」を上演。ひと息ついているところです。

名が含まれています。

「天使——」が十代・二十代中心の活動なのに対し、三十代以上が主力になって取り組むのが吉永仁郎作「蟬」です。朝比奈勝之演出で十一月から榑古に入り、来春三月公演の予定です。充実した舞台にしたいと思っています。

なお十一月・十二月には、川口市の文化祭、大宮市の学童保育の会の観劇会、榑古場の地元の染谷子ども会の催物などに「瓜子姫とあまんじやく」を公演していくことになっています。この中で榑古場公演というものを定着させる基礎づくりをしていきたいと思っています。

(大宮市染谷一七一一四

〇四八六十八四一三〇八四)

### 演劇集団おけら

こんにちは、

今までも、この欄に顔をのぞかせていましたが、今回より東リ演加盟集団として参加できることを喜びつつ、ペンを走らせます。

夏におこなわれた比叡山セミナー、9名中3名参加。それぞれが何かを得てきました。ひとりには眼を輝かせての感激であったり、ひとりには新たな意気(展望をもった上ですが……)

であったり。現在、参加したひとり、わが集団古参の男は「今までのようであつてはダメ」と眼を三角にしてムチをふるっています。

4月自主公演以後の反省課題「演劇的センスと創造」を中心に行なわれてきた榑古のある一時期の集計として計画された、2月7、8日のアトリエ公演の台本が決定しました。

4月の再演、マリオ・フラッティ作「金曜のベンチ」。少ない団員で、さんざん考えた挙句の決定です。時間的余裕はありませんが斬新しい台本にとりかかる姿勢で、東リ演加盟初めての芝居として飛躍ある舞台をつくりまします。(黒沢自伝は計5冊おねがいします)

(310)水戸市見和2-1-1512中嶋方

〇二九二一五三一一三九七

### 劇団展望

比叡山では、大変お世話になりました。とくに西リ演の方々というお話をできたことは、得がたいチャンスでした。集団員12名のうち8名が参加しましたが、みなさんに大変親切にいただきみな喜んでおります。

10月半ばには、大沢と小島が黒沢議長とごいっしょに、岩手のぼどう座、秋田での統一劇場公演を訪問しての帰途、仙台小劇場にお寄りしましたが、「フェードル」の公演まき

◇十一月には府下の三つの中学へ「朗読教室」——「カルメンになりたい」を巡回します。

◇次の活動のためのレパトリーを只今、鋭意検討中です。

(606)京都市左京区下鴨東高木町十一

〇七五七二一一四七六三

### 劇団埼玉

みなさん、こんにちは。

埼玉は今ささやかな旅公演を前にして大忙しです。それは十月十八日の東松山市中央公民館での公演です。「天使が二人天降る」(二幕)(作・G・ヴァイゼンホルン/訳・加藤衛/演出・川村武夫)。埼玉県との地元教育委員会の共催に依る「移動文化シアター」の中の演劇公演で、県がこの事業を始めて今年で九年目、埼玉が委嘱を受け公演したのが今度で七回目。普段生の芝居を見ることの少ない地域の人達、子ども達に私たちの舞台を観て貰うこの仕事を埼玉は大切にし、また新しい観客に接する機会として大変楽しみにしています。十七日に出発、吉見泊りで、十八日午後二時と六時半の二回公演です。

「天使——」は演出は別として出演者は二十九才から十九才という若い世代で固め、そのうちには今年入団した新人、男一名、女三

わにもかかわらず、ひとかたならぬお話をいただきありがとうございます。黒沢さんには道中、いろいろ親密にお話を伺わせていただき感謝しております。しょうちゅうも召しあがられるほどお元気で、私達の方がかえって励まされるありさまでした。

さて、秋の公演は、集団創作劇「ま昼のちようちん・其の四」で、東京勤くもの演劇祭参加、日程は次の通りです。11月15日、18日、22日、25日、6時30分から。(16日と23日は、マチネ11時30分から、も有ります。)入場料は十円、場所は展望阿佐ヶ谷小劇場です。(黒沢さんの自伝2部予定しています)

(小島政史)

(166)東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-1-32

〇三二二九三二二七三九

### 劇団ぶくしま

八月の比叡山での総会、合同ゼミに参加できる状況になかった事を残念に思っています。前号には、「秋の公演を必ず成功させる」と誓った筈であつたけれども、延期せざるを得ない表情です。わが劇団ぶくしまについて、総会議案書には、極めて他に誤解を与えない記述がありますけれども、必要な時期に、具体的な報告をしたいと思ひます。

今、福島県における非行の問題は、都市周辺にも広がっているんです。中学校でも、隠された事件がたくさんあります。

高校の教師や、中学校の教師、更には生徒たちとの交流をも考えながら、「ひしめき合う……」は必ず舞台上上げたいのです。そのための組織の中の広い運動を——と思っているんです。ちょうどわが劇団が「白衣の告発」を成功させたときのように。

また、ブレハブを(七間×三間)手に入れて、目下土壌さがしをしています。単なるサークル的演劇集団でない集団として、何とかして上演するつもりです。(嘉藤徳行)

(960) 福島市笹木野未梨下一四一三嘉藤方  
〇二四五一五七五〇四〇

#### 劇団・伊丹市民劇場・やき

比叡山での合同セミナー、わが劇団からは二名の参加でしたが、全国から集まった仲間たちの熱気で圧倒されっぱなしでした。その中でも、竹内敏晴氏の記念講演は印象的でした。

#### 〈公演日程〉

伊丹市制40周年記念公演

11月8日(土) 2時・6時開演

香村菊雄作 香村菊雄・村川直演出

#### 「荒木村重の叛乱」

(エピソードのある3幕13場)

伊丹市民会館大ホール

(黒沢孝吉自伝、一冊購入希望します)

(664) 伊丹市千博子館原20-19坂土方

〇七二七七八一六五五〇

#### 湘南アートシアター

秋冷の候、皆様におかれましては、ますます御活躍のことと存じます。私たちは、第21回公演として神奈川芸術祭演劇フェスティバル及び藤沢市文化祭に参加して、来る12月12・13日の両日、藤沢市民会館小ホールに於きまして、韓国の抵抗詩人金芝河作「銅の李舜臣」と浅原章江作「PIERO」を上演します。

「銅の李舜臣」は五年前に上演しておりますが、現在の韓国情勢の中で、今なお獄中につながれている金芝河の作品を一人でも多くの人達に伝え、全身焼くアソシエーション体制に抗議することは、十分に意義あると考え再演することにいたしました。

又、「PIERO」は、昨年度、県が募集した脚本コンクールに入賞した作品です。私たちは観客の皆様により、深い感動をお伝えできるよう全力をあげて稽古に励んでおります。

す。

今後の公演日程。

◇80年12月12日(630) 13日(230 630)

藤沢市民会館小ホール

第21回公演 金芝河作「銅の李舜臣」

浅原章江作「PIERO」

◇81年2月22日(300) 茅崎市文化会館小ホール

春休み親子劇場 木下順二作「彦市はなし」

斉藤隆介作「朗読」

◇81年3月29日(300) 伊勢原市民文化会館

春休み親子劇場 「彦市はなし」朗読

(25) 藤沢市大庭三九一〇 藤沢西部団地

二二一九一二九一一 貞包方

〇四六六一八七五九一四

#### 劇団からつかせ

合同セミナー、ごくろうさまでした。本場に事務局集団やモデル上演の世(下)乃一座は大変だったろうと思います。竹内氏は講演だけでなく実際に動いて教えていただいたらと思っています。

さて私達は稽古場の建設も一段落で(水道の許可はまだおりないので、水は出ませんが)、秋の公演として、市芸術祭(11月9日)県移動公演の細江町文化祭参加(11月2日)のために、「はやてに走れ、あまじやく」を最

上三平の演出で準備しております。

(435) 浜松市中田町五九五一一

〇五三四一六三二六〇一一

#### 劇団きつがわ

合同ゼミを支えて下さったスタッフの方々本当に御苦労様でした。終始大変な熱気で、劇団員一同、上気した顔で帰途につきました。いろいろなものを学びとってこれたようです。

現在は、来春4月公演予定のミュージカル「よみがえれ造船の灯よ」(仮題)の台本を詰めているところです。一方では、新人中心の林黒土作「瓊豊の少女」のけい古場公演に向けてとりくんでいます。力をつけながら劇団をどこまで大きくできるか課題がいっぱいあります。

(551) 大阪市大正区泉尾四一一一七

〇六二五五三二七九九一

#### 演劇集団あり

9月上旬、初めての児童劇をもって、稽古場を借りているキリスト教系幼稚園と児童施設の二ヶ所で公演し、当初子供たちを引きつけることができるかどうかと心配したものの、子供にも職員にも大変好評で、来年も是非続けて公演をその要望に、安心したり喜んでいたりしています。

続いて12月4日米子市公会堂での、第28回国鉄演劇祭の受け入れ準備と稽古に入っています。

国鉄サークルとしての一面をもつ「あり」は、かたおか・しろう作「大阪島歌劇」のうちの「連」を上演します。神戸サークルが創作民話劇「べっかんこ鬼」。岡山サークルが滝ノ内吉一作「ぎん」。松山サークルが同じく滝ノ内吉一作「赤字線」の上演予定です。本来国鉄演劇祭は創作劇を上演することにしてはいますが、今年は国鉄創作グループ所属の滝ノ内作品が二作のみとなりました。

尚、講師は昨年に引き続き、大瀧喜一氏を予定しています。

米子市唯一のホール米子市公会堂大改修については、市広域地域の文化団体が中心となり組織された、「市民参加で公会堂改修をすすめる会」に、「あり」も積極的に参加し、使用者側の要望を出し、市側の協力もあり一年間の工事を終えて、9月に完成しました。更に今後文化団体等の使用料減額や、備品についての話し合いを進めています。このような地域での活動で次第に市民の間にも、演劇集団「あり」も認められつつあります。

(683) 米子市昭和町23 倉宮方

〇八五九一三三一九三〇二

#### 劇団はぐるま

ひさしぶりの合同ゼミ、大成功だったと思います。場所、雰囲気、夜の大交流会の盛り上がりといふ最高でした。あれだけ多くの仲間が集ったことは、やはり庄巻でした。全国の仲間の演劇に寄せる熱い思いとエネルギーにふれ、感動し行ってよかったという若い劇団員の声が今度のゼミの何たるかを物語っています。劇団大阪はじめ、西り演のゼミ事務局の用意周到な準備のたまものです。皆さんの大奮闘に心から拍手とお疲れさんを。

私達は、10月19日(日)、「郡上の立百姓」の地元白鳥公演を終えたばかりで、その感動と疲れのなかにまどろんでいるといった所です。何せ大変な移動公演でした。おそらく劇団史上始めて以来の「ゲルマン民族の大移動(?)」に匹敵する細いものでした。会場は国際バレーボールの試合ができる、タッパ16m間口30m、奥行50mの大きな体育館で、舞台は申しわけ程度についているという容れ物です。それを上演可能な劇場に改変するという途方もない作業が必要でした。もちろん費用もばかになりません(幕やバトン吊り込みのため費用、そして作業するための人間の食

費、宿泊費など)。しかし、何としても郷土の祖先が血と汗で築きあげた歴史をとりあげた「郡上」を上演せんと燃えに燃えた白鳥町青年団、教育委員会、文化協会の人たちのエネルギーがそういつた困難を打開させる力になりました。費用はかかるだけ出します。宿泊もけっこう。幕も準備します。張り出し舞台もつくります。人間も出しますと。こうなれば劇団も受けて立たざるをえません。劇団は14日(火)より道具の大倉と照明の地元出身の三島清を中心に、総動員体制をとり、休みをとれる人間がかけつけ宿泊体制をとり、青年団の人々の力を借りながら、幕、バトン吊りなどの作業を展開して行きました。一口に16mといっても一度天井に登ると普通の人間なら恐怖感で縮み上げる高さです。その天井のしかも丸い鉄の梁に伝わって移動し、一本一本ロープを下し、バトンや幕をつついていたのです。吊ったバトンは10本を超え、その中に縦糸も含まれます。そして、使用したロープは3000mをはるかに超し、買い足したので。作業は想像以上に手間ヒマがかかりました。劇団員も朝早くから夜遅くまでがんばりましたが、休みをとってそれにつきあつて下さった青年団の人々も又それ以上に大変でし

た。その合間をぬって夜は夜でチケットの最後の追い込みで、各部落をまわるのですから頭が下がります。何か立百姓の霊がとりついたりみたいやと感じたものです。地元では今なお立百姓の歴史が生きています。あそこは立百姓の〇〇さんどこの子孫というように屋号として残っているのです。

そして立百姓の一覧表を持って、買ってもらえなったら寝百姓といってチケットを売りまくる青年団の人々に郡上の立百姓の生きた伝統を見ました。

公演当日は、雨でした。昼はそのせい超満員で2千名近くでした。(今年は冷夏のため、今が農繁期だそうです)夜は900名近く、ということ、恐らく、一様るとき除いて人口一万少しの町でこれだけ集ったことはないと思います。まさに画期的な歴史的出来事だったと言つて過言はないでしょう。

昼の公演は中学生が多かったため、会場がざわつき、落ちつきませんでした。やはりいつ拍手をしようともちかまえておられる観客を前に私達も燃えに燃えました。

終演後のあいさつで、こぼれも挨拶したように16年前劇団が生み出した「郡上」を地元でやつと上演出来、定次郎や四郎左五門の

幕に報告したことで大きな重荷が下りたような気がします。

あと「郡上」は12日6日(土)7日(日)の名古屋公演を残すのみです。

来年は、御浪町ホールにこもつて春に二本公演を予定しています。レバはこれから選考に入る所です。又5月には、御浪町ホール自主企画で、世に下の一歴の公演をとりあげるプランもあります。(山口和紀)

500岐阜市西野町一丁目

〇五八二一六二一六五〇

△編集部註・長文ですが特殊な報告と考え掲載しました。▽

劇団てまり座

この夏、けい古場は異常気象をはねのけるかのように燃えていた。劇団の創立以来の目標である、寺島アキ子作、加藤たける演出で「かあちゃんたちの明日」の上演にとりくみ去る十月十八・十九日、御浪市民会館小ホールで公演。大成功だった。観客動員は目標を下廻つたが、二ステージで五五〇人。上演後の反響も大きく、地元の演劇に新しい刺激をよびました。

結成三年目、十五名の劇団員で、出演者が三〇人近い大作でしたが、二年前より準備し

公演プランに賛同してくれた市民の参加を得て、五〇人近い公演団と大世界にふくれ上り、演技者の半分以上が新人。この新鮮なメンバーがいい舞台を生むエネルギーとなった。舞台美術装置は、札幌のステージ・アンサンブル(代表・高田久男氏)に依頼した。このセットは大好評でした。てまり座は市民権として演劇運動の輪を、もう一つ大きく広がるような展望をもちました。(黒沢氏自伝3冊注文します。)

(085 御浪市民会館一六一九加藤方  
〇一五四一四二一八〇〇九)

劇団大阪

東西リ演に結果された皆さんコンニチワ、とりわけ、夏の合同ゼミ参加の集団、仲間のみなさんゴクログさまでした。われわれ劇団大阪は、今回ゼミ、最高の24名の参加者をかちとり、また昨年の西リ演ゼミ同様、参加者全員事務局員体制で臨み、会場設営に、事務局仕事にとつくしましたが、ゼミが成功裡に幕を下ろし、とりわけ夜の大交流会が近來になく高揚したことを報告しておきます。

さて芸術の秋、劇団大阪は、9月、10月、11月にそれぞれ一本づつ稽古場を使つての連続上演という形で臨みます。

まず、9月20・21日に研究生公演として、井上満寿夫作「走れ、俺たちの明日へ」を高尾湖演出で上演しました。ほぼ一ヶ月間ほどの短期間で、おまけにけい古場を他の二班と競合使用しての悪条件の中でしたが、研究生たちの若い力は、公演当日、みごとに実を結び非常にさわやかな舞台になりました。

続いて、10月20日、26日。大阪新劇フェスティバル作品として、劇団のベテラン・中堅を中心に、アーノルド・ウェスカ作「大変入りのチキンストープ」を堀江ひろゆき演出で、また11月15日、23日には、劇団若手グループDoの会による、井上ひさし作「11びきのネコ」を福井晴成演出で、それぞれ上演します。

双方、まれにみる困難の中で、良い形での古手、若手の競い合いが生まれ、来年度の劇団10周年を支える新たなエネルギーとなることを期して全力を傾けています。

(542 大阪市南区谷町七二二一  
新谷町第二ビル一〇三  
〇六一七六八一九九五七)

神戸職演連

先の全国ゼミには、私達は西リ演未加盟ですが、二名参加させてもらいました。二名の参加者は、二日間の素晴らしい集いに、こ

み上げる感動を伝えることが出来なかった、忘れぬ歴史の一ページとなったと、11月公演に向けて燃えています。

若い人たちの加入が続き、2回目のフレッシュマン・ステージをやります。

◇フレッシュマン・ステージ No.2

11月12・13日 県民小劇場

「ベックンコおに」

作・ふじたあさや、演出・菊地照一

◇国鉄演劇祭 米子公会堂

12月4・5日 「ベックンコおに」

◇第27回公演 81年5月13・14日 未定

(神戸市真谷区御幸通八一―一六

国際会館4 神戸労演(気付)







大岡 欽 治

大阪地方のプロレタリア演劇  
日本プロレタリア演劇同盟  
(プロット)大阪支部の活動

一九三三(昭和七年) (二)

東京から帰って

IATB国際演劇オリンピックに日本代表を派遣するために、東京に行つて送別公演に参加したが、それは充分な成果をあげるまでにはいたらなかった。それは

1. オリンピアード派遣が政府によって妨害されて不可能になったこと
  2. 上演予定脚本の久板栄二郎作『北樺太田』の上演禁止になったこと
- つまり残念ながら、この行動の目的を達成することが不可能にされたからである。しかし一方、とにかく全国的組織であった

プロットが、全国大会や中央委員会など規約によって招集される会合を除いて、演劇創造のためにプロットのほぼ全国の劇団が東京に参集して公演を持った意義は大きい。勿論、その創造過程については多くの問題があつたにしても、それが国際的行事への参加ということが、一九三三年という時点において行われたことに、現在の演劇人も演劇研究者も、もつと深い関心を持たなければならないと思う。若しこれが完全に実現したならば、想像することは、今でも心躍るものがあるのだが、そうした感慨は、当時の感覚としては深く考えることは出来なかつたが、全国各地から参加したプロットの同志たちは、非常な誇りを持って、それぞれ帰郷したと思う。だが、各地に帰ってからの活動は、いよいよ困難な状況に追いこまれていった。これはこの年の社会的、文化的の全般的状況を調べ

てみるとよく判るのだが、あとで触れよう。大阪に帰つたあと、大阪では相当の活動を展開していった。だが、私の資料を今調べてみると、二つのことが重なりあつていて、記憶の点でも判らないことが起つていた。

プロレタリア演劇研究会の開催

その一つとして、プロット大阪支部のプロレタリア演劇研究会についてである。資料として、一枚のガリ版プリントが手もとにある。

『プロレタリア演劇研究会開催に際して

	敬す
プロット大阪支部	教育部
大阪	戦旗座
大阪	構成劇場

大阪 メガホン隊

プロレタリア演劇の優位性についてすでに議論の余地はない。

ただ残る問題はその実証である。吾々はいまその実証に身を以てあたらねばならぬ。吾々に課せられた階級的全任務の遂行は、吾々がまづ優秀なるプロレタリア芸術家になること、吾々の劇団をして優秀なる劇団にすること以外の方法は断じてない。

これに対しては議論の余地はない。

優秀なる芸術家になる道は、いかなる修業クレンを要するが、これは吾々の問題である。

プロレタリア芸術の方法論は、唯物弁証法的創造方法である。

プロレタリア芸術は全芸術史の成果の合理的な部分発展的継承である。

それらの具体的把握には、吾々の多くの苦闘を必要とするであろう。

とまれ、以上の見地から次への闘争の出発として、一ヶ月の活動の自己批判として、プロレタリア演劇研究会を開催することにした。諸君の充分なる成果を闘いとられんことを希望する。

尚、研究会は限られた時間と限られた範囲に制限されている。これを中心に諸君の嵐の如き自己教育の奮起を敬するものである。科目並に時間割は左の如し

支部教育部主催 演技講習会  
十二月一日—十二月十日

期日	題 目	講師	時間	実習
一日	文化運動について	米沢	二	時約一
二日	日本プロレタリア演劇史	大岡	二	〃
三日	プロレタリア演劇理論	大岡	二	〃
四日	世界プロレタリア演劇史	大岡	二	〃
五日	近代劇について	未定	二	〃
六日	演出論及舞台設備論	渡辺	二	〃
七日	演技論	多田	二	〃
八日	実習			〃
九日	実習			〃
十日	実習			〃

- 備考 1. 各講習課目の費金はプリントとして配布する。  
2. 各劇団員及個人プロット員全員参加

3. 開始時間 毎夕七時
4. 課外講演予定  
舞台美術について  
舞台照明及効果について  
発声法について  
以上時間の都合により他講習に含める事あり。

このプランをみると、九月、東京での演劇オリンピックを機として、新しいプロットの活動を強化するための必要な講座を行うことになつたと思う。ここで注意して頂きたいことは、演劇研究会の行われる日取である。十二月一日から十日間となつてはいるが、十二月四日に、思わぬ突発的な事件が起つているからである。

解放運動犠牲者追悼文化デー  
これも先づ最初に三つの資料を提示しておこう。

『十二月四日 午後一時より  
同志岩田義道君の  
労働葬に参加せよ！



第三章 中国侵略戦争の開始から日本帝國主義の敗北まで (五九頁)

暴圧下の侵略と専制に反対する斗争 (七五頁)

(前略)

こうして、「三二年テーゼ」を指針として、侵略戦争と警察的天皇制に反対する活動を強化しつつあった日本共産党を破壊するために、

天皇制政府は、文字どおり手段をえらばない凶暴かつ卑劣な攻撃に訴えてきた。

党は、テーゼにもとづく活動を遂行する全国的な態勢をととのえるため、三二年十月、熱海に全国代表者会議を招集したが、かねてから全国的な弾圧を計画していた天皇制政府は、この機会をとらえて、全国いっせいの検挙をおこない、党指導部をはじめ約一千五百名の党員、共産青年同盟員、全協の活動家などを逮捕した。つづいて翌三二年二月には、大阪地方を中心にあまたの一千五百余名が逮捕され、さらに全協の中央委員会が検挙された。検挙された党員や党支持者にたいする

拷問は、残酷きわまるもので、中世の宗教裁判にもおとらない暴虐が日常のこととしておこなわれてきたが、その凶暴さはいよいよひどくなり、かれらの手で多くの党員が殺された。すでに一九三二年四月、スパイの手引きで逮捕された党中央委員上田茂樹は、やみかたにやみへとはうむりさらされた。また党中央委員岩田義道(三二年十月逮捕、十一月死亡)や革命的作家小林多喜二(三二年二月逮捕、死亡)も、天皇制警察の拷問によって虐殺された。

(下略)

もう一つ『赤旗』(一九八〇年十月四日号)の特集記事『証言 特高警察』④に、解放運動旧友会世話人として阿部淑子さんの思い出が載せてある。一九三二年十月三〇日、特高によってとらわれた。当時日本共産党中央委員岩田義道氏の夫人であった阿部さんが当時のことを物語っていることも参考になるだろう。

〔註〕なおこの赤旗連載の『証言 特高警察』には、私、松本克平、河野さくら、中本たか子などコップ関係者の証言も載せられている。

これらを総合してみると、岩田義道は、非法下での日本共産党中央委員として逮捕、拷問、死去という経過をたどったのに対して、労働葬が計画され、大阪では、その表面的主催者として、コップ大阪地方協議会の名によって、大塚にアジ、プロしたのであろう。

私達コップ各団体関係者は全員、鳴野の弁天クラブに参集した。一般の参加者共に、五十・六十名はいただろうか。ただ文化行事を行うということは知っていたが、何を、誰がやるかは知らなかった。

恐らく、最初からこれが合法的に開催されると思ってもいなかった。たゞ会場に集まり、解散させられてデモという事になるだろうと思っていた。そして小さなクラブ(たしか豊敷の小集合所)に入ったのだが、開会時間の直前に、会場は特高のスパイと制服捜査に包囲され、全員(五・六十名位だっただろうか)近くの鳴野警察署に連行され、道場にとじこめられた。

これだけの人数だから留置場は一杯になってしまつて寝る処もなかったが、女性は一晩男性は一週間の検束となつてボックスに入ることになった。

この記録は、『大阪地方労働運動史年表』

(大阪地方労働運動史年表編纂会の昭和三十一年刊)に次の如く記載されている。

『大阪地方労働運動史年表』

昭和七(一九三二)年

〔文化・科学運動〕

演劇・その他文化運動や低下

12・4 コップ大阪地方協議会主催で、鳴野弁天クラブに解放運動キセイ追悼文化デーをひらかんとし、開催直前中止解散を命ぜられ、全員総検束

(一八一―頁)

しかし、このような複雑な状況になったのは、三二年の社会的動向から見れば、政治的には特高のスパイ政策による弾圧によって緊迫した情勢の中における政治・社会・文化の關係の異状さを考慮する必要があると思ふ。

政治と文化・藝術の関連、位置についての問題は、戦前のこの現実的情况の中から出てくることを、現在の文化関係者は研究しなければ決して正當に理解することは出来ないであらう。そして、それはまだ充分になされて

いない。

特に戦後における新劇・演劇における、この時代の状況は、ほとんど調査、研究がなされておらず、永久に消えてしまうことにもなりかねない昨今になってきている。これは本當に不幸なことだと思ふ。

ここで注目しておきたいことは、この翌年の一九三三(昭和八)年一月号のコップ機関誌『プロレタリア文化』に、野沢徹の論文『政治と芸術・政治の優位性の問題』①が発表された根拠があるのだった。(野沢徹とは宮本治のペンネームであった。)

そこで、それを理解する一つの方法として一九三三年の社会状況を簡単に年表にしてみよう。

- 1月 上海事変起る
- 2月 井上準之助殺される  
総選挙行われ、政友会大勝、社民三  
労六一
- 3月 満州国成立  
団家勝殺される
- 4月 『赤旗』復刊第一号出版
- 5月 上海停戦協定成立  
五・一五事件起る 犬養首相殺される

- コミンテルン三二年テーゼ発表
- 6月 『日本資本主義発達史講座』刊行開始
- 7月 警視庁各府県に特高課設置  
ナチス第一党となる  
国民精神文化研究所開設  
社会大衆党結成
- 8月 市川正一『日本共産党斗争小史』刊行
- 9月 国際反戦会議 アムステルダムで開催  
満州国承認  
日滿議定書調印
- 10月 大森川崎第百銀行キヤング事件発生  
熱海事件 大検挙行わる
- 11月 日本共産党中央委員岩田義道検束殺  
される
- 12月 岩田義道労働葬行わる(東京・大阪)

(詳細の説明をつける余裕がないが残念だが、切迫した状況はわかって頂けると思ふ。)

歳末演劇大会の挙行

プロット大阪支部としては、この労働葬に参加して、参加者全員は、男性は一週間の留置の被害を受けはしたが、ほとんど重大な障害はうけなかった。プロット全国大会や国際演劇オリンピックの活動は東京で行われ、

直接大阪の地で行われないので、特高はほとんど知らない態度をとっていた。

だが、彼等は決して、我々への弾圧を加減しようとはしなかった。

この切迫した状況のうちに、プロット大阪支部は、年末斗争として、年末演芸大会の開催と、日本の新劇運動の先駆者小山内薫の五周年を迎えての記念行事を、プロットのイニシアティブで遂行することを企画した。

歳末演芸大会の最初のプランでは、先づ大会を有料でやり、この二つの仕事の費用をカバーするような案がたてられた。だが、開催の直前になって、大阪府警察部保安課から、有料興行は不許可と決定してきた。

そこで、無料公演として超くまで公演を決定することとして、別に「特別賛助券」というものを発行「演劇新聞引換券」として、カンパによって賄うことにして、早急に対策をたてた。

十二月二十四日 於大江ビル・ホール

〔註〕 大江ビルは、大阪御堂筋、大江橋にある堂島ビルに大阪市最初のビルとして現存しているが、この堂ビルの東北奥口にある小ビルが大江ビル、その一階が小ホール

を持っており、約百五十名収容出来る広さがあり、大阪の文化関係では大正・昭和初期に使用出来た唯一の施設であった。現在でもビルはあるが、ホールは廃止されている。

芝居、音楽、映画を上演することにして、芝居を主体にして、これはプロット大阪支部所属の戦旗座、構成劇場、メガホン隊の三劇団によって、小型演劇を上演。映画はプロキノ大阪支部提供のプロキノ映画、音楽はプロレタリア音楽同盟(P.M)大阪支部員のコーラスという編成であった。

当日、上演された芝居は、私の記録として残されているものによってみると

出演は、前記の三劇団、脚本は小型演劇として移動用に使われている作品で、検閲済みのものを扱った。

小野宮吉作 『仁吉と退』

久保 栄作 『フアクション人形』

アジプロ劇 『プロ吉道具屋』

小型演劇 『故郷』

演出として名をつらねているのは、多田俊平(構成劇場) 古河和夫、大岡欽治(メガホン隊) 小寺健(戦旗座)の四人で分担、出演者は、戦旗、構成、メガホンの三劇団の演技

部からだった。

私の持っている資料は

ビラ一枚 引換券一枚 と二種類である。共にガリ版印刷のものである。

(歳末演芸大会の項 おわり  
以下次号へつづく )

資料 (一)

**歳末演芸大会**

12月24日 午後6時半  
芝居・音楽・映画

主催 戦旗座 構成劇場  
後援 メガホン隊 プロキノ・PM

会場 無  
入場料

会場地図

於 大江ビル

資料 (二)

特別賛助員 引換券

**歳末演芸大会**

日時 1932. 12. 24 6. 30 PM  
場所 大江ビル

主催 戦旗座 構成劇場 メガホン隊  
後援 プロキノ大阪支部・PM大阪支部

## 芳地さんの提案に賛成

— 読者からの提言 —

前略。

「演劇会議」45号の、芳地隆介さんの諸君からの提言、を読んで、大変うれしく思いました。

わたしは、演劇とは下手の横好きというほどにも言えぬ関わりでしか関わっていないのですが、お送り載く雑誌の、萩坂さんの劇評を毎号楽しく読んでおりました（芳地さんの「舞台にかかわるエッセイ」は実にピッタリです）、実はいちど、知り合いの出版社に、ひそかに本にならないものかと打診したこともありました。わたし自身の、演劇や萩坂さんの仕事への共感の迫力不足から、その話はどうやむやのままだに到りました。それが、芳地さんの提言に接して、わが意を得たりの感、早速お便りする次第です。

多分、わたしだけが特別に恵まれてそうして載っているのではないと思いますが、萩坂さんは、わたし個人の下手くそな小説やエッセイにも、同人誌の仲間達の作品にも、実に丹念な批評や感想を送って下さっています。

同人誌の合評会では毎号そのお便りを読み合って、ほめられた者もほめられなかった者も、大いに感謝しております。わたし自身は、それをみなファイルして保存して、時おり読み返してはそこからいろいろなことを教えられています。

演劇関係の方には、多分もっとも多勢の、そうした授業料不払いの生徒がいらっしやるだろうと想像するのは、わたしの思いすぎでしょうか。手紙どころか、なにげない会話や、ちょっとしたスピーチさえも、テープにでもしておきたいと思わせるのは、萩坂さんの人柄の豊かさに他ならぬと思いますが、是非とも、その豊かさの一端なりともを、形あるものにしてほしいと願わずにいられません。

もしも実現するようでしたら、雑役の一端なりとも協力いたします。

一九八〇年八月二十日

小関智弘

「演劇会議」編集委員会殿

## 「わかりやすい安保のはなし」

渡辺洋三 著

（東大教授）

六月十四日、新劇人会議の学習会で講義されたもののプリントです。「安保」による日・米の相互協力的なるものの実態が、歴史的にも、大へんわかりやすく説明されています。

われわれの生活の隅々にまではりめぐらされている、目に見えぬ網の目が、何をくろみ、そして、それがどのような効力を見せつつあるか。これはわたしたち演劇人にとって看過できることではありません。

とくに創作を志すひとにとって、現実をどう見るか、事象の適確な把握のために有効な手がかりになると思います。

是非、みなさんの一読をおすすめします。

価額 二〇〇円

問合せは

151 東京都渋谷区千駄谷五十二三三六  
青年劇場 内

新劇人会議

電話〇三（三五四）八七八九

## 劇評 □

### 「城」（劇団潮流）のとり組みについて

大 鋸 時 生

新劇の公演のとき、ぼくが一番、気にかかっているのはその劇団の経済状態だ。ということは、そのため舞台造成に客席にこびる面が、ふえはしないかということなのだ。この面倒な社会に生活する立場を思うと、それを營めるのに気がくれてしまい、情けなくなることもある。そうした感情のふくらまない劇団の公演の方が、舞台処理に、ひっかかって楽しめる時が多い。こんなことを言い出すと、あいつ、なんにも知りおらんのかと軽蔑されることだろうが、ぼくが腕運者や人気俳優の多い東京の新劇団よりも、関西側の好意が持てるのも、そのためなのである。こんな小さい劇場で公演しては、経済面では苦しくろうな—と思ながらも、懸命な演劇ぶりに引きつけられるのが、本当に楽しいからなのだ。その楽しさは格別だ。

そんな立場から、その公演に楽しみがわき

その日を待ちわびる劇団のひとつが「潮流」だ。独特な公演姿勢を崩さぬドラマを選んで取り組む気遣いが全く快い。最近、一番ひきつけられたのは、昨秋の54年度大阪新劇フェスティバルや大阪文化祭に参加したときの「冬の樞」（水上勉）だった。

鉄骨の箱を組立て、それを自在に動かしたドラマを進行させる舞台づくり（飯矢真紀）や、演歌、ヴィオリン、琴まで生演技する努力ゆえ主人公古河力作の生涯—それも幸徳秋水らの赤旗事件に参加した死刑囚12名のひとりとして死刑台に登って行くまでを心をたかぶらせながら見入った夜が忘れられない。その古河力作を演じた真鍋一はじめ藤本栄治、浮田孝明ら劇団全員のドラマへの取組み方に感動した。そうした演出の大岡欽治の名を大きく書きたい—と劇評したものである。大岡欽治と言えば、

大岡演劇研究会から潮流を構成したところから沢山の演出を見てきているが、いつも客席をバツと驚かせる構成こそないが、その演出によってそのドラマに引きこまれる率は高い。これこそ、演出の本筋方向よといつも舞台を見ながら思われるのだ。だからこそ「潮流創立20周年記念」公演を大岡欽治演出で、水上勉の「城」を上演と知ったとき楽しみが、大きくふくらんだことだった。

日本海に面する若狭の小浜城を中心とするドラマだが、京極高次からその子の忠高やがては酒井忠勝と領主は代って行くけれど、奇麗な貞相は同じこと。それに対する農民たちの嘆き、怒り—でも封建時代の世の中では、どうにもならぬ現実を瀬川藤兵衛後に出家する裕念を中心に進行させて行く。それを演じる小林池三も中々の好演だった。そうした空気が南部光男（高次）浮田孝明（忠高と忠勝）ら支配者側と、堂崎茂男、村上晴夫ら屋敷や百姓たちの多勢の出演により充分に伝わったし、その間に立つ郡代奉行として百姓たちを弾圧しつつはしたものの、いつしか大衆の恨みをゆるけてやれぬ苦しさを悟り出家する役の藤本栄治も、大詰の鼻を意欲深くおろさせていた。

でも、残念ながらその「城」は、そうした演者たちの努力にもかかわらず、いつもほど燃え立たなかった。何故かしら—と、ぼくは「城」の脚本をとりあげた。

「ここで一言申しておくが、ぼくは、観劇後に、その脚本を読むこととしている。先きに読んで行くと、ぼくは理解度が、演出方向の正当さを見失う不安があるからだ。演出者の意図、その本音を、ぼくは理解から検討してはならない。その舞台から全てを無心で理解して行きたいというのが、ぼくの方針だ。」

さて脚本を読んで第一に引っかけたことは、今回の舞台構成の問題が—ということだった。「冬の檻」の舞台づくりの成功から、その線にそって処理したのであろうし、経済面からも大助かりだったろうが

幕外・小高い丘・谷のはとり(夕(夜))

・処刑の原・車を引く百姓群・城の石畳が少しでかかっている・城の居室

夜明け前の嘉左右五門の家・夜の神社境内・奉行所・闇の夜の家老・城門士輩下・奉行所・庄右衛門宅・僧形の郡代奉行の歩み(終幕)

という各場ドラマの進行に必要な雰囲気

「向に出てこぬために客席の理解反響が弱かっただよように思えてならなかった。「冬の檻」のような現代劇ならとも角、こうした時代劇では舞台づくり(何も、その時代を再現させるように—と言うのではないが)を、もつと真剣に考えねばならぬのではあるまいか。

そう言えは、こうした空気をとり入れたらしい前進座の「怒る富士」劇団2月「男どあほう大忠臣」でも、その舞台構成のため、その場の狙いが呑みこめぬのに苦勞させられている。「男どあほう—」など楠正成の立場を呑みこむのに本当に苦勞をさせられた。

今回の「城」では舞台を、大きき連う四つの高台を動かすだけでドラマを運んだのだが、それも百姓たちにやらせているので、序幕開幕前から大勢の百姓がうごめくのは、何を狙っているのかとドラマの内容知らぬだけに余計に引っかけたことだった。もちろん、これが黒子たちなら、日本人には無形として受けとめられようが—であるが。

多分、公演経費にかかわるということがポイントなのかも知れない。とすると反対は、しにくくなるが、それなら、もつと工夫をこらしてはしかなかった。「冬の檻」と違って時代

劇の「城」ゆえに、観衆をその場に簡単に引きこめぬことを考えて下さいと言っているのである。贅沢な写実的舞臺で演じなさいと言っているのは勿論ない。でも、見物座を、どう素直にドラマに引き込むか(理解させるか)のためにはその場の空気を舞臺装置で教える必要があるのではないかしら。是非、この点を考慮のうえ「城」を再演して欲しいものである。

というのは「城」を見つげながら、劇団「潮流」の人たちの取り組み(そつだ脚本の選択も)に好感がわき続けたからだ。大岡欽治、藤本栄治君らを中心とする舞台ぶりは全く引きつけられるからだ。どうか、ぼくの指摘を、好意をもつてあげてくれている—と理解していただき次の公演に取りくんていただきたい。

劇団結成20周年をお祝いするために、ちょっとと言わせていただいたのである。

最後に「城」上演のプロでぼくがあげた「潮流」公演のベストを再録させていたどうか。こうしたドラマと潮流の演出・演技が好きならば、発言—し知っていただきたいから(上演順に)うばすて翼間(高松昌治) つづみの女(田中澄江) 遺書配達人(有馬頼義) 萩原検校(井上ひさし) 冬の檻(水上勉)

## 劇評 □

### 多数の観客をあつめてダイナミックに—

劇団2月創立20周年記念公演

『男どあほう大忠臣』

(作・かたおかしろう 演出・深海ひろみ)

井上 満寿夫

それはひとつの「事件」であった。

九月二十八日、大阪河内のだ真ん中柏原市民会館で幕を開け、続いて九月三十日、十月一日、大阪四天王寺・郵便貯金ホールで上演された。劇団2月公演、かたおかしろう作、深海ひろみ演出「男どあほう大忠臣」は、一七〇〇名という画期的な多くの観客を集めて満席の劇場は、充実感にあふれていた。いわゆる新劇の場合にはあまりみることのない中間休憩の幕切れに起った拍手が、観客の満足感を表わしていた。これらの現象を招いたその魅力とはなんであったのか—。そのいくつかについて私見をのべるとともに、一方わたしがもつたある「感慨」を記して本文の責を果たしたいと思う。

戦前・戦中の皇国史観のもと、忠君愛国の鑑であり大英雄であった楠木正成は、どあほうな反民衆のピエロであった、と捉えたところにかたおかしろうの面目があった。「大阪城の虎」以来、いや、すでに「牛鬼退治」から「こじんじょ山の鬼の村」「大枝の鬼」に至る系譜の中で、常に民衆への「裏切り」ときびしい緊張関係をもつてきたかたおかにとつて、河内赤坂の散所の生まれではなかったか、と推測される正成が、時の権力(後醍醐帝)と結託して南北朝の政争の中で敢えなく死んでいくプロセスは、創造意欲をそそるものであった。そしてそれは、みごとにかたおか戯曲として新しい峰をつくりあげること

成功し、深海演出を加えて劇団2月の舞台に華ひらいたのであった。

人類の歴史上、**「裏切り」**は常のことであったとはいえ、それは**「裏切られる劇」**に激しい**「歯噛み」**を強いる。戦後史もまた多くの**「裏切り」**をともなった不幸な時代であった。かたおかも**「歯噛み」**を強いられてきた一人として、前記の作品群を生み出してきた。その変遷を辿るとき、「大枝の鬼」までのそれは、切なさや苦渋とストレートな怒りに満ちていたが、今度の『男どあほう大忠臣』に到つて、題名が象徴することく、かなりの距離感と一種の哀れさをもって、その墮落の経緯をみすえている。その擲論が笑いをよび、機軸が悲劇性を高める。**「大楠公正成」**を**「男どあほう」**と履し、笑いと哀切感をロック調の主題歌(作曲・歌唱：大上留利子)によって高めて描いたところにひとつ、多くの観客の共感を得た要因があったことは事実であろう。それをもし大衆性とよぶとしたら、そのある側面にわたしはひとつの**「感慨」**をもつたのだが、それはもうしばらく保留して、さらにその魅力についてのべていかなければならない。

今回の公演の初日を、河内平野のだ真ん中、

柏原市民会館で飾ったことは冒頭に記したが、正成の出身地でその幕を開けるというのは、心憎い発想であるとはいえず、それは大胆な試みであった。大阪府下南東部に位置して郡心部から遠く離れ、大和川が茫洋と流れて葡萄畑が連なるところ。柏原。公演常識からみて条件はよくない。というより危険であった。にもかかわらず敢えてそれを実行して、予想を超える成功をおさめたところに、作者をはじめ劇団のそれに賭けた並々ならぬ意欲とひとつの立場をみるのである。

△楠公さん△とある種の見しきりをもつてよばれていた側面をもちつつ、正成は△歴史△の中の象徴的存在であったし、昨今、右翼的潮流の抬頭が著しいとき、いつまたその△勇姿△が表舞台におどり出てくるかも知れない。その過去と未来の追問。虚飾をはきとって、忠臣・英雄の台座から引摺り降りし、馬借集団の頭目として、身近なる人間の顔をもち、土着の河内弁を駆使する人物像に形象して、現代の河内平野から大阪の舞台へ登場させたことは、地域に根ざすということのひとつの実践であった、と思う。

繰りかえずことになるが、英雄の仮面をはきとって、大楠公も河内弁を喋る只の人。だ

が罵倒するのではない。なにわことはのニュアンスで、「阿呆やなア」とその愚かさを嘲弄して笑って、ちょっと切ない男の最後を観させた。これがウケぬはずがない。△2月版△「男はつらいよ、河内編」とは、公演パンフの意図であり、その正成に「日本の男の原型を襲きとってしまった」というのは作者のことではだが、ある△感慨△とは、それに至ったことに対してもった卒直な心持なのである。わたしたちは、歴史に神船を降して、その基底から跳はなければならないのだ。

さて舞台の展開についてもふれなければならない。

暗闇に蹄の音高く、馬が駆ける。激しいリズムとポリウムいっばいの音楽で、河内赤坂散所の人々の群舞で幕が開く。

十八才の馬借頭として現われた正成△幼名多聞△(江口誠三)は、ある夜夢見の少女△後に後醍醐の愛妾阿野廉子として登場△(新田めぐみ)に出会い、末は河内一の男になる、という予言をきく。その後弟正季△藤原一郎・石井満△、くづつ次郎(村土嘉利)、馬借の三郎(恒川勝也)、見繼の四郎(成田修二)らや彼の耳目の役目を果たす女忍千原

(安野広美)と共に力をつけた正成は、武士と精託する地頭を襲って農民を助け、支持を得るが、やがて暴力集団と恐れられはじめ、考えた正成は、大和川に私闘を設けて通行料取立てをはじめめる。そのとき商人長谷の御次(逢坂幸広)から、ものを作ることに専らと水銀の存在を教えられ、赤坂にその原料となる朱砂が出ることを知り、吉野に在った後醍醐帝の皇子大塔宮(黒沢隆幸)から水銀製法を伝授してもらおうとひきかえに、帝への忠誠とさらにその証しとして千原を人身御供を承知してしまう。妻久子(三沢和子)を迎え、正行(幼時・松本心平・のち尼崎陽子)もできて、河内一の男になった正成に、笠置に在る帝(金田おさむ)から招集があり、駆けつけて帝の傍に夢の少女と瓜二つの阿野廉子を見る。帝を人民に幸わせをもたらす人と信じている正成は、北条軍を千早城に迎え撃ち苦しめる。やがて足利尊氏の襲返りで幕府は倒れ、建武中興になる。従五位河内守に任せられ京に在る正成のもとへ、河内親心寺の流寛坊(宮崎正文)と三郎の妻阿仏(竹野三重子)が来て、帝の親帝が以前より奇酷なものであることを知る一方、京では正成らは馬侍と嘲りをつける。

やがて尊氏の謀叛に、心ならずも新田義貞とともに戦わざるを得なくなった正成は、桜井で正行に武士ではなく散所の民としての生き方を教え、ついに湊川で「七生報国」を唱え、千原の手にかかって死に、千原もそして楠木一党自刃して果てます。正成四三才!。大川留利子の△輪廻、輪廻……男は埋もれて、いつしか岩むした、の歌が流れ、巡礼親子の姿が現われ、消えて幕が降りる。

一幕十一場からなるこの戯曲を初見したとき、まず印象的だったのは、バイタリテイに富んだ河内弁を駆使した台詞の魅力と、まっしぐらに破滅に向って突きすすむ正成の行動線に陪音のように男と女の包絡線が、かたおか戯曲に表われたことであった。女忍千原と正成の悲恋である。

舞台は、鮮明・華麗にダイナミズムに富みながら緩急巧みに展開する。児童劇の世界で大人の演劇とはまたちがったきびしい環境と条件下で鍛えられて豊富な経験をもつ深海演出は明解で、完成度の高さを示した。

ただ、この舞台のやや過多な踊りの場面も含めて、その様式性を指摘して先に反撥をうけたが、それは決してマイナス的な評価とし

て言うのではない。もう少しディテールの形象がつけ加わることを希望したのである。

さらにいえば、千原の形象が戯曲初見のイメージでは、傍流とはいいながら、今少しねちり色鮮やかに描かれるのを期待していたのだが、淡彩であった。その部分テキスト・レゾがにおこなわれているところをみると、演出サイドの問題であったのであろうし、全体の色合い・バランスからみて、そうならざるを得なかったであろう。この際は不当な要求ながら、書き記しておきたいのである。

最後に、△男とあほう△の正成像から一言。あれほどにひたすら崇め慕った後醍醐帝に裏切られ、引っ込みつかずカッコリつけて散つてゆく正成は、まさしく△どあほう△だが、ここに一点、批判の声もある。潔よさとみればそうであろう。そうみれなくもなかったのも事実である。しかし、いずれにしても正成は、△どあほう△であることを自覚して死ぬ救いがある。だが、現世の△正成たち△は知ってか知らずか、また幻想に命を賭ける。

嗚呼、輪廻、輪廻、六道輪廻である。

演劇の世界で弱者に市民権を

## 中村おがわ作品集

「車椅子の王女とその騎士」  
「ともだち」「成年のつよし」

「車椅子の王女とその騎士」所載の「演劇会議」は在庫切れとなり、その後も問合せがあまりますので上掲の作品集をご紹介します。

申込・問合せ先 271 松戸市野菊野1-1213  
(TEL) 0473-64-5532  
中村おがわ

劇団京芸公演

「ムツニュー・フエーグー—蒸発おじさん—」を観て

小松 徹

作者のリリアース・アトランは——  
一九三三年、南フランスのユダヤ人家庭に  
生れる。少女期をナチ占領下で過ごす。「ア  
ンネの日記」のアンネ・フランクより3才年  
下——  
と公演パンフに記されている。  
アンネ・フランクは虐殺され、リリアース  
・アトランは生きのびることが出来た。  
京芸は目下「アンネの日記」をもって、高  
中校公演を再開中である。格別の思いがあっ  
たにちがいない。  
私自身この舞台を観ながら、ほんとうを言  
えば、ハウエルメイド的甘さがどうしても  
たまよう「アンネの日記」よりも、こっち——  
つまり「蒸発おじさん」——の方を、中学  
生や高校生に観せたいなと思った。  
人間は生きるに値する存在だということ、  
生きるということの素晴らしさと豊かさを鋭く

問いかけてくる、硬質のいい戯曲だ。  
時 あるゲットーの徹底的な破壊のあと。  
所 マンホール、鉄条網、廃墟。  
霧の中を進むトラック。  
「アール・ブーリ」あるいは「骸骨の  
谷」  
と台本にある。ドラマ展開の中心的存在と  
なるのは、ユダヤ人の子供たち（といつても  
もう、いわゆる子供ではない——とこれも台  
本からの引用だ）と、脱走したドイツ兵——  
「Monsieur Fugue」（蒸発おじさん）——で  
ある。  
ナチスによる徹底的な破壊と殺りくの跡に、  
マンホールに潜んで生きのびた四人の子供た  
ちと一人の人形が、遺い出てくる。然し彼ら  
が生きのびたと思ったのは幻想にすぎなかつ

た。ナチスはそれを待っていたのだ。彼らは  
トラックに積みこまれ「骸骨の谷」へ連行さ  
れることになる。確実な死が約束されている  
谷へ。いつもは監視のためにトラックに乗り  
こんでいたグロール軍曹が、今回はユダヤの  
同類として処置されるべく一緒に抛りこまれ  
る。グロールもそれを、むしろ積極的に志願  
する。彼は子供たちを森へ逃がそうとしたの  
だ。

舞台は、この骸骨の谷へむかうトラックの  
上ではほとんど展開される。  
子供たちがはじめ、グロールを警戒したの  
は当然のことだ。しかし彼はもはやナチスか  
ら脱落していた。戦争ははじまる前から、い  
わばシステム化された社会生活にはなじまず、  
ときどきふいつといなくなることもあり、「蒸  
発おじさん」とよばれていたグロール、戦争  
にかりだされ、殺されるのが怖くて殺人者  
となつたものの、遂に雄々しく殺される側に  
身を置くにいたつたこの男と、子供たちの間  
に、やがて気持が通い合うようになる。  
グロールは現実の生活の中では果されなかつ  
た夢を、子供たちに物語る。それが成人し  
ないままにやがて確実に死を迎えようとする  
子供たちの、胸のうちで狂殺されかかつてい

た夢——生への欲求——を触発する。豊かな  
森へ、ひろびろとした海へ、海の上を飛翔す  
るかもめへと、彼らの想像力はひろがって  
いく。彼らは全く虚構の生の世界を生きるの  
である。もちろん間断なく、現実がその夢をう  
ち砕く。運転台の殺人者が、そして逃られ  
ない死への脅えが、夢を通過だと断ずる仲間  
の苛立ちが——しかし彼らは生きるのだ、短  
かい時間を精一杯。その姿が殺人者を苛立た  
せ、一人は谷へ到るまでに殺されてしまう。  
やがてすべての子供たちとグロールも——し  
かし、はじめ殺人者どもに追われ、恐怖と猜  
疑で身をちぢめていた子供たちの姿はそこに  
なく、殺人者どもを圧倒する子供たちの、人  
間の尊厳をかちとつた子供たちの存在感が、  
観客の胸に鋭くつきささってくる。

以上は、私なりの読みとりをまじえたあら  
すじである。  
演出は岡井直道——東京演劇アンサンブル  
に約十年在籍して、今年の春京芸に身を  
投じた人だ。美術、照明、音楽、舞踊に、東  
京時代の仕事仲間たちの応援を受けている。  
岡井君の狭いアパートの一室に泊りこんで、  
自炊の共同生活をしながら、舞台づくりに参

加したという。その成果は見事に出ている。  
こうしたことを必要以上に美談めいて語るつ  
もりはないし、本人たちにも迷惑だろう。だ  
がまがうことなく美しい行為の集積であるこ  
とにはちがいない。岡井君も新しい出発を、  
全身でかみしめているようであった。  
演技陣も若い俳優たちを中心に——実は久  
しく京芸の舞台を観ていなかったのだが、ナ  
イヴな、全くてらいを感じさせない演技を  
展開した。関西には、若いうちから個性とい  
うよりも個性をもって、その枠から出ようと  
せず、役をこねまわす俳優が多く、いい加減  
げんわりさせられているだけに、実に新鮮で  
あった。いささか個人的な感懐をまじえるこ  
とを許してもらえば、三十年にわたって、時  
に痛々しいほど憔悴しきつた表情をみせなが  
らも、京芸を支え通してきた藤沢君が、今可  
能性をもった青年俳優たちにかこまれて、表  
情に生氣をとり戻していることの原因がうか  
がわれて、感動に近い喜びが私の内側からも  
起ってくる——そんな舞台だった。  
それだけに、表出された舞台には厳しい注  
文もつけたい。  
私は、何回かこの台本を読み返していたの  
で、相当自分の想像力で補い得たのだが、京

都新聞の劇評で、「観劇はひどく疲れを覚え  
た」と書かれているように、観客に可成り苦  
痛を強いるものであった。その理由は、展開  
されていく出来事のコンテニューイティが不  
明確である、というか、出来事が十分に蓄積  
されていないことにある、と私には思われ  
た。  
先に紹介した、私の読みかたをまじえたあ  
らすじでも推察されると思うが、この作品は  
俳優に大変な想像力を要求している。それに  
応じきれなかったということがひとつ。しか  
し私がより大きな問題だと思うのは、もちろ  
んそのことと関係があることだが、登場人物  
相互の関係のなかで、ひとりひとりの行為が  
追求されていかなかったのではないかと、とい  
うことだ。それぞれの俳優が、それぞれの役  
のうちがわに入りこもうと、まっとうに取り  
くんでいることはよく分るのだが、それぞれ  
のままに抛りだされている。極限状況のなか  
で共に逃げのびる過程で、お互いを知りつく  
している子供たちの間にある連帯感、それと  
うらはらにある拒絶感、そこへ蒸発おじさん  
がかくわってくることで、知りつくしていた  
と思われていた関係のなかにも、新たに亀裂  
が生れたり、新たなより強い連帯感が生れた



り——そういう関係の変化が構築されていくという観点が、演出もふくめて、弱かったのではないかと思われる。したがって舞台が、ダイナミックにうねってこないのだ。人間の想像力といったものにしてからが、個人の内面世界のなかからだけ出てくるものではなからう。それは必ず、他人と関係をもとうとする行為のなかから出てくるものだ。ましてやそれが、まっすぐに伸びていたり、豊かに拡がっていく時には、必ずそれに対応した関係の深まりが、具体的にかかわろうとする行為があるはずだ。そこへ目が届いていかないというのは何故なのだろう——と考える。

そのことは、芝居づくりの根本にかかわることではないか。

べたべたとしたもたれ合いの中からは、つくり手としての鋭い感性も出て来ない。ひとりひとりが、自立した俳優として作品世界に立ちむかっていく——おそらく演出はそのことを要求したのであろう。今度の仕事を通して、俳優の中に、今までの芝居づくりのなかでよりかかっていたものが、いかに不確かなものであるかを思い知ったという声が多いということも聞いた。そのことから、今回の公演がひとりひとりの俳優にとって、大きな

意味をもったであろうことは想像に難くない。しかし、やはり、関係を常に新しくつくり変えていく作業をともなうことなしには、俳優の自立ということもあり得ないのではないかと——演出家においても——と私には思われるのだ。それが稀薄であったということが、ナイヴにひとりひとりが立ちむかっていることがうかがえるだけに、なんとも悔まれるのである。

先に述べたスタッフの協力もあってだろう——かたちとしての表現には、ユニークなものを感じさせた。これも、演出家としての才能ではある。それを評価するにやぶさかではない。しかし俳優がかもしたすものからは遊離していた。形式主義というレッテルを貼るつもりはない。しかし、結果は形式が遊離して目に焼き付いた。残念である。

実は来年の春、私はこの劇団を演出する。ということで、一観客としてよりは、いささか、集団の内部に足を踏み入れたところで、この一文を書いてしまったことは否めない。

酷評になってしまったが、岡井君の参加で、この「歴史は古いが若い集団」のなかに、新たな火がつき、今までになかった動きが出て来たことは確かなようだ。先に引用した京都

新聞に劇評を書いたK氏も、京都における演劇状況の中で、最近の京芸の動きの中に、可能性をはらんだ鼓動が聞こえたと語っていた。多くの人がそれを感じているのだとも。

舞台は結果的に難渋であった。観客の中からも「インテリ向きの芝居ですわね」という声があったとも聞いた。しかし、この作品世界は、少しでも生きることまっとうに考えようとしている人ならば、心を激しく動かされる内容もっている、たとえ中学生にでも、と私は思う。そのように舞台化出来なかったのは、つくり手の側の責任なんだということ、ふり返ってもらえたらと思う。

——八月三〇日、向日市民会館で観劇——



劇 評 □

三つのおもしろさ

—「母」・「アリババ」・「かすみあみ」—

丸 子 礼 一

(1)

マンネリズムということは何にしてもよくないものである。私のつたない中部ブロック報告も毎号続けているうちにスタイルも内容も、何かワンパターンになって来た様なのだ。

この辺で他の記事でも、と思っていたら、幸いにして、今年の夏は中部の上演が少なかつた。そこでブロック報告は一回休みにしてこの時期に見せてもらい、それぞれに学ぶべき所が多かつた三つの上演について、感想を述べてみることにする。

三つの上演とは次の通りである。  
東京協同劇団 創立20周年記念公演 No.63

- 6/12・13 於川崎市立中原会館ホール 7
- 7/8・9 於横浜青少年センターホール 7
- 7/12 於川崎幸市民会館ホール ベルトルト・プレヒト作 千田是也訳 小田健也演出「母」(おふくろ)

劇団はぐるま 夏休み親と子の劇場 No.9  
7/19/21 於岐阜市民会館 こはやしひろし脚色 浦田ひさし・松岡直太郎演出「アリババと40人の盜賊」(千夜一夜物語より)

世に下之一座 東西リアリズム演劇会議合同セミナー記念上演 8/23 於比叡山延暦寺会館 岡安伸治作・演出「かすみあみ」

(2)

この頃は賞金が安くて、ライド(脂肪)はたりない。うすいスリーブしか作れない。まずそんな顔をしてスリーブをすすする大切な一人息子パウエルの変を見るのがつらい、母(おふくろ)の気持が、素直に、単純に伝わって来た。母親としてのウラソウを演じた室野定子の、どちらかと言うと日本的な持ち味がそうさせたのかも知れない。

京浜が、プレヒトの「母」を、小田健也さんの演出でやる、こりや、どうしても見て

おかなきゃ……。と名古屋から横浜の会場まで五時間、マイカーを飛ばして来た私の意気込みすぎた気分は、閉幕すぐに、うん、わかるなあ……。と、ほぐれたのである。

全体にテンポの早い、わかりやすいプレヒト劇だった。音楽の安達元彦さんが舞台のすぐ前から指揮して、合唱をぐいぐい盛り上げる。

息子のかわりにビラまきを引き受けて、工場へもぐり込むために守衛にうるさくからむ一寸コミックな場面、守衛の客演の劇団ひまわりの福島靖夫が面白い味を見せていた。売り物のキューリを包んでいるビラが労働者に広がりにストライキを煽動、スト反対派の労働者までビラを持っていて捕まる。「あの人は、キューリを買っただけなのに……」きびしい運動の中の笑いが客席から自然におきた。

若い層が多いのだが、劇に「わかる感じ」のする客席で、京浜労働者の中から集まって来る人々は、同じ若い人々でも名古屋とは一味ちがう様に思う。

私も演技者のはしくれであるだけに、単純で自然でテンポのある舞台を創りだすためには、どれ程の苦勞と創意ときびしいけい古による練り上げが必要であるか、歌唱がバ

チッとそろつということが、曲に対しどれだけの理解を要求するものか、かなりわかっているつもりである。小田演出のもと、京浜の成長ぶりを見せられた思いがした。

ツァーリを信じて参加したデモで、労働者が射殺され、息子が逮捕されて、教師ニコライの所に引きとられてから、しつかりした活動家になって行くウラソフを着実に表現する草野と、知識が人間の役に立たないと悲観しているニコライの役の中沢研郎の少々オーバー気味の形象のとりあわせも面白かった。しかし日本の現実の中にいる我々自身、ニコライの人のよい日和良主義よりあまり前へは出ていないだけに、我々の中のニコライを批判しゆさぶることはかなり難しいことなのだろう。

ニコライから労働者連が文字を教えられる場面の、革命に関する言葉になると急に熱心になる所や、牢獄にいる息子から同志の住所を聞き出そうと、なげきの声と早口をつかいわける所などは、客席から笑いがおきるのだが、どうも少しきこえない感があった。

農場へ新聞を持ちこんだウラソフのはげましによって、料理人たちがストライキに立ち上る所になると、一寸ついて行けなかった。

ロシアをおおう農民暴動というバックと、高度成長の中にくみ込まれている小市民である私とのズレの大きさによるものだろう。

しかし、流刑から戻るパウエルを迎えて狂喜し、すぐ又旅立つ息子を送る時間もなくピラを印刷しつづける母の苦しみの姿は深く胸を打って来た。パウエル役の鎌柔一のしつかりした演技も好感が持てた。

そして息子の死と病の床から世界戦争勃発の知らせをきいて立ち上り、戦場へと流れる人々に必死で反対を訴える姿は劇場の外の自覚責任から、傍若無人に始まっている右への動きとオーバートラップして、若しみを通して本当のものを見通すようになったおふくろのきびしい視線を今日の私達にぶつけて来るのである。

「生きている限り、「決してできない」なんてお言いでない。と歌う幕切れの盛り上がり、暖い拍手の交換のカーテン・コールにひたりながら、ゴリキキもアレヒトも決して古くなんかならないな、いろいろと失いたくないものを抱えこんで「政治は難しいよ」なんて云っているニコライの様な私の方こそ古くなりつつあるのではないかと自問するのだった。

(3)

「ひらけ、ゴマン。島源三のハッサン以下四十人(?)の盗賊が客席いっぱいに踊り狂った末、さて岩屋の前で呪文をとる。どの辺から仕掛けの扉になっているのか、楽しみに眺めながら待っていると、ドライアイスの白煙もうもう、巨大な岩壁と見えていた張物が、ゴロゴロと横へ動く。中はキンキラの宝の倉……と来るからたのしいのである。

この「アリババと四十人の盗賊」で、劇団はぐるまの親と子の劇場は九年目となる。毎年一万人近い親子が、海や山と同じ夏休みの行事として、観劇の日を楽しみにしている。

いや、私自身も、そうなのである。「竜の子太郎」「虫の生活」「ゆき」「森は生きている」……続けること、積み上げることの大切さを思い、名古屋でこれがやれないことのがゆさを痛感しながら、毎年見に来るのだ。

役者が面白くなったな。これが今年の第一印象である。欲深なアリババの兄カシムが大変ユーモラスで、人間味に富んでいる。青木茂は大體コミックな事が好きらしいのだが顔がしぶり、好い顔をしているので従来は余りやれなかった。カシムの肥満した扮装は彼を辺に生々とさせたようである。その妻アルマリーの大塚鏡子も切れがよい。カシム

以上の女の欲深さが楽しく発露される。一方で貧乏なアリババの妻アルラシッドと利口な娘モルギアナの加古みちるもそれなりにはつらつとしていた。

盗賊の岩屋から宝を取って来たのがカシムに知られ、再び忍びこむが呪文を忘れたカシムがバラバラにされる前半のテンポは快調である。アリババのラクダ、ラクシーのひょうきんな芝居も人気を呼んでいた。

盗賊ハッサンの手下がアリババを探しはじめ、家につけた目印しをモルギアナが見つけて、同じ印しをあちこちにつけてしまう所、油商人に化けて来たハッサンの手下が大がめにかくれている所(字分達が、おしっこがしたくなったりして困るあたり仲々面白い)この辺からモルギアナの活躍になるのだが、大きな舞台を一人で引き廻すので、加古みちるはよくがんばっているが、前半のような景気よさが無い。最後の宴会の席で、剣の舞にかこつけてハッサンを倒そうとし、遂に乱斗となり、町の人々の協力を得て盗賊をほろぼすというのだが、町の人々の動きというのはもう一つわからなかった。

で、アリババだが、脇役が活躍する劇にただ人の好いオッサンという感じで片岡隆司も

演じ所に困ったのではないか。考えて見ると原作でもアリババは意外と見せ場が少ない。

さて、盗賊も遂に込んでめでたしめでたしとなり、カーテンコールで、私も覚えてしまっている主題曲を、子供連や舞台の人々と共に歌って、日常得られぬ迫力ある冒険に眼をかがやかせている子供連にもまれながら場外に出ると、早や、次の回を待つ親子の大群が列をなしているのだった。

(4)

「かすみあみ。一眼に見えないあみに翼をからまれ、もがいても、もがいても飛び立つことは出来ず、命つきるまでしめつけられつづける。平凡な一労働者と、体制の非人間性との鋭い対決をえがく、世に下之一座の座付作者岡安伸治の鋭くこよかな筆法は、一人の守衛—ガードマン会社の下、端社員が悪戦苦斗ぶりを、かく表現した。

四百人近くが比叡山頂に集って大成功となった東西リ演合同セミナーのモデル上演、延暦寺会館の大広間という何もない所へ舞台を組んで、黒子とスライドと効果音で進行させ、火事までアラカイドの絵で表現する岡安演出が、中年ガードマン早川を演じる里村孝雄の、役の心に乗り切ったしたたかな演技を

中心に展開していた。

適性テストを受けさせられ、マークシートのような単純で忙しい記入(語り手が読み上げスライドが写し出す)の仕事の中で中年ガードマンの心に次々と浮かぶ体験。ヤクザに車の誘導が悪いとインネンをつけられたり、間違っでガソリンの入った石油ストーブを、日常的に上司の伝言を軽視して点火してしまったり、見物に囲まれながらの飛降り自殺の救助で同僚が死んだり……。必殺出演の助演者をふくめて、細部にわたり、ていねいで、その為にユーモラスになる描写がつづく。少し観客にひきづられて乗りすぎたか、昨年の「仕掛け花火」の運転手の生々しい迫力にくらべて形式的表現になった部分もあったが、疾とテムポの中に、現代資本主義の惨忍な素顔、一介の労働者の生活の中にあらわれたそれを感じさせ、ゆたかに見える日本の表皮をめくって見せた面白さがあった。

……三つとも面白かった。おもしろいと云う言葉は適切でないかも知れない。何かこうしたたかなもの、つきつめたもの、現代をにらみつづけるもの、そう云うものが場を変えてテーマを変えて、現われて来た時、演劇と云うものは本当に面白いと思う。

## 観劇雑感

## 萩坂桃彦

## 「傳だらけの手」(新人会)

正直、一寸シンドかった。内容が内容だから、軽くてたのしい筈はないけれど、この圧迫感はどうも主題のせいではないらしいので、少し書いてみる気になった。

ナガサキの原爆詩人で、平和運動でその生涯をとじた、福田須磨子さんが、この作品のモデルになっている。この詩人については全く知識がないので、劇の主人公深田澄子の生き方についても、肯定も否定もない。

「わたしたちが、今果したいのは、彼女を肯定したり否定したりすることではない。彼女の人生観まで支配してしまった核兵器の恐ろしさを告発したいのである」と、演出の八田満穂さんがパンフレットに書いてみえるので、余計云々いにくいのであるが、その「告発」の

主題を、主人公澄子に宿らせ、作者の藤川健夫氏もまた、どろどろした煉獄の中の生き方を通して、余さず澄子をとらえてもいるのでそれならば、そこに出てくる人間関係のありようについて、問うてみることも許されると思うので書くのである。

順序として、簡略だが「ものがたり」を通ることになる。

長崎の原爆で両親を失った深田澄子は、自らも原爆病をわずらい乍ら、戦後の荒廃の中にはうり出されて、壘口では、ヤミ物資やヤミ焼酎まで商うという、いかかわしい古着屋の屋台をかまえたり、飲み屋の女になったりしている。同じく被爆者で足の不自由な年下の青年杉本は、澄子に想いを寄せるが、被爆者同士の結婚を恐れて、澄子は姉弟としての約束にとどめる。

そこへ、日頃澄子に首ったけの酒井という

男があらわれる。戦後のドキクサの中を巧みに泳ぎまわり、今は何かと羽振りがいい。

澄子は、杉本への経済援助(杉本は画家志望である)を考えて、心ならずも、酒井と結婚する。

しかしこの結婚生活も、酒井はヤミ商売が裏目に出て、どん底に落ち込み、自暴自棄の酒の明け暮れ、澄子を原爆の化物とののしり、暴力をふるい、澄子の手内職の僅かな収入さえも飲みつくしてしまふ。

これに耐えている澄子の生きがいは何なのであろう。酒井の連子の和夫が、実の母のように、澄子にやさしいということ位では、説明が足りないようである。

一方、酒井の墮落の真因は何なのか。彼には、澄子と杉本への根深い嫉妬があるとしても、この嫉妬は余りにもヒドイ。

こういう没分漢のヤクザのような人物もあれないことはない。しかし、酒井が本当にこの程度の男であったとしたら、この男をえらんだ澄子は、単に被害者としてとどまることで許されるか、どうか。

こういう理不尽な扱われ方のなかで、澄子は、被爆者の憤りと平和を希求する心の詩の世界へ入ってゆくのであるが、たとすれば、

逆に、酒井を突き落してゆくことになりはしないか。

酒井との関係で、澄子が被害者として一方的に描かれるところに、ほくは苛たちをおぼえる。そして破れる。この夫婦関係が、惨鼻を極めた地獄絵図として見せられるが、この説明は、むしろおしつけに思えてくる。

ここで特徴的に扱われているような澄子の境遇は、恐らく実際か、もしくはそれにちかいかいものであったにちがいないが、真実の内奥は、その先にあるとみたいのである。だから、酒井の側からの澄子の像がどうしても必要になってくる。それが、ドラマにおける人間関係ではないのか。

見ていて疲れたのは、どうやら、こうした意味での、ドラマの構築の稀薄さにあつたと思えてきた。

その証拠に—もう少し物語をつづけると、澄子が漸く酒井との離婚に成功し、入院中知り合った大学教授の佐山や平和運動をしている若い仲間たちにはげまされて、新しい人生の訪れを迎えるのだが、そして杉本との結婚を決意するが、そのとき既に、杉本には若い

婚約者が出来ていて、澄子は急転して奈落につき落とされる。

はげしく杉本を詰る澄子。かつてあれほど、求愛を受けつけなかった澄子が、今となって、ほくを責めるのは身勝手だときめつける杉本。

この終幕での壮絶なやりとりは、殆んど始めて、ドラマとしての燃焼をみせる唯一の場面になるのである。ここは、見ていて、疲れない。澄子が息づいているのである。

云いたいこととしていえば、全体がこのような視点でつくられるべきだったと思う。

主題をつらぬきたい意図のもとに、強引にひきまわされたが、前半の、もしくは大半の澄子である。

この大役をやりおせた、澄子役の馬場恵美子に講評を送るとしても、それは、この作品が成功して完結したということにはならない。舞がおりても、ほくの気持の中で割り切れなかったのは、そこるところである。

## 「夜明けのランナー」(編運)

徳川三百年の幕政が倒れて、明治新政府樹立とともに急速に民衆の意識が覚醒する。こ

の勢いは、むしろ維新政府をつくがえすほどの気概にみち、燃えた政府はこれを弾圧によって収束しようとする。

この明治草創期における、民衆の間から噴き上がった民権運動は、民主主義運動の萌芽として重要な意味をもつが、ここにとりあげられた、長野県安曇野の、松沢求策の運動もその一つ。それは一八八〇年。

百年後の一九八〇年、民主主義にとって新たな危機感をもつこん日、改めて、松沢求策を見直すべきとしたのが、この戯曲の作者藤川健夫・早川昭二と演出者(早川昭二)の意図である。

舞台は、しかし、求策の肉体的な魅力を多く須い、気つぶのよさや奔放な情熱、果敢な行動力、情感溢れる好演として見せる。

妻ある身ながら、伝法肌の芸者からも愛され、しかも妻からも愛されるという両手に花の絵巻物は、なかなかの娯しさである。求策に扮した松村健世が、口立てのうまさと一寸甘い魅力のあるマスクで、立廻って、客席の趣向に投ずる。

求策は同志とともに興匠社を結成、そのいきおいは東京にまで及ぶ。民衆の参加をふくめた国会開設献金書を右倉貞親のもとにもら

とむところ、この劇のヤマになる。

と、書いてしまうと安直に過ぎるが、上演台本の作成には並々ならぬ苦心があったようだ。

銀河書房発行の中島博昭著「勤練の民権―松沢求策の生涯」を底本として、現地踏査も終し、先ず、藤川氏が、求策の生涯をドラマチックな大きな流れの構成に仕上げ、早川氏が信州での現地上演に焦点をあわせて、求策にそくした綿密なディテールを盛りこんだことを見てとれる。それについては、求策の日記、ノート、詩歌、劇作「民権闘争の面影」、新聞社説、記事、手紙などの渉猟、そのほか求策に関する広汎な研究書の参照、現地に赴いての資料の探索など、史実と照合、舞台復元には苦心の跡がある。

しかし、伝記や史実、そのままが舞台になったのではない。逆に、その時代、人間たちが懸命に生きた姿が、はからずも歴史なのである。

早川氏はこの倒置法をフアンダンに用いる。正味二時間四〇分、十数景にたたみこんだ張りのある展開は、演出の技量いっばいの力作となった。

ただ限られた「副題」の演技者が、一人何役もの活躍は、何としても応接にわずらわしい。田村貫の如きは、スパイの角袖、豪農、農民、人斬り士、劇中劇の手代、声では岩倉具視、千田華生も、巡査、農民、漢学者、中江兆民と立ち変って見せ、顔や声の特徴も、さすがに消し切れないこの多役は、ぼくのようには素顔になじみのある観客にとっては、ご苦労だなあと、余計な気づかいが出てくる。

松沢求策（松村建也）と松本新聞社社長森川豊造（森幹太）のみがこの難を免れ、求策の仲間の望月栄（大峰順二）上菜あり司（北村宏二）がどうにか定着した。田村貫は、「人斬り」が冴えている。

男性優勢の芝居のなかで、求策の妻とめ（山内淳子、大田幾代）、伝法肌の芸者りき（高畑すみ子、平口信子）、東京の芸妓（谷田川多恵子）が健闘した。

シルエットではじまる、幕あきの「夜明けのランナー」たちの構図が素晴らしい。

### 「華園終焉歌」（劇団東演）

ちか頃もつとも堪能させられた芝居の一つである。素材が老人ホームなので、身につま

されるほどの年令になったわが身に、何かと重なる思いの多いためかもしれぬ。といて何かをおしえられたというのでもない。人生の終着駅にゆきついた、七〇才、八〇才の男や女たちが、うろうると、まだ生きている。その哀れさである。

ここにはスオーリイと呼べるほどのものもない。幕あきに鈴木ふみという七十二才の老婆が人所して来、幕切れに白石はるという七十二才の老婆と野本与平という七十二才の老人が、とうとう精神病棟の白菊寮におくられるという、あとさきの話はある、しかし、そのことのために、この老人ホームの話が組み立てられているというでもない。

いったい作者（近石鏡子）はどのような心づもりで書いたのであろう。初演をみた神谷豊平さんが「よくぞ書いてくれました」という云い方をされていたが、おそらく、そういうことになるのかもしれない。老人ホームを訪れて、じつと老人たちを見ている。草花や小さな虫でもみるように、じつとみている。するとそこに、どの一人をとっても、ながい歳で刻まれた人生がやどり、そこから滲み出るおかしさや哀しさ、これがドラマでなくて何であろうかと、作者はつきあげられたにち

がない。

この、ふかい観察が全部、日常のセリフで形をなすまで、作者は五年、七年のながい年月をかけている。

いくつかの、この中の光景をおつたえしよう。

ホームの中で誰からもツマはじきされ、集団行動になじめぬ七十五才の荒木源造（近石真介）が、迷いこんだ赤木を残酷で、もしくはぶんの食を割いて、飼っている。犬は花畑や野菜畑をあらして指弾的になり、追いつめられたときの、源造の叫ぶような告白。「あいつは目も見えねえし、歯もねえんだ」。

野本与平（小池幸次）が精神病院に送られるとき、彼はもう食べものことしか気持に浮はぬ魔人であるが、彼の白菊寮ゆきが、かっつての成召・出征のときの晴れがましさとタフってくる。「陸軍軍曹野本与平ただ今より行って参ります」と、拳手の礼をしたときのあのたたずまい。

七〇才、八〇才の老人ホームでのめめこと八〇パーセントは男と女の問題だそうである。ここでも六十九才の旦那（大宮博二）をはさんで七十四才のマダム（飯倉加代子）と六十七才の衆（瀧口順子）の頼めてがある。

め線の争いどころではなく、取っ組み合いである。若い観客たちは、声を立てて笑っていたけれど、ぼくには笑えない。作者も笑ってはいないだろう。

舞台のつくりでは、東演は見事なアンサンブルでとらえた。三越では初演の東演ベライタより、いつそう練りこまれ、人物関係や個性が明白になった。

鈴木ふみ（遠藤曉子）の陰影が深まり、初演の頃、稍不鮮明だった白石はる（山田珠真子）が確かとなり、渡辺さん（矢野泰子）が口まねな、よく居る年寄りのタイプをうまくうつし出し、八〇才で会長の広田相沢治夫（小池幸次）が、オプチミストの典型を見せる。与えられた役のアクセントにもよるが、荒木源造の近石真介、野本与平の小池幸次が圧巻である。

この芝居で、八田元夫、下村正夫両氏の俳優教育が実を結んだとする云い方を、どこかで読んだが、それも当たっているかもしれない。

ところで、これだけ役者が揃い、種々な役柄が描き分けられてしまうと、簡単には云えぬが、欲しくなるのは、演出者（野部靖夫）の、見せ切ってしまう、なお且つ決してほ

しいもの、そこで「残れ」とするものが何であるかは一言ではいえないが、思想とでも云おうか、演出者の、シャープな目なさしの一瞬の欲しが、欲しかった。と、ケチのつけようがないので、云ってみたくなる。

### 「クイズ婆さんの敵」（再演）

この作品の初演の舞台については43号で書いているので重複をさけるが、飯沢匡という作家の中に既に確立してしまっている、諷刺や怒りをこめたウエルメイドな創作術に、追いつき追いこせというのが、ぼくの青年劇場に対する注文であった。諷刺や喜劇は、ネガティブな作用で効き目が出がちであるが、青年劇場はそれをアクティブにすることができ、出来たときに、新しい質の飯沢作品が生れる、というのが、ぼくの考えであった。

「クイズ婆さんの敵」は、七九年九月十四日、東横劇場での初演以来、通算六十二回の上演をかさねた。それも、北海道、沖縄を除いた日本全土にわたり、時、ところ、観客のちがいの中で、いい意味での満身創痍をくぐってたたかぬくという仕事であり、東京再

演は、その最後の仕上げであった。

当然のこと乍ら、やはり戦火をくぐって来ただけのことはあり、そこには技術の習熟とということより、性根の練磨、あいまさが洗い落されて、ムダがない。硬質、高度な喜劇に行きついた。

初演では、あり得ぬことだが、クイズ婆さんが瑣末な笑いの中に消されがちであった。各人、懸命にやればやるほどバランスが出ない。作者の芝居づくりの手際だけが表面に出てくる。笑いが多ければいいというわけにはいかないのである。

役者が役どころを織るといいうのにも、手間ひまがかかるものだということが実証されたのである。

この芝居で、クイズ婆さんは、ほんとうに木石轟動に対して怒ったのである。この怒りがこの戯曲の基本である。小竹伊津子さんほどの女優にしてからが、この単純さに徹するのには、こんなにも時間がかかった。また、それを必要とするほどの、ふかい怒りであったわけである。

青年劇場は、どうやら敵沢喜劇に追いつき、或は追い越したと、初演の舞台とのちがいを、おもい起し乍ら、ほくは思った。

### 「コーカサスの白墨の輪」(俳優座)

「結論。原作の限界か、俳優座の限界かわからぬが、ブレヒトって案外つまらない。」

これはある新聞批評の一節である。それも大新聞なので、もう少し何とか云いようがないものかと思つたが、どうしようもない。カマトかとも思うが、ブレヒトを知らぬことで大見得を切っている。

「とにかく登場人物が百数十人というこの舞台は、にぎやかで楽しいものです。ただ仮面劇であり、俳優のなまの表情を見たい、というじれったさを感じさせました。」

これも、もう一つの新聞批評の一節である。こうなると、芝居も御難としかいえない。「案外」おもしろいブレヒトを要求したり、仮面劇の意味を知らうとしないうことで、ブレヒト劇を容認したりでは、核抄のしようもない。別に俳優座の趣し者ではないから、これ以上とやかく云う必要もないが、実は、こんどの「コーカサスの白墨の輪」では、やはりブレヒトはおもしろくもあり、また仮面劇の仮面たる所以を何ほどかはたのしめた。ほくとしては、こんな前がきも必要となつて

くるのである。

これまで、京浜協同劇団、名古屋演劇、劇団仲間の「コーカサス」を観てきて、どこにも失望はしていない。それぞれ飽きることなく、ブレヒトのおもしろさがたのしめた。

確かに、話そのものは、新しく興味をもつ筋のものではないし、ブレヒト劇の教訓にしても、教訓だけをきりはなせばおどろくほどのものではなくてきている。しかし、それらが風化したとして、果してブレヒトの提示していることがら、こんにち、解決され尽しているためだとすることは出来ないだろう。

「持ち物と持ち主との関係は、役立つ物が役立つ人のもことになる。子供は母性愛のある女のものであることで、よく育ち、車は運転のうまい者のものになることで、よく走り、谷は灌漑する者たちのものになることで実りをもたらすのだ。」

というよく知られた、この戯曲の命題にせよ、こんにち不必要になっている事象は何ひとつない。ラスベガスで五億円も博奕でスつてきた政治家が日本にいるが、また庭の池で何百万円もする鯉を泳がせている政治家もいるが、こういうひとたちの持物と持ち主とのかんけい

を、少しでも考えてみると、幼稚なたとえだが、思い当る。

まあ、それおもしろブレヒトの教訓はつまらぬでしょう。大同裁判の「子は誰のもの」が古ひたように古ひたとして。しかし、ブレヒト劇の「おもしろさ」は、それがすべてではないのである。逆である。単純なストーリーをたてながら、それを作ってゆく事からや人物のディテイル、過程の中に「躍動」がある。

たとえば、冒頭のスクハの町の総督ゲイオルギイ・アバシウイリが反乱に仆れて、その夫人ナテラが、火に包まれた城内から脱走するときの、あの、本性むき出しの場面、ミヘル坊やが何放棄てられたかは衝撃に植しないだろうか。女中グルシエの行動も、つねに環境、状況が決めてゆくのである。グルシエの中に「生みの母親」以上の、ミヘル坊やに對する愛情が生成されてゆく必然性に、説得力がないだろうか。無頼上りの裁判官アツダクがグルシエに「わが輩には、あれがそのほうの子供であると思えん、しかしかりにそのほうの子供であるとして、なあ、そのほうはあの子が金持であつてほしいと願わんであろうか？ あの子を金持にしてやりたくないのか？」

と問いかけたとき、グルシエの、怒りにふるえて沈黙している姿は、やはりつまらないだろうか。

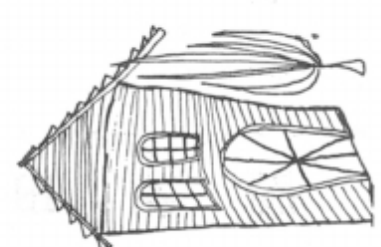
仮面には二つの理由がある。劇中劇として古い昔話という設定。つまり、これを演ずる観るコルホイスの農民たちからの、時間と立場の距離を示すこと、また解説や歌手たちの素面での訴えかけを、よりちからづよくするための措置。

もうひとつは、決して、この物語は、グルシエやアツダクやナテラなどの、個人の行跡に終始した芝居ではないことだ。ブレヒトの扱つたのは、政治であり、革命であり、正義と不正義であり、虚偽と真実なのだ。

仮面をつけたグルシエと仮面をつけたシモンの恋の告白は、表情をあらわにした恋人同士喜び感が見えぬからといって困ることはない。ここに必要なのは、もはや離れてはならぬ関係なのである。

だから、カーテン・コールで仮面をあげて素顔をみせたときの、グルシエの栗原小巻やアツダクの可知靖之やシモンの立花一男やナテラ夫人の大塚道子が、あれほどに美しかったのである。

千田是也氏の演出による「コーカサスの白墨の輪」は、やはり綿密であり正確であり、權威をもつた舞台であつた、とはくは思う。林光氏の音楽を称揚する声もきくが、ほくにはそれを理解する能力がない。



# 私にとって衝撃的だったフィッシュ・レポート

嶋田邦雄

ブレヒトは依然、演劇人に論争の火種を提  
供している。ブレヒト批判自体、決して新し  
いものでなく、古くはルカーチとのリアリス  
ム論争、スタニスラフスキー・システムをめ  
ぐつての社会主義リアリズム側からの批判、  
東ベルリン暴動（一九五三年六月）とブレヒ  
トがモデルとされるG・グラスの「賤民の暴  
動権古」などが知られている。その後もハブ  
レヒト対話などの催しを通じ、あるいは国  
際的な舞台でブレヒト批判やそれへの反批判  
は数限りなく紹介されてきている。それらは  
千田是也氏の著作や「演劇会議」誌40号での  
八木浩氏の巻頭論文「ブレヒトを現代にどう  
生かすか」などからも容易に知り得ることで  
ある。しかし、改めて、リアリズム演劇創

造をめざす日本の演劇人の間でこれが問題に  
なっているのは「演劇会議」誌45号のこはや  
し・ひろし氏の報告、およびその直後に比叡  
山で開かれた「東西リ演合同演劇セミナー」  
でのこばやし氏の問題提起によるものではな  
いかと思う。私自身、フィレンツェ演劇祭へ  
も、合同セミナーへも出席していないので  
本来、発言できる立場ではない。それにもか  
かわらず、こばやし報告はいろいろな意味で  
文字通り、私にとっても衝撃的、だったで  
非礼を頼みずすに所感を述べさせていただく  
ことにした。

衝撃的だったのは陰ながら段々敬しているこ  
ばやし氏がギリシヤで、そしてフィレンツェ

でまさに天使にはほまれた赤子のごとく感  
動し、ひた切り、打ちのめされている様に  
接したことだ。同感である。徹底した変革な  
しに近代、現代へと経過し、戦後処理では天  
皇朝がもたらした犯罪追及も不十分なままそ  
れを残した日本。民衆意識の中にも、目を見  
はるような先進性があるかと思うとどうにも  
始末のつけようのない後進性も少なからず同  
居している。私たち自身この底なし沼のよう  
な状況から決して自由ではあり得ないし、演  
劇創造の現段階における苦悩もこの状況と大  
きくかかわり合っていると考える。この日本  
からあのルネッサンスの歴史が浸み込むフィ  
レンツェへ足を踏み入れたこばやし氏の芸術  
家としての感動には率直に敬意を表したい。

しかし問題はもう一つの衝撃——国際演劇  
会議でのブレヒト評価をめぐる記述である。

演劇と日常生活、昨日と今日、自体、大  
変興味深いテーマだ。

ところで基調報告者はベルナルド・ドール  
氏であつてドルトではないと思うが、登場す  
る作家名も誤記かミスプリントか、気になる  
箇所がいくつかある。例えばブレヒトと同時  
代人で逆に今日評価が上っているというホル  
バスはホルヴァートの、フレッチャーはフラ  
イサーのことはないか。日常性演劇を発展  
させている西独作家のうち、クロイツはクレ  
ッツ、ボン・シュトラウスはポートリ・シュ  
トラウスの誤記と思うのだがいかがだろうか。  
ペダンティックなあげ足とりで指摘するの  
ではない。大阪では研究者グループがこれらの  
作家、新しい演劇動向についてビデオなどを  
通じて研究を進めている。不十分なから私も  
その片隅に出席させてもらうことにしている  
が、そこでとりあげられた作家がこばやし氏  
が列挙した作家と同一であることを前提にし  
て話を進めたい。これらの作家とブレヒトと  
のつながりが問題となっているだけに、正確  
を期したいと思うからだ。

それらの中で非常に印象的だったのはクレ

ッツである。ビデオ上演されたのは「先きの  
望み」というモノドラマ。養老院入りを目的  
前にした老婦人のひととき焦点を合わせ、  
回想があるかと思うと小鳥を持って行こうか、  
どの本を持って行こうか、等々の心の動きを  
淡々と描いて行く。確かに日常性の演劇であ  
る。しかしこの日常性は観客をきくりと揺さ  
ぶる、日常の再認識であった。見慣れたこ  
とを見慣れぬように、と呼びかけるブレヒト  
の視点に通じるものがそこにはある。もちろ  
んその視点はブレヒト的手法によってではな  
く、沈滞した心象の糸を丹念にたぐり寄せる  
作業を通じて浮き上がらせる描き方だった。  
しかし自然主義リアリズムへの回帰でもない。  
クレッツに限らず、描こうとする対象、内容  
に対して作家はそれを最大限可能にする様式、  
手法を模索するはずである。

ブレヒトは古くなった、とするブレヒト批  
判テーゼが的確に射たものであつたら、  
それをもっとも喜ぶ人はほかならぬブレヒト  
であろう。永遠不変のブレヒト教みたいなの  
ができてしまつたら、社会主義を標榜しな  
がら個人崇拜や官許の哲学がまかり通る擬似  
マルクス主義のように、ブレヒトはブレヒト  
でなくなってしまうだろう。ブレヒトは古く

ならなければならない。それにもかかわらず  
現代の演劇界にブレヒトが依然大きな影を投  
げているのはなぜだろうか。ブレヒト批判自  
体、この大きな影に対する数々のアンチテー  
ゼであり、その中から新しい歴史段階の人類  
社会を的確に反映し、描く作劇法が出てきた  
らそれはまさに現代演劇の再生であり、発展  
といえる。ブレヒトが死ぬ、ことはブレヒ  
ト演劇の再生、発展にもなるはずだ。しかし  
その際、真の意味でのリアリズム演劇をめざ  
す私たちが確認しておかなくてはならないの  
はまず、現代をどのような時代としてとらえ、  
それとどのように主体的にかかわり合つて行  
くかの基本的立場である。ブレヒトは現代を  
変革の時代としてとらえ、その時代にふさわ  
しい変革の演劇を模索する中で演劇の変革、  
作劇の革命へと展開して行つた（といつても、  
演劇が世界の運命のように旧体制を破壊して  
くれるのではなく、この世界を変革する位置に  
いる民衆と演劇がかかわり合う。民衆が変革  
の主体として新しい世界を作る喜びを手にし  
ることができるよう共同作業を進める——こ  
のような方向性を基礎にした変革の演劇であ  
ることはいまさら言うまでもないことだろう。  
だからこそブレヒトは大きな影を現在でも投

げ続けているのではなからうか。

従ってブレヒトを超える試み、反ブレヒト志向も現代私たちが生きているこの世界を改革する立場に立つかどうかで次元が異なってくる。それは社会主義段階に踏み込んでいる社会においても事情は基本的に同じだと思う。「母」の劇中歌を「社会主義讃歌」とせず、共産主義讃歌、としたように、人間が人間を抑圧するすべての機構(国家自体も含め)の消滅、人間を完全に解放しあらゆる面で発展できる状況の創造と保証のために変革を継続しなくてはならないからだ。この変革の立場から新しい創造方法を模索し合うことは誠に実り豊かなことではないか。ブレヒトが古い、死んだの問題ではないのだ。費はこの世界の現状認識にかかっている。

クレツはDDRの演劇ジャーナリスト、ウルスラ・ラインホルトのインタビューに興味深い応答をしている。少々長くなるが引用させていただきたい。U・ラインホルトはクレツとブレヒト劇の関係を問いつつながら「なぜ貴方は、処置、から始めたんです?貴方の仕事の中で階級闘争の倫理的問題はブレヒト教材劇と結びつくような作劇上の可能性とは

あまり関係ないんじゃないの」と聞く。クレツの答えは次のようになっている。

「仕事のもらえない俳優をやめて労働者になったころ、私はブレヒトを本当に知りませんでした。キップハルトとの共同作業の中でいくつかの引用文を知った程度です。当時の演劇状況ではホルヴァートやフライサイが真正銘の「進歩」で、彼らの仕事はベケットやイヨネスコの形式主義の波に対抗する真正銘のヒューマニズム化を意味しました。しかし彼らの形式上の、作劇上の方法は当然のことながら今日では汲み尽くされています。……私は新しい見方、新しい形式上の可能性を総合的に生み出す「展開」を追及しなくてはなりません。……そのようにしてブレヒトを読み始めたのです。マルクス主義演劇の中核的戯曲としてしばしば「処置」が紹介されたのは驚ろきでした。……私の中に火の手が燃え上った。それは私にとって一つの展開点でした。ブレヒトとは比較すべくも無いが、一九三〇年ごろ彼が抱いた思想と類似したもの、私は一九七五年に持ったと思えます。文学的な比較を引き出すつもりはありません。ブレヒトについてはそれはできないことです。しかしこの展開点——ブレヒトがア

ジテーション戯曲を書き、三文オペラ、にももはや満足しなかったように、私も自分の「家畜小屋」に満足できなくなった——は私にとって重要な見方をもたらすものでした。そこで私は「母」に熱中して多くのものを得たし、より初期の作品群に関心を集中し、この「処置」というわけです。そこから、私は今日のマルクス主義的見解の中で何が正しく、何がそうでないか(ブレヒト批判に関して「筆者註」を率直に言うべきだと感じました)。

一年前の記事(DDR「今日の演劇」誌)だが、これを見ても「民衆のために、民衆の喜ばない劇を書く、いわゆる新しい民衆劇、の作家といわれるクレツの「反ブレヒト」の内容はもっと詳細に検討してみる必要があるのではないか。外国文学の専門研究者ではないので「反ブレヒト」潮流の一般的紹介までする力量はない。出版されている文献などを頼りにするだけだ。しかしヨーロッパにおけるブレヒト受容、研究は日本とは比較にならないほど多面的、組織的に継続して進められ、試みられてきている。その中で「展開」へのアンチテーゼとして提示されるブレヒト批判をその生成過程を軽視した形で移入するとしたらどうということにならうか。その

もたになっているブレヒトを不十分にしかつかめないうま、そのアンチテーゼを成熟した果実として、新しい演劇潮流としての側面だけをとらえて感激してしまつたら、果して新しい時代にふさわしい新しい演劇創造の道は見出せるだろうか。西独の演出家ベーター・パーリッチは「ブレヒトは使用済みか」とのインタビューに答えて「なんですって、彼が叙事詩的とか、弁証法的とかいった劇場はおよそまだ、まったく試されてもいませんよ」と語っていることは八木浩氏も紹介している。いはんや日本においてをや、だ。

さて国際演劇会議でのベルナルド・ドール報告である。私自身その場にいたわけではないし「演劇会議」誌以外、詳述してものがないので、全面的にはやし氏の報告をもとにする。現代の社会が「新しい合意に向う」とは考えられない。ますます断片化する。断片下は資本主義、社会主義を問わず進む。この理解は一面では真実である。しかし問題は断片化が進む根源を探求し、それと対決する観点ではないか。それなしに「断片化」の現状認定と、それに対する処方として「一般的運動」ではためである。これからは特徴

的な演劇でなければならない。……断片化に対応して行くためにはますます地域化して行くだろう。即ち観客とより密接にならなければ今日の演劇は成立しない」ことを打出すだけでは、演劇によって世界(たとえ断片化されたミクロコスモスであっても)を描き、そこに生きる民衆と何かを作る(する)楽しみ(苦しみ)の共同作業はより困難な状況に追い込まれる。むしろ逆に、断片化された世界に演劇自体がとりこまれ、新しい演劇を再生させる前に解体させられる危険すら出てくるのではなからうか。

観客とより密接になることは現在に限らず、演劇の発生期以来、いつの時代においても重要な課題であり、それなしには演劇自体成立たない。要はその密接な関係が社会体制のいかに問わず稀薄になっているからこそ、そのような問題提起がなされたはずだ(もともと、ソ連で反体制演劇の拠点とされているモスクワ・ドラマ・コメディ劇場、いわゆるタガンカ劇場はユーリ・リニエビモフ演出のもとに観客との熱い関係を作り出しているといえられるが、そこではブレヒト作品あるいはブレヒト手法が新しい活性剤の中心になっている事実にも留意したい)。やはり観客との

関係を変換化する根源、社会の断片化自体にメスを入れ、その根源を探らなくては処方箋自体がその場しのぎのものになりかねない。

資本主義が進行する過程で資本は益々、国境を突き破り、その血みどろの死闘を国際化(社会主義国にまで)している事実は私たちの周辺状況の「生きた教科書」が教えてくれる。それにもかかわらず社会は断片化して行く。文化、政治、教育等々あらゆるものを体制の下請機構として極度に分業化、専門化する中で「断片化」も当然ある。それと同時に、資本主義体制の巨大化、一般化、国際化に対する民衆意識(とり込まれた文化状況)の側からの無意識的なレヴォルトもあろう。また政治的にはかつてのアメリカ帝国主義を中核とした強力な一元支配がベトナム戦争の敗北や資源・エネルギーをめぐる経済構造の変化などを通じて、新しい、より効率的な支配体系を求めての再編成過程にはいつていることも社会の断片化を進めている一因であろう。

社会主義国でも進行する断片化——人間の全的解放をめざす社会主義が現実にはまとも機能していない状況。そこからくる社会主

義それ自体への絶望、挫折感。資本主義国との交流、平和共存、競争関係が社会主義国としての一元的発展を不可能にしている事実。それに追い打ちをかけるような中ソ対立に代表される社会主義国の不団結。社会主義国内部の官僚主義、文化統制、個人崇拜など本来あってはならないはずの退廃現象に対する民衆のレヴォルト等々がその根源として考えられる。しかしこれらの人間社会の実態——民衆が無意識のうちに底無し沼に喜々として足をとらわれている、真に、変革を必要としている。状況こそプレヒト流に言えば演劇人の心に火を燃えさせたものではないか。だが肝心の民衆と演劇との間に寒々とした風が吹き抜けている——演劇の存立それ自体が問題になっている。

それを打破するための創造方法として、全体性を拒否する日常性、であり、断片化に對する地域化、を提示するのは結構なことである。変革が簡単でなく、演劇への投影も複雑になっていることはある意味では世界の矛盾がそれだけ深化していることの証左でもあろう。従って、変革が困難であればあるほど変革の必要、それへ迫る道筋を再構築する努力を民衆に訴えて行く立場を共通の出発点に

するならば、日常性は単なる日常性ではなくなる。日常性の中にひそむありふれた、情性化したフアンズムを抽出する強力な武器となるだろう。その作業の中で主観的には拒否しているはずの全般性すら新しい形で芽生えてこざるを得ない。ア・プリオリに全般性を置く必要はない。日常性を扱いながらその中に非日常的なものを発見する作業——それを描く様式の問題は別にしても、その作業自体、大いに変革とかかわり合うものであり、プレヒトにも通じるものではないだろうか。

地域性、にしても同様で、すべての文化それ自体が本来、それぞれの地域に根ざす形ではなく生まれなければ、民衆によって作られ、変えられるものにはなりえない。しかし問題は地域から出発したものでも決して地域の限界内に止まり、その中でのみ強力な薬効を発揮するものではなく、必然的に地域のワクを破って国際的な一般的な側面を身につけるものになると考える。個別の、細分化された、地域の演劇、運動であっても、それが現代を描く作業にたずさわっているものであれば（描く対象が中、近世であっても）必ず一般化の力学が働く。

本来、その逆もまた真であるはずだ。地域文化運動が脈打っている土壌にはどのような、一般的、なものも消化する力があるし、また新しい演劇創造の芽をも生み出せる。そのような例としてかつて和歌山県湯浅町を根拠にした劇団いこらの活動には目を見張るものがあった。現在病氣療養中と聞く栗原省氏は決してプレヒト劇をめざす作家ではなかったが、いまふりかえてみると多分にプレヒト的方法に通じる作劇、演出でこの劇団をリードしていたように思えてならない。結果的にはあるが、感情移入的な情景設定の中に仕込まれた大きな異化、考えさせる舞台など、資本主義自体が巨大に国際化、一般化するのに対応して演劇自体、好むと好まざるとにかかわらず世界化、一般化する側面を持つ。私たちの描こうとする世界や人間が資本主義的一般化の波を受けているからである。

表面にこそ出ないものの、これらのプレヒト批判と関連する形で浮かび上がってくるものに作劇様式、叙事詩的作劇法もある。日本人は感情移入乏居の方を好む。クールな叙事劇では客は満足しない、との批判はひんぱんに耳にする。そうだろうか。感情移入問題

ではプレヒト自身が誤解の犠牲者ともいえる。「叙事演劇はあらゆる感性に反対している。しかし理性と感情を分離するなんてできないことだ」とする通俗的批判に対し、プレヒト自身次のように言っているのは興味深い——「叙事演劇は感性に反対しているのではない。むしろそれを研究し、それを作り出すだけで放置したりしない。理性と感情の分離は実際のところ理性をすっかり閉め出してしまった平均的な劇場の責任である……。理性を閉め出した感情移入劇は太平洋戦争中、戦意昂揚のため大いに動員された経験を持つ。その戦意昂揚が取りは労働運動であり、社会主義建設に置き替えられたところでそのベネチ性は本質的には変わらない。ある一つの判断がいくつかの選択可能性の中から考え出され、それを生き方として楽しみ（苦しみ）、責任を負うものではないからだ。それに対置される叙事演劇について日本ではまだまだ検討がなされていない。よく知られたゲーテの論文「叙事詩と戯曲について」も実際の作劇との交差点上で検討された経験はあまりない。プレヒトの叙事演劇についても然りである。

しかし日本の伝統芸能はほとんどが語り物の系譜上にある。実に身近なところに叙事演

劇とかかわりを持つモデルがあるのだ。変革の演劇、の創造に大きくかかわったプレヒトの叙事演劇を検討するためにも、変革をめざす私たちの立場から能など日本の伝統演劇の中にある演劇的可能性を探求しなくてはなるまい。プレヒトはよく知られていることだが、能「空行」を参考に教材劇「イエスマンとノーマン」「処置」を書いている。民族伝統、地域に根づく演劇の「根」の部分にも実はプレヒトに触れる部分があるのではないか。

プレヒト無効論に傾斜する前に、まだまだ試み、学ばなくてはならないテーマが私たちの周辺にもあるのではないか。プレヒト批判論をより深く理解するためにもそれは役立つと思うのだが、どうだろうか。

× ×

日常生活レベルで、地域演劇運動の一環としてプレヒトをとらえ直す試みが関西で実現した。神戸の劇団どころによる一年半がかりのプレヒト連続上演である。

とりあげた作品は①「小市民の結構式」（79年2月23—25日）②「カラルのおかみさんの縁」（79年9月22—24、29、30日）③「例外と原則」（80年2月16—17日、22—24日）④「処置」（80年6月7、8日）で、いずれ

も場所は神戸市兵庫区大開通の「どろの老居小原」、演出は合田幸平。どうしては「カラル」を71年に、「第三帝国の恐怖と貧困」を73年に上演した経験はあるが、このような形での初期小形式作品との系統的なとり組みはこれまでとは次元の異なる実りと試練をもたらした。演劇と変革の課題に向き合わされただけでなく、劇団の存在意義も含め演劇運動それ自体の点検が余儀なくされたからである。それらは観客との比較的長い公演後のディスカッションでまず試され、劇団の学習、プロレの場で深められたが、観客の日常感覚によって劇団が、プレヒトが容赦なく粗上りのせられたのは貴重な経験だった。片隅からではあるが、私はこの連続上演に接することができた。四作品の翻訳を担当された八木浩氏は当然のことながら事前学習などに大きな力を投入した。

各作品の劇評としては小松徹氏や猿渡公一氏のものがすでに掲載されているので、ここでは主として前に述べた部分とかかわる、プレヒト評価、の視点から報告したい。プレヒトは有効か、との問いかけはこの連続上演を通して劇団メンバーが自分たちの生活、職場とのつながりの線上で絶えず討議し合ったテ



トがもつとも嫌った小市民の上品な娯楽にな

トがもつとも嫌った小市民の上品な娯楽になつていと報告されたりするヨーロッパの一部の演劇状況とは幸いなことにどろろは大きくかけ離れていた。くだらぬおしゃべりしかせず、日常生活の無意味さをグロテスクに露呈するこの作品を演技陣はごく自然に、従って未熟ながらうまくこなした。次々と手製の椅子が壊れて行く。カップルがはいったベッドまでメリメリと音をたててつぶれるラストシーンにかがせるように、デフォルメした運命シンフォニーを流した。フルトヴェングラーの全盛期、彼の「運命」に源を流すドイツ人が多かったこと、そのドイツがナチスに制圧されてしまったことへの皮肉ともとれる。では現在の日本は……。

エンゲルスはドイツの小市民性を「挫折した革命の果実」と言うが「挫折した革命（大半の国民を巻き込んだ本格的な民衆革命）の歴史すら持たない我々の小市民性とは何だろう。上演後の観客の反応のうち印象に残るのは「ゼニをとつても恥しくない芝居」「ブレヒトにこんな芝居あったとは知らなんだ」など。ブレヒトへの異和感に特に問題にならなかった。

「カラールのおかみさんの銃」から劇団メンバーの疑問、反撥、討論は本格化する。この演目をいまよりあげることとも関係して、若い層は「なぜ銃をとるのか？私たちはいま平和のために努力しているのではないか。反動と闘うためといっても、結果的には反動と同じことをするのではないか。平和のため、反動と闘うため」としたスローガンには注意する必要もある」など実にクールな、耳を痛めるべき意見が続出。また一九三六年時点のスペイン市民戦争を直接の題材にし、現在進行形で描いているだけに当時の観客にはびしびしと響くものを持っていただろうが、現在の観客にはどれだけの訴える力を持っているか疑問だ。第一、フランコ将軍がどうい人物だったのかということも含め、作品の背景が現在の若い人々から遠ざかっている問題の指摘。さらに、演技サイドからも「突然変わるおかみさんはやはりわざとらしく、どう演じたらいいのかわしむし、カラール役の沢村夏子」や、詞章の中にみられる日本人離れた思考や表現、数多くの記号、シンボル——例えば夫の旗、息子を包む血の旗、銃、帽子、等々をどう肉体化するか、などの議論が噴出した。

劇団では「カラール」上演のために新しく

翻訳した資料とも格闘した。ルット・ベルラの各場面ごとの解説・討論、ベルリナー・アンサンブルの演出資料、ヴァイルフリート・アーテリングの註解（一九三六—三七年のスペインのできごとについて／外国はどうしたか／反ファシズム作家によるスペイン市民戦争支援／なぜテレサ・カラールは息子たちが反ファッショ人民戦線にはいつて戦うことを禁じたのか／テレサ・カラールの平和主義的局外中立は正しいか／スペイン市民戦争はどのような特徴を持っているのか／テレサ・カラールにとってスペイン戦争の形で表わされた階級闘争において中立は可能か／フアンのは死はテレサ・カラールの啓発にとってどのような意味を持っているのか）などを準備。すでに出版されている書物、資料も当然活用。

特徴的な試みとして訳者の八木浩氏は台本の下段に註を付記した点があげられる。歴史上の事件、地名、人名、素材にもなったシンドグの原作「海に行く騎士」など多くの予備知識が必要になる。それを補うために、多くの研究文献をもとに註を付けたわけだが、それが討論を進める際にも大いに役立った。

討論やアローベの過程で出された一応の了解点は次のようなものだ。①いまでもこの作

品はアクチュアルだ。寝ている人、安逸の夢をむさぼる人をめざまめさせる。しかしどうすれば現在の時点に生きる人にそういう力をよみ感じやすくするか——それが問題である②現在進行形演劇の問題——話されている時間と話す時間、演じられている時間と演じる時間が一致している。しかしその一致を打破する必要がある。時間と空間を打破してみるがよい③なぜいまごろ鉄砲を？／反革命、戦争、党派の闘い——その恐ろしい渦の中から、その雰囲気のみでこの作品はできあがった。しかし鉄砲の轟きがこの作品の意義なのではなく、そこから救い出されたもの、そこをくり返して生まれ、遠い未来へとさし出されたものが「カラール」の意義だ。ではそれは何か。それは論争である④これは閉じられたアリストテレス演劇か——「カラール」はアリストテレス的であるとともに非アリストテレス的である。これほど図式性を取め、中立論争の中味を豊かにし、ドキュメント的にして人民戦線を十分に描いている点に注目すると、もはや決して非叙事的とか非教育劇とかいえない⑤テレサの突然の変化——彼女の過去の積み重ねの中に変化の芽。弁証法的転化——

スペイン市民戦争は単なる過去の歴史でなく、ナリ・アジエンテ政権のビノチエト一派による破壊などにも共通する部分があり、まさに現代の課題であることについても了解し合い、演出に生かされた。

「例外と原則」では「カラール」での徹底討論がアラスしてか、作品自体の理解にとまどうような困難はなかった。もちろん、現在の資本主義社会の支配形態が「例外と原則」に描かれているのと共通する面もあるが、同時に、やさしく、支配収奪されていることを苦痛に感じず、眠り込まれるような尖鋭化しない。巧みな支配の仕方にも注目しなくては現代に訴える力が弱くなるのが指摘された。その結果①商人を演ずるのに傍若無人の資本家の属性だけを強調するのは正しくない②中間管理者、未組織労働者に対する組織労働者、増大するインテリ労働者ときびすを接するような案内人の立場上の揺れ。を織密に描く必要がある③クリーリ自身、決して奴隷状態だけを強調するのではなく、インテリ化した労働者の側面を暗示する努力がいる——などを演出上の留意点としたようだ。それはクリーリに保木政男、商人に仁科志郎を当て

た点にも表れた。さらに、凝縮した舞台作りの参考にするために、劇団の何人かは神戸・淡路神社の能楽殿に能公演を見に行き始めた。できあがった舞台は——中央から前、両脇の三方へゆるやかに傾斜した正方形のステージは能舞台を連想させるもので、これを一瞬の転換で砂漠から宿場、廷庭へと変化させて行くには効果的なしつらえだった。現代日本の階級関係、労働現場を舞台上に投影しようとの演出意図はある意味ではその意図以上に具現化されたといえよう。

一見、階級対立がなくなったような状況。中流的状態の維持を夢みて、変革へのかかわり合いに消極的になりがちな市民層。経済危機ののり切りに際しては鍛錬を積んだ親愛の笑みと、相手を凍りつかせる威嚇の二つの顔で労働者や市民に語りかける——「会社は君たち以上に苦しいんだ。お互いが生き残るために努力してくれ」と。このような対立関係のあいまいな状況、わかりにくい社会矛盾を商人、案内人、クローリー三人の関係に置き替えた演出だった。

どちらはこの不透明な矛盾関係のベールを観客とともにがし、対立の眞の姿、その背後にあるものをこの作品の中に探ろうとしたよ

うだ。クローリーが射殺される瞬間、両脇に控える演技者たちは自らも観察者として半立ちの状態でのこのシーンを凝視させたのも一つといえよう。

しかしこれには当然のことながら観客席からいくつかの批判、反論が寄せられた。その代表的なものが西独の俳優で仮面作者のM・ヒルク氏である。「対立関係の鋭さに欠ける。無害な危険性のない舞台作りだ」「観客が感じにくい演出」といい「残酷さがほしい。もっとモダンな衣装を採用するなどして異化効果を高めたらどうか」「いくつもの(状況の)小さい弧を大きな円に完結できていない」などを指摘した。

演劇界の一つの潮流としてアルトの残酷劇の系譜があり、それが演劇の新しい可能性を引き出そうとした試みであることも否定できない。演劇による残酷さの表現についてはすでに千田是也氏も「二十世紀の演劇」でマンフレート・ヴェクヴェルトの意見を紹介している——リヴィング・シアターなどの戦争やブルジョアの福祉文化に対する抵抗としての意義、その勇敢さ、自由奔放さ、挑発力は大いに買っている。だが、この連中が演劇の

効果を直接的・原始的効果だけに、目に見える残酷さの表現だけに限っていること、そのために演劇の認識能力が弱められることには同意できない。ブレヒトもまた必要とあらばどんな残酷さをも描くだらう。だが彼が何よりも描きたかったのは目に見えぬ残酷さ——物理的に姿を見せぬ、その犠牲者たちさえ気づかずに、その腕の中に進んで飛び込んで行くような残酷さ、あらゆる残酷さの中で一番野蠻な(資本主義的練外)という残酷さだった。暴力や残酷さ、マゾヒズム的行為までを舞台に持ち込んでも、そこから生ずるのは野蠻との同一化によって呼び起される昔ながらのカタルシスにすぎない——。

私もこの意見に同感だが、ヒルク氏の「日本の商社が発展途上国でやっているような行動は残酷さをもって描くのが適切ではないか」との所論には考えさせられるものがあることも否定できない。「理性を行使して現代人に考える楽しみ」を期待したブレヒトに対して、より強力な刺激にも不感症になってしまった現代人のなかに生きるミュラーはここ十数年米、極端にグロテスクなモデルを提供して観客の意識に訴えかける作風が目立つて

イナー・ミュラーの「ブイロクテート」東京上演の際のチラシ)といわれるH・ミュラーはブレヒト同様、数多くの古典(ギリシャ劇やシェイクスピア「マクベス」など)改作や、DDRにおける歴史と生産のドラマ、新しい教育劇などで知られる作家である。残酷劇あるいはブレヒトとの関連でいまヨーロッパで注目されているミュラーが何らかの形でヒルク氏に反映したともとれるが、どちらの舞台がそのような演劇論争の糸口を作った意味は大きい。ブレヒト、批判、も具体的な形で進められるべきだと思うからである。

そして「処置」。当然のことながら活発な討論が繰返された。ほぼ同時代に同様なテーマで書かれた久保菜「中国湖南省」との内容および形式面からの検討をまず行った。叙事詩劇という形式面での理解も深めるため、能楽など日本の古典芸能を構造面から話し合い、特に「空行」については内容面にも検討を進めた。

その中で、一九三〇年時点での中国の革命運動をそのまま重ね合わせる形の上演では歴史的にあまりにもかけ離れた、時間の壁に妨げられる。モスクワからやってきたアジテ

ーター、工作に失敗したことで身体的抹殺を予解する若い同志、などの問題にはかんかんがくがくのデイスカッションが繰り返された。「殺すなんて許せない」「若い同志はもともと人間的感性を持った人ではないか」の素朴な疑問から出発した劇団員が多かった。しかし、個人を抹消して仮面をつける指示、四人のアジテーターが次々に若い同志、党支所長、二人のクローリー、監督、二人の紡績工場労働者、警官、商人を交替で演じる作劇などから歴史的時点を超えて事実の本質を抽象したものをおかき出すか、に討論の重点が移行した。

台本の下段に八木浩氏によって付記された構造面からの分析(能などとの比較)、他のブレヒト劇との連関点などのメモがここでも役立った。仮面はM・ヒルク氏が製作。音楽は「例外と原則」同様、多田泉氏が全面的に協力、特に「舟曳きの歌」、「商品の歌」は実際の舞台で効果を発揮した。

しかし、アローベの段階で一部演技者から「若い同志が射殺される劇所では涙が出て困る」など演技上の問題点も提起され、若い同志の死が依然重くのしかかっていることを中心に話し合いが繰り返された。ブレヒトが生

前、「処置」の上演を許可しなかった理由も話題にのせながら理解を深め合ったが、理解が進めば進むほどある意味では、傷だらけの状態になって本舞台を迎えた。ゲストウスの形成でもむだな動きを削り尽し、凝縮されたものになった。観客はいやおうなしに舞台と対峙せざるを得ない、逆の面から見ると賛否の分離が際立つ結果となった。

上演後回収されたアンケートのうち一部を紹介すると、革命はこれほど厳しくなければならぬのか。そうだと思う。しかし私自身は甘い(20代、男、会社員)／革命はこうしないと教えることはできない。やはり個人、個人が勉強してそれを他に広げる、その一つの一つのつかりを示したものでしょう。問題がはっきりしていて、恐しく現在と似たところもある(50代、男)／射殺——その時代背景や情勢を考えるとやむを得ないのではないかとみんなの意見を聞いた後に考えます。後の討論でよくわかってきました。コーラスがわかりやすくよかった(20代、女)／若い同志が涙を克服し、観客が死して成れ。という気持ちになれたらこの劇は成功したといえる。 unnecessaryなものをとり除いた照明、装置

などエキセントリックなものを結合しており、それが美的にもよかった。能の影響がみられ、緊張と抑制の場面効果、叙事化に成功している(20代、女)／いきなり共産主義を表現された感じで解答を出すには少し時間がある。あの時、射殺しなければどうであったか。結果的には負けていても、真実は孤独なり、で真理に生きて行く方が人生としては意義があるように思う。バックが黒で、面の動きが白というのはとてもよかった(10代、男、学生)／共産党とは何かが問われていたが、へたをすると誤解を生む内容だった(30代、男)／共産主義とは何か—あまりに冷たく、非人間的な感じを受けた(20代、男)／人間一人より党全体を重んじ、ひょっとしたら表現の自由の抑圧にも関連するのではないか。浅間山荘事件の赤軍派と相応するのではないか(20代、男、学生)——など。このほかにも内容、演技面などから評価する意見があったが、批判的意見を重点的に選んでみた。また、上演後合評会もほぼ同じ傾向で、肯定的なものとしては、仮面をかぶると顔の表情が見えないので身体行動を全体として集中して見た。芝居って体なんだなと思った／職場が厳しいのでよくわかった。感動した、など。否定的な

ものとしては、若い同志を殺して石炭坑の中へ投げ入れる。恐ろしい／宮本委員長のリリシ。事件と関係があるのか／共産主義とは何か、ということを根本的に問いかけていると思うが(上演する)時と場所を考えないと、共産主義は人間性をつぶすのではないか、との誤解を生じる——などだ。

さて、どろはどうなったか。演技面での成熟など芝居作りの力量がこの連続上演を通して大きく伸びた点ははっきり認められよう。ブレヒトが初めてという観客と、がっちり組み合えたのも成果の一つだ。しかし十年來の劇団メンバーだった南原昭雄氏が「処置」を最後にどろを去った。「例外と原則」では合田氏と共同演出、「カラルル」ではペドロを、「処置」では工作者の一人を演じていた。「処置」をやる中で勤務先の組合運動に専念すべきだと感じた、あるいは以前から退団を申出していた、などと聞く。連続上演にも全力を投入していたメンバーだっただけに一言報告すべきだと考えた。

それによってどろ内部に動揺などもなかったことも付記しておきたい。

× ×

地域に根を張りながら、日常的演劇の試みとしてブレヒト受容に挑戦した劇団どろを一つのケースにした。数々の疑問を持ちながらもブレヒトはやはり現代に鋭く問いかけている点については了解し合えたように思う。

日本の例ではないが、ファイリピン・マニラ市で「コーカサスの白黒の輪」が土着のタガログ語で上演されたとの報告も聞く。民族色豊かな衣装、舞台装置で、観客も土着芝居と同じ親しみでこの舞台にエールを送ったという。地域に密着したブレヒト上演はいろいろな地点、形で試みられているのではないだろうか。

新しい形での保守化、反動化が進行している一九八〇年の時点で、こぼやしひろし氏が「建前ではなく本音で話合おう」「観客から見離されてどんな強がりも言ってもそれは大の遠吠えなのです」とのふり絞るような叫びは新しいほどよくわかる。全く同感だ。演劇集団を維持し、公演活動を進めることがどれほど苦しく大変であるか、も。

だからこそ、現在の夜の道の演劇状況をブレヒトは古くなった、有効でない、のブレヒト減価論に短絡させるのではなく(減価論

がいかんにかんてきに見えようとも)、この困難な演劇状況それ自体の根源にメスを入れようではないか。演劇運動を過激させている根源の除去—それは私たちがめざす根底からの変革とも関連してくるはずだ。いわゆる大衆文化に足をすくわれ、演劇運動とつながりを持たない民衆に私たちの生の声を送り届けるためにもありとあらゆることを試みようではないか。その一環としてブレヒトも。

考えること、世界を変えることが民衆の喜び、娯楽として受け入れられる日だって来ないものとは限らない。それをなるべく早くするために手をとり合おう。

(了)

〈編集部より〉

後日嶋田さんより、冒頭の人名の呼び方については国によって違う場合があるので固執はしないとの釈明がありました。

第18回 東京動くものの演劇祭

岡安伸治・作並演出

「太平洋ベルトライン」

◇演劇集団ぶどう

(11月22・23日 目黒青年館)

大橋喜一・作、垣内俊一・演出

「人の気も知らないで」

◇演劇集団土の会

(11月30日昼夜 池袋小劇場)

第四回土の会スケッチ劇場

「かたち」舞い

◇ブレヒトの会

(12月4・5日 千田スタジオ)

ユリウス・ハイ作、内田透・演出

「七面鳥舞い」

◇演劇サークル土くれ

(12月5・6日 郡勤労福祉会館)

小寺隆昭・作、福田悦雄・演出

「かけの巻」

恒例のこの催しも関係者の努力によって成果をあげつつある。参加団体の特色もそれなりに定着し、理解と協力の上に立った「論争」もさかんに増えて来た。新作と定評のあった既成作品との競合もたのしみである。

◇演劇サークル麦の会

(11月7・8日 郡勤労福祉会館)

水上勉・作、雪江勇・演出

「飢餓海峡」

◇劇団展望(11月15・18、22・25日)

阿佐谷小劇場)

集団創作、大沢郁夫・演出

「まひるのちようちん」その四

◇全通・全電通合同

(11月19・20日 郡勤労福祉会館)

芳地隆介・作、大島総・演出

「橋のある風景」

◇世に下乃一座

(11月20・22日 未踏橋古場)

なお、これの総合批判合評会は12月14日午後一時から、国民文化会議において予定されている。忌憚のない批判と充実した内容では、これまでも定評がある。

一 幕物特集についてのことば

本誌44号(八〇年四月)で呼びかけをした一幕物の特集のための作品募集は、十月末日で一応締切ることになったが、ものごとそう簡単にはいかないようである。六〇枚以内の一幕物で総列を布こう、などは往年のプロレタリア演劇の掛声のようで、宙に浮いてしまった。どうやらそういうこととしては作品は生れて来ぬらしい。英雄待望論で英雄など一人も出て来ぬのと一緒である。

というより、上演など考えぬ作者だけの一幕物の試作—そもそものところ、そんな思考はないのである。

良くも悪しくも書いたら上演するか、上演のために良くても悪くても書かされるというのが実情のようである。戯曲のキャラクターに対する考え方が変わってきたのだ。作品第一主義を考へるのは古くなってしまったらしい。

しかし、書きなさい、書くべきだ、あなたは書ける状況にある筈だと感しかけることまでが古くなってはいないだろう。

だから、これはつづけることにする。そしてそれに応えてくれる人の出るまで諦めない。ただ、そういう書き手が出てきたとき、嬉しさの余り、可成点が甘くなりそうな気がする。いつれにせよ、出てこぬのでは、始めようがない。といささか匙を投げ気味であるが、応募は皆無ではなかった。

栗本英章(劇団名芸)「夜明けの地下街」  
瀬戸 洋(劇団十年美)「櫻本人間」  
岡安伸治(世仁下)「太平洋ベルトライン」  
以上の三篇がほぼ期日に見合せて届いた。救数に几帳面だったのは栗木氏だけである。内容は、それぞれ、先ず先ずのところ面白いといつてよさそう。注文はあるにしても、よし、と感えてくれた有難さが先にたつ。

しかし、この三篇だけでは一冊の戯曲集としては一寸淋しい。かといって更に締切日を延ばすなどは礼を失するだろう。

そこで目下考慮中だが、今回の応募は、締切日までのこの三篇とし、最近送られて来て読むことのできた、これとは関係のない上演台本、かなり未定稿のものが多いが、たとえば劇団2月上演のかたおかしろう氏の「男どあほう大忠臣—楠正成伝」、劇団未来上演の和田登子氏の「今日よりも明日は」、岡崎演

劇集団上演の夏目つとむ氏の「無窮花と桜」など、そして未だこれからもあると思うが、そうした大きなもの、どれかとの配合という折衷案はどうかと思つている。黒沢氏も、たとえば、劇団さつぽろの力作「常紋トンネル」などが、そのまま消えてゆくのは忍びないと思つてた。ほくにも、最近とみに旺盛な筆力を見せつつある中野勤演の小板テウウ氏の仕事などにも関心がある。

しかし、これらを感えず「演劇会議」に掲載してゆくことは、のぞましいことではあるが無理である。

おのづから限界があり、その限界の中で、創作劇を、そして作家を興さなければならぬ。それと、ここで来どおりできないのは、劇団展望や草の実で成果を見せつつある集団創作の問題がある。

僅かながら、創作劇にも道がひらけそうだ。この46号につづいて、黒沢参吉氏の自伝の刊行になるので、身体も金も忙しい。暫らく時を借していただきたいと思う。

(坂坂桃彦)

わが演劇遍路

黒沢参吉自伝



- ロシア革命と同一年●画学生とモデルの子●ヤツチヤ場の幼年時代●鳥取の山河●少年紙芝居屋●初舞台●三好十郎との出会い●山手向いの歌●第一次川崎協同劇団●兵隊として中国戦線へ●第一次川崎建設座●風船爆弾●敗戦万才!...

この日、この地で、この人々と建設座—京浜協同劇団の創設者東り演議長—黒沢参吉が語る六〇余年の人生と演劇の遍歴史

演劇会議発行所より今秋刊行・定価¥2,200

あしがき

- ◇ゼミ特集号、多彩な顔ぶれて、何とか体裁がととのいました。あの感激は活字にはあらわしくないので、参加者のよろこびはおつたえできたと思います。
- ◇こばやしひろし氏の「アイレンツエ報告」で火のついたブレイト問題、さつそく、嶋田邦雄氏から、力が入ったお声がかかりました。これは今後とも発展させましょう。
- ◇「黒沢参吉自伝」—お待ちとおさまでした。十一月下旬上梓になります。あついで歓迎にみちた申込みが相次いでおります。
- なお、出版記念祝賀会を十二月十三日、京浜協同劇団で催すことになりました。年末多忙なときですが、皆さまのご参加をお待ちしています。
- ◇小包料金の募集、また来年からは郵便料も上ります。本誌発行も窮地に立たされました。目下その対策に苦慮中です。(もも)

演劇会議 四六号 一九八〇年十一月五日発行

定価 四〇〇円(送料二〇〇円)

編集委員 黒沢参吉・こばやしひろし  
九子礼二・仲 武司・藤沢 薫  
森本景文・坂坂桃彦

発行所 演劇会議発行所

川崎市川崎区渡田四一一一三  
款 坂 方

電話 〇四四(33) 〇七七五

誌代銀行振込は川崎信用金庫小田支店一三三五二七へ